

平成 31 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）

2019 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム

北海道の古代集落遺跡

記 録 集



道指定史跡 シブノツナイ竪穴住居跡（湧別町 佐藤雅彦氏撮影）

2020 年 3 月

北海道文化遺産活用活性化実行委員会

凡 例

- 1 この冊子は、北海道文化遺産活用活性化実行委員会が実施した「2019 年度地域の文化遺産普及啓発フォーラム」の内容を記録・公表するため作成したものである。
- 2 本件フォーラムは、上記実行委員会が平成 31 年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）の交付を受け実施した「地域の文化遺産次世代継承事業」のうち「普及啓発事業」の一つとして実施された。実施にあたり、次の機関の後援をいただいたことを記して感謝する。
北海道根室振興局 北海道教育委員会 札幌市教育委員会 根室市教育委員会
公益社団法人北海道アイヌ協会
- 3 2019 年度地域の文化財普及啓発フォーラムは次の日時・会場で実施された。
札幌会場 2019 年 12 月 6 日（金）14 時から 16 時 30 分 北海道大学学術交流会館講堂
根室会場 2019 年 12 月 8 日（日）13 時 30 分から 16 時 根室市総合文化会館多目的ホール
なお、このフォーラムに際して参加者に配布した「次第・発表要旨」を実行委員会サイトで公表しているので、あわせて参照いただければ幸いである。
- 4 この冊子の作成にあたり、講師・司会者及び来賓各位の御協力をいただいたことを記して感謝する。

目 次

凡例

目次

札幌会場の記録

第 1 部 研究成果紹介：古代集落遺跡の諸相	3
北海道と東北の古代集落の比較	4
秋田県内の埋没古代住居	7
オホーツク文化の集落遺跡	12
北千島・カムチャツカのアイヌ遺跡	17
第 2 部 討論：古代集落遺跡の価値	20

根室会場の記録

第 1 部 研究成果紹介：古代集落遺跡の諸相	29
北海道と東北の古代集落の比較	29
オホーツク文化の集落遺跡	33
根室海峡沿岸地域の古代集落と標津遺跡群 ..	38
北千島・カムチャツカのアイヌ遺跡	41
第 2 部 討論：古代集落遺跡の価値	45

奥付

札幌会場の記録



開会

高久事務局長 北海道大学学術交流会館に普及啓発フォーラムにお集まりの皆様大変ご苦労さまです。ただいまから、北海道文化遺産活用活性化実行委員会主催により「2019 年度地域の文化財普及啓発フォーラム」を開催いたします。本日の総司会を担当いたします、事務局の高久でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

主催者として今回のフォーラムの趣旨について簡単に説明させていただきます。北海道文化遺産活用活性化実行委員会の今年度実施します事業は、歴史資産を活用した普及啓発、歴史資産の情報発信、それから地域性を考慮したヘリテージ専門育成講座の三本の柱で事業を実施しているところでございます。今年の普及啓発事業は、地域の歴史・文化の特性を強く反映した文化財について広く道民の理解と関心を深めるために、埋蔵文化財を取り上げ、北海道東北部に多く分布する、国内地域には類例の少ない古代の竪穴住居遺跡群をテーマとした、普及啓発の事業として「北海道の古代集落遺跡」と題したフォーラムを開催いたします。

第一部では古代集落の遺跡について道外を含めた 4 名の講師の研究成果を紹介いただきます。第二部では、休憩を挟みまして、古代集落の遺跡の価値について 4 名の講師と司会を交えて討論をしていただきます。それでは、最初に実行委員会を代表しまして角 幸博会長より挨拶をいたします。

角会長 ただいま紹介いただきました角と申します。北海道文化遺産活用活性化実行委員会という大変長い名前の実行委員会でございますけれども、私ども実行委員会は、一般財団法人北海道建築士会、NPO 法人歴史的地域資産研究機構、一般財団法人北海道文化財保護協会の三者で構成しております。文化庁文化芸術振興費補助金地域文化財総合活用推進事業の交付を受けまして、北海道の地域の特性を示す文化遺産の保護、その継承と活用に取り組んでおります。

北海道には札幌の時計台をはじめ、近代化の過程を通じて多くの優れた建築物が残されております。私共もこれまでヘリテージマネジャーの育成事業などを通じまして、主にそうした近代の文化遺産の保存と活用に取り組んでまいりました。しかし、文化遺産に反映された北海道の歴史・文化の特殊性というものは、そうしたいわゆる開拓の過程だけにみられるものではございません。千年以上も前の先史時代からすでに、北海道には本州とはことなる歴史の歩みがあり、それが多くの遺跡として今日まで残され、またその歴史から生まれた文化の伝統がアイヌ文化にも受け継がれております。

今回のフォーラムでは、そうした古代遺跡の調査研究にたずさわる専門家の方々を道内外からお迎えし、本州や海外とも比較しながら、北海道の古代遺跡の特徴と、その固有の価値について語っていただきます。先ほど司会者のほうからも御案内がございましたように、フォーラムの題名を「北海道の古代集落遺跡」といたしました。北海道の竪穴住居群を中心とする集落遺跡から古代の生活文化を理解する多くの糸口が見つかるはずでございますけれども、そうした先人の残した遺産を我々がまだ上手に受け止めることができていないのではないか、継承できてはいないのではないか、というふうに考えております。そうした意味で、このフォーラムが、この土地に残された、他では見ることのできない文化遺産を理解し、それを継承していくことの意味についてお考えいただく、有意義な機会となれば大変うれしく思います。

師走の大変お忙しい中、このようにたくさんの方々にお集まりいただきまして、限られた時間でございませけれども、きょう一日、さまざまな観点から皆様方の興味の一部、さらにはスキルアップに、このフォーラムがお役に立てれば幸いです。今日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

高久 続きまして、来賓として北海道生涯学習推進局文化財・博物館課長よりご挨拶をいただきます。

文化財・博物館課長代理 皆様こんにちは。北海道教育庁の生涯学習推進局文化財・博物館課に勤務をしております西脇と申します。本日は主催者からこのフォーラムに当課の相川課長をお招きいただき、まことに有難うございます。残念ながら現在道議会の会期中で、相川は本日、道議会関係の用務に対応しており、本人がこの場で御挨拶できませんことを申し訳なく存じます。

道教育委員会では私どものセクションで文化財の保護を担当しておりますが、言うまでもなく、文化財は役所で書類上の管理をしていれば保存されるというものではありません。文化財を将来へと守り伝えていくために、その文化財が所在する地域の社会が総がかりで保存活用に取り組んでいくことが必要である、といったことが一昨年の文化財保護法の改正でも確認をされております。

この改正により、地域において文化財の所有者の相談に応じる、あるいは調査研究を行う、そういったことをする団体を、市町村が「文化財保存活用支援団体」というものに指定することができるようになるなど、文化財の保護に地域の住民がより積極的に関与する道が開かれております。今回のフォーラムも、道内の民間団体で組織された実行委員会が文化庁の経費支援を得て、道内に広く共通してみられる類型の文化財の価値を総合的に普及する、という趣旨で実施されるということで、とかく個別の市町村の範囲内にある個別の文化財の保護を優先せざるを得ない自治体、行政の立場を超えた、貴重な取り組みであると存じます。

北海道の埋蔵文化財の場合特にそうですが、それがいつの時代のどういうもので、どのような意味を持つか、といったことを直接言葉で説明した同時代の文献というものが存在しないことが普通です。したがってその文化財としての価値は、主に考古学的な研究を通じて明らかにされていくことになります。本日のフォーラムでは、まさにそうした調査研究の専門家の皆様が集まられて、北海道の地域性を示す文化財の固有の価値を論じていただけるということで、私どもも大変を期待しております。広い視野から北海道の古代集落遺跡の特性を論じていただき、参加者の皆様にも、我々の足元の文化財が持っている固有の価値を見直していただく貴重な機会となることを願うものでございます。

以上、粗辞でございますけれども今回の事業に際し、北海道教育委員会からのお祝いの言葉とさせていただきます。有難うございました。

高久 有難うございました。ここで日程について説明をさせていただきます。1 ページをお開きいただきますとそこに予定が書いてございます。15 時 30 分で休憩を取って、第二部の討論の終わりについては 4 時 30 分を予定しております。よろしくお願いをしたいと思います。それからお配りしましたアンケートにつきましては、お帰りの際、明年度以降の参考とさせていただきたいと考えていますので提出にご協力願いたいと思います。それから最後になりますが道民カレッジ連携講座として位置付けてございますので、北海道学 2 単位となりますので、カレッジの手帳をお持ちの方は受付のほうまで提出をお願いします。それでは司会を澤井先生に交代いたします。

第 1 部 研究成果紹介：古代集落遺跡の諸相

澤井 皆さんこんにちは。これから司会を引き継ぎさせていただきます澤井です。お手元の資料の 2 ページ 3 ページを御覧いただきたいと存じます。講師の紹介出てございますが、右側のほうに司会者という欄がありまして、自己紹介をと言われておりますので簡単に自己紹介をさせていただきます。

1964 年根室市で生まれました。北海道大学大学院修士課程修了とありますけれども、大学の学部を卒業した後、北海道ぎょれんに 12 年ほど勤務してから大学院のほうに進んだということで、サラリーマンを 12 年やってからこちらの分野に入りました。主にアイヌ文化につながる擦文文化、皆さん耳慣れない言葉かと思いますが、だいたい奈良時代、平安時代あたりに当たる北海道の特有の文化ですけれどもそれについて勉強しています。本日はよろしくお願いいたします。

お手元の資料ですけれどもこの「古代集落遺跡」という冊子、それから「北海道の古代集落遺跡群」という大変インパクトのある四角い竪穴住居跡がそのまま埋まらずに残っている、こういうオールカラーの冊子が 1 冊、それからアンケートと、あと質問用紙がございます。登壇者の御発表を聞く中で何かお聞きになりたいことがありましたら記入いただいて、休憩時間に受付の方にお渡しください。討論に充てる時間が大変短くなっておりますので、一つ一つの質問に一人一人の先生がお答えいただくというスタイルは取りにくいかなと思っております。取りまとめさせて頂いて質問の多いものなどから討論の材料に供していければ、と考えていますので御理解のほどよろしくお願いいたします。

それでは最初の御発表をお願いしたいと思います。最初は八木光則先生でございます。2 ページ目の一番上の段に経歴が書かれております。岩手大学平泉文化研究センター客員教授でございます。お生まれは1953年、北海道八雲町でお生まれになり、立正大学卒業、盛岡市教育委員会に勤務を経て現職。現在主に古代蝦夷や城柵、集落遺跡の研究のほか、岩手県内の近現代の石碑調査を実施しておられます。主な著作は『古代蝦夷社会の成立』『いわて民衆史発掘』『北奥の古代社会』などがございます。それでは八木先生、宜しくお願いいたします。

八木 皆さん、こんにちは。御紹介いただきました八木光則と申します。八雲の生まれ、高校時代まで八雲でのんびり過ごしていました。今日北海道でお話しをさせていただくのは嬉しいことでもあります、逆に緊張もちょっとしております。さて時間もありませんので早速入りたいと思います。今日は北海道と東北の古代集落の比較ということで、私の住んでいる東北とこちらとの比較をしてみたいと考えています。

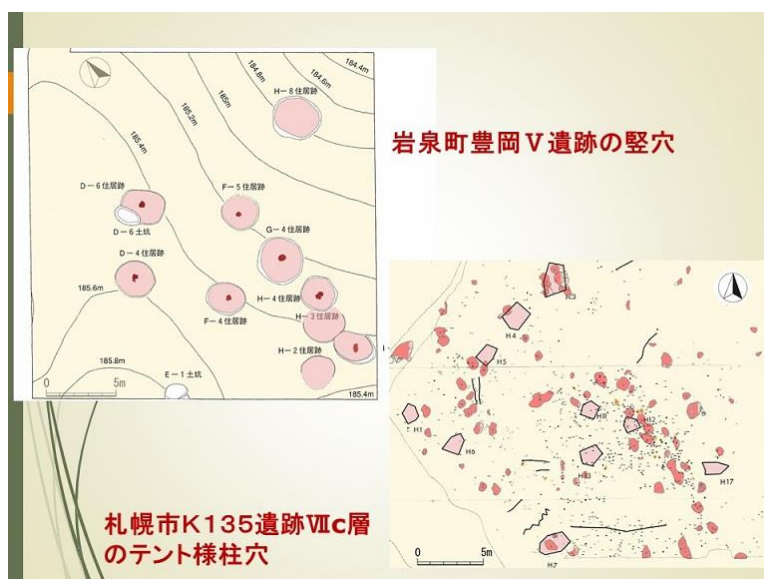
本題に入る前に、皆さん古代集落、古代ということについていかがでしょうか。なじみがあるかどうかということですが、教科書でいう古代は飛鳥時代、聖徳太子が摂政になる、おおよそそのあたりをもって古代の始まりというようなことになっています。国家の始まりですね。ただ日本列島はかなり広く、列島全域が国家の支配下、あるいは影響下に入ったかどうかという決してそうではないということも事実です。国家の支配下や大きな影響下に入った地域では古代と呼んでもいいだろうというふうに思います。そう見ていくと青森県、岩手県、秋田県の東北北部は実は国家側からの影響は、新しくなると直接支配にもなってくるわけですが、古い段階は二次的な支配、影響でした。その中で蝦夷社会が成立します。この「蝦夷」というのは、皆さんはエゾと読まれる場合が多いと思いますが、古代においてはエミシという読み方が一般的です。

こちら北海道島ではどうかと言いますと、擦文文化という、きちんと独立した時代区分、あるいは文化の区分というものがあります。かなり独自色が強いものです。そうしますと日本全体から見ますと、古代の範疇に入れていいか、日本史の中の古代史でいいのかという問題が生じてきます。擦文社会もまったく国家とは無縁ではなく、東北北部が二次的、北海道は三次的な影響を受けていると思うのですが、北海道も古代と言っていいのか、検討しなければいけないのかなと思っています。しかし今日は、東北との対比から便宜的に擦文時代を古代として扱いたいというふうに考えております。

最初にちょっと難しい話になりましたが、具体的に見ていきたいと思います。東北北部でも古代集落の形成が始まりますが、集落とはそもそもどういうものかですが、一軒の住居だけでは集落になりません。複数の住居が集まって形成されることになります。東北北部で住居が複数集まって集落ができてくるのは6世紀の末頃になります。6世紀末は、古代国家が始まる時期と対応するわけですが、その時期に東北北部の古代

集落が始まります。それ以前、前方後円墳が作られたりする古墳時代には東北北部に竪穴住居が作られない時期がありました。縄文時代には基本的に竪穴住居で生活していますが、古墳時代になると基本的には遊動生活になります。動物などを求めて短期間で移動するような、そういう不安定な生活を送っていた時期でした。

そういったなかでも住居らしきものが若干見つかっています。岩手県岩泉町豊岡V遺跡では、2mから3mぐらいの小さな丸い窪み、竪穴というにはちょっと浅くゆるやかな壁ですからまさに窪みといった感じの住居跡です。中央にちょっと赤く焼けた炉



の跡があります。柱穴がないのでテントのような簡単な上屋で、中で火を焚いていたと考えられます。移動するときには比較的楽に移動ができたと思われます。

札幌市の K135 遺跡では、窪みがなく、不整形ですけども五角形の小さな穴がいくつか見つかりました。五本柱のテントを建てた細い柱の穴ではないかとみられています。そのまわりに多くの炉があり、いろいろな骨が入っている。魚骨が入っていたり獣骨が入っていたりということです。ここで煮炊きを、調理をして、寝るときにはテントの中に入る。キャンプのような生活です。このような例はあまり多くは出てきません。ほとんどは痕跡を残さないような形での遊動生活です。それが 6 世紀の終わりがごろ大きな変化が起きます。

この時期に東北地方に、蝦夷の国境が設定されるのです。国家側が支配領域のラインを引いたわけです。おおそ宮城県の仙台市のあたり、それから日本海側は新潟市のあたりが境です。福島県の会津を入れるかどうかはいろいろ意見もあるのですが、大体そのあたりから北の地域が蝦夷（エミシ）と呼ばれた地域であります。それは北海道中央部まで続いています。北海道は渡嶋と表記されていました。当時は「おしま」ではなく「わたりのしま」あるいは「とのしま」と呼んでいたかと思います。「渡嶋蝦夷」という形で日本書紀などに出てまいります。ですから北海道もエミシの地域ということになります。

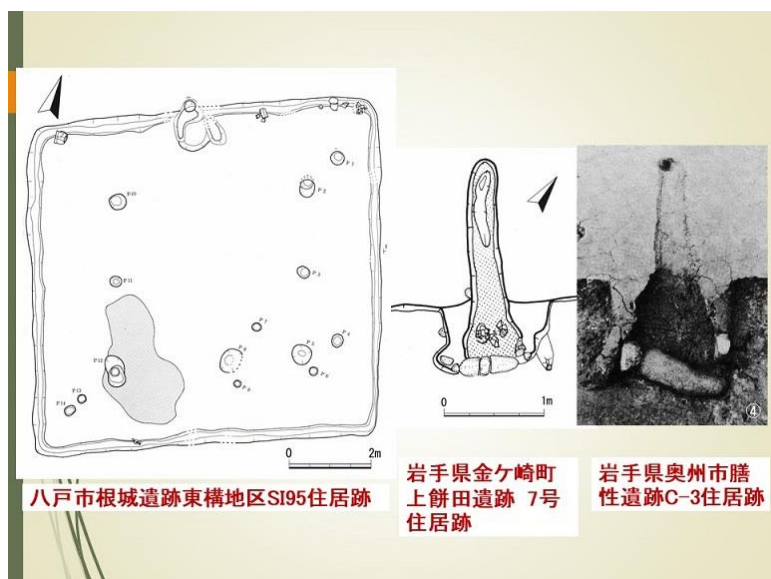
ただこれだけ広いものですから、それぞれ文化あるいは生活というものが一様ではありませんでした。現在の宮城県と岩手県や秋田県では異なる社会でしたし、北海道もまた別の文化の領域です。宮城県北部で大きな違いがあるので、南部、北部蝦夷社会に分けて考えてみます。北部は、さらに幾つかの地域差が認められ、特に北海道では擦文文化、擦文時代という形でとらえられています。

南部蝦夷社会ではだんだんと国家側の勢力が入ってくるのですが、北部のほうはストレートには入ってこずに徐々に変わってきます。北部蝦夷社会で最初に変化が認められるのは岩手県の胆沢地域と青森県の八戸地域です。その二つの地域で初期の古代集落が形成され始めます。それとほぼ同時期に末期古墳と呼ばれる墓が造られるようになります。東日本や西日本の古墳とは違うということで、あえて末期古墳と呼ばれているわけですが、北上盆地や八戸地域で始まることになります。

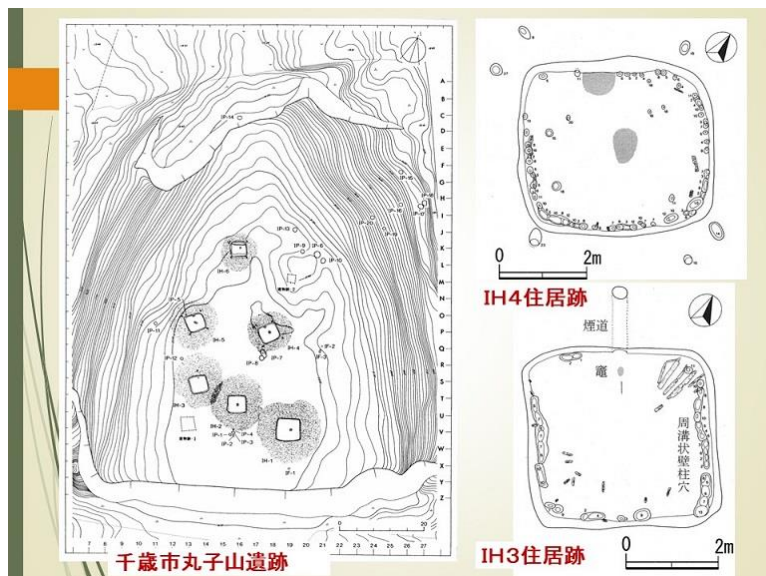
岩手県の胆沢地域の遺跡では、煙が外へ出るために溝を掘って、あるいはトンネル状にして住居の外に延びる長い煙道をもっています。また焚き口の天井部に長い石が架けられています。同じ時期あるいは少し古い時期の例を探していくと、福島県の南部から栃木県あたりにかけてみられます。ですからこの岩手県の南はおそらく東北部あるいは関東北部からの影響を受けたと考えられるわけです。

一方、八戸の根城遺跡、今の八戸市立博物館があるところなのですが、そこを発掘しましたら方形の住居が出てきました。柱が 4 本または 6 本立てられ、壁際にかまどがつけられます。その前の時代では、かまどではなく囲炉裏で生活をしたわけですが、この時代になるとかまどが一般化してくる。このかまどを見たいのですが、長い煙道がここにはないのですね。煙の道が外へ抜けてない。これは関東地方の住居の作り方です。ですからこの八戸のあたりは関東からの影響を受けて住居が作られるようになった、集落が形成されるようになった、簡単に言うとそういうことになります。八戸と胆沢の地域はともに南からの影響をかなり受けているわけですが、その出自が違ふと考えられます。

次に、一足飛びに北海道まで飛んで来ます。本来であれば北海道の方



八木講師 スライド 6 北東北の竪穴住居とかまど



千歳市丸山遺跡

八木講師 スライド 8 初期の擦文集落

がお話しすればより細かい正確な話ができるかと思いますが、大雑把な話ですけれどもお話をさせていただきます。北海道の擦文時代の集落、これができる以前というのが日本書紀に現れてきます。阿倍比羅夫が180艘の船団を率いて、北海道にやってくる。658年から660年、世紀で言うと7世紀の中頃ということになります。北海道の時代区分でいくと続縄文時代の終わりごろです。そのあとに擦文時代が開始されます。擦文の古い時期は石狩低地帯、苫小牧から札幌あたりを結ぶ地域が中心でした。渡島半島にも入っているようですが、比較的小規模な遺跡が多く、面的には広がらない

ようです。石狩低地帯に竪穴住居が造られ、集落が形成され始めるのですが、その影響は恐らくは八戸からの影響ではないかと考えています。現在、八戸―苫小牧間のフェリーがあります。私も時々それに乗るのですが、そういうルートが実はこの7世紀のあたりにあった。7世紀の終り頃です。そして末期古墳なども造られるということになります。

千歳市の丸山遺跡では独立した丘陵の上に竪穴住居が造られ、それが集まって一つの集落になっています。住居にはかまどの跡だろうと思われる焼けた箇所があります。かまどは普通ドーム形に作るのですが、それが長いうちに崩れてしまってわからなくなる場合がありますが、ここでは焼けた跡がはっきりわかりますので、恐らくここにかまどがあった。ただここには煙道がなく、八戸の特徴に共通しています。中には煙道を持つものもあります。外にぬけるトンネル式になっているものもみられますので、八戸からの影響を受けながら、あるいは他の地域からも影響を受けながら集落が形成され始めたのだらうと考えられます。

ここで、一足飛びに古代集落の終焉まで行ってしまいます。時間の関係で中抜けて申し訳ありませんが、始まりと終りをお話しすれば、一つのポイントを押さえることができるかなと思ひまして、終焉をお話しさせていただきます。

古代集落の終焉、まず東北部ですが、地域によって終わる時期が違います。比較的古いのは北上盆地、あるいは秋田県の秋田平野です。平安時代もだいぶ進んで10世紀の半ばぐらいに竪穴住居から平地式の建物に変化します。今まではかまどを使って食事を作っていた。その竪穴住居がなくなると同時に、かまども作られなくなる。こんどは囲炉裏というような形に変わってきます。かまどの場合には土器の甕をその上に載せることをしてきたのですが、囲炉裏の場合は甕をポンと置くわけにいきませんので、甕もなくなります。恐らくは鍋を使うようになってくる。土鍋というのがあるのですが、東北地方では土鍋というのはほとんど出てきませんから鉄鍋だろうと思われます。この頃の鍋は、半円形の弦を縁にかけた鍋ではなく、内側に耳のような把手をつける、それを内耳鉄鍋と言うのですが、そういうものに変化したと推定されます。ただ東北部でも内耳の鉄鍋の出土例というのは非常に限られています。鉄というのは貴重品ですので、リサイクルに回っていったのかと思われます。

そのような変化が徐々に現われ始めまして、青森県あるいは秋田県の米代川流域、北のほうでは11世紀代まで竪穴住居が継続しています。11世紀というのは枕草子だとか源氏物語などが書かれるのが11世紀の初めです。そのあたりまで竪穴住居が継続していたのです。このころになると、胆沢城とか秋田城というものが東北部にあったのですが、その機能が10世紀半ばに停止し、それと同時に、在地勢力がどんどん伸びていく。そういった中から前九年合戦を戦う安倍氏などが登場してきます。青森の各地でも北海道との北方交易というものがこのころかなり盛んにおこなわれています。そういったものを通じて有力者が各地に勢力を

伸ばしていき、次第に中世社会へ移行していくというような流れになります。

今度は北海道です。竪穴住居の終焉はいつなのか。諸説がありまして、なかなかわかりにくいのですが、今言われているのは、一つは渡島半島の西側では 11 世紀代の擦文土器、これが終末に近いといわれています。道東では、釧路の竪穴住居跡から出た湖州鏡という鏡があります。これが 12 世紀だということが言われています。それから竪穴住居からいわゆるアイヌの「チセ」へ移行する、そういった流れが根室のほうで確認されています。北海道においても竪穴住居が終焉することによって擦文時代が終わって次のアイヌ文化へつながっていくことになります。

具体的に見ていきますが、奥尻町の青苗貝塚から出てきた土器が道南の擦文土器の最後にあたるといわれています。渡島半島のあたりの擦文土器は独特の形、文様のつけ方をしますが、こういうものが一番新しいだろうと考えられています。釧路から出てきた湖州鏡という中国製の鏡があります。四角い鏡で、表側には平になっており、裏側に文様や文字が鋳込まれています。不鮮明ながら「湖州真石家念二叔照子」と読めます。これがおよそ 12 世紀です。

根室の穂香遺跡では竪穴住居からアイヌのチセにつながる変化も捉えられています。古いタイプと思われる住居にはかまどがあって、炉も床の中央にあります。次の段階にはかまどがなく、炉跡が残る。そして次に進みますとかまどはなくなり、炉が残る。そして小さな柱穴が出てきます。ここまでは竪穴住居です。次の段階、穂香ではなくて平取町の二風谷遺跡の例を出しますが、その遺跡では同じように柱の穴がありますが、竪穴ではなくなる。こういう流れがほぼ見えてきました。擦文時代はこの三段階目のところまでと考えられます。それからアイヌ文化のチセに似たような、そういう住居に変わっていくということになります。

まとめになりますが、竪穴住居による古代集落の開始が東北北部の古代、北海道の擦文時代の開始として位置づけられます。東北北部も北海道も同じです。その終焉は、今度は中世的な社会へ移行していく、あるいはアイヌ文化へつながっていく。そういう意味では古代、あるいは擦文時代の集落というのは、竪穴住居の出現で始まり、無くなることによってまた別の時代へ変わっていくことが両方の地域で読み取れるというのが結論になります。ご清聴有難うございました。

澤井 八木先生どうも有難うございました。東北地方のこの四角い竪穴住居、古代集落というのが関東地方あるいは東北南部からの影響を受けて成立し、それが北海道に渡ってきたというお話をいただきました。そして終焉については諸説あるということで、渡島半島周辺では 11 世紀ではないか。道央あるいは道東のほうはもう少し遅れるんじゃないかという見解も出されて、このあたりの話は討論のテーマとできればと思っています。

それでは引き続きまして、二人目の先生を御紹介いたします。村上義直先生でございます。村上先生も本州からおいでいただきました。秋田県の埋蔵文化財センター資料管理活用課副主幹ということです。1970 年秋田県五城目町生まれでございます。大学は私どもの地元、札幌学院大学を卒業され、その後道内何か所かで発掘調査に携わられたあと秋田県に戻られ、秋田県教育庁生涯学習課、秋田県埋蔵文化財センター等を経て現職ということです。10 世紀の泥流に埋もれた集落、片貝家ノ下（かたかいいえのした）遺跡の調査に携わって報告等の対応に当たるといことで、これは日本全国的に見てもここだけではないかという大変貴重な集落、家の構造が残っている、上屋構造がわかる非常に貴重な調査をなさっております。今日はそのことを中心にお話いただきます。それでは村上先生宜しくお願いします。

村上 秋田県埋蔵文化財センターから来ました村上です。今日は研究成果というよりも非常に珍しい埋没建物というのを皆さんに紹介したいと思います。発表内容は、画面のとおりになります。初めに埋没建物とはどのようなものかお話しします。次に秋田県北部の米代川流域の埋没建物をいくつか紹介します。そして最後に、平成 27 年に発見された片貝家ノ下遺跡という非常に貴重な遺跡についてお話しします。

では早速一つ目、埋没建物とはいったいどのようなものなのでしょうか。はっきりとした定義はありませんけれども、古い時代、昔の建物が立ったままの状態で地中に残存しているもの、これを埋没建物というふうに呼んでいます。これは秋田県の米代川に特徴的なものです。埋没建物は極めて高い学術的価値を持って

米代川流域の埋没建物 分布



- 1 能代市天神
- 2 北秋田市小ヶ田(小勝田)
- 3 北秋田市胡桃館遺跡
- 4 北秋田市掛泥道上遺跡
- 5 大館市岩瀬
- 6 大館市引欠川下流域
(3か所)
- 7 大館市片貝家ノ下遺跡
- 8 大館市道目木遺跡

※赤は発掘調査が行われた遺跡

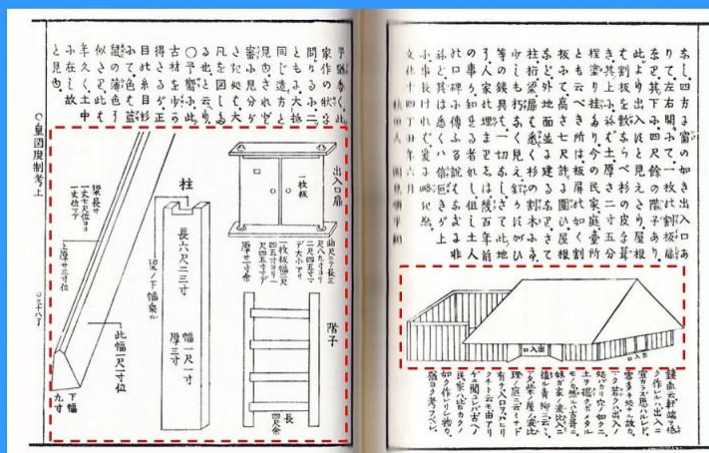
村上講師 スライド8 埋没建物の分布

とって極めて貴重な遺構と言えます。

次に米代川流域の埋没建物を見ていきます。はじめに埋没建物の成因です。米代川流域に特徴的な埋没建物は、どのようにして残されたのでしょうか。十和田火山、十和田湖は、だいたい今から 20 万年ぐらい前から活動を始めています。度々超巨大噴火を起こしてるんですけども、今から 1,100 年前の西暦 915 年とされる噴火活動ですね、その時に発生した火山泥流による堆積物に埋もれた建物、これが米代川流域の埋没建物になります。この堆積物は火山灰、軽石などを主体としています。これを地元ではシラスというふうに呼んでます。シラス台地のあのシラスとはちょっと違うものなんですけどシラスと呼んでいます。

米代川流域の埋没建物の分布になります。中流域に分布しているのが分かります。1 番から 8 番までありますが、この中で 6 番目は 3 箇所まとめてますので 10 箇所で見つかっていることになります。下流の方から見ていきますと 1 番目が能代市の天神、2 番目から 4 番目までが北秋田市の遺跡で 2 が小ヶ田（おがた）埋没建物、3 が胡桃館（くるみだて）遺跡、4 が掛泥道上（かかりどみちうえ）遺跡になります。5 番から 8 番までが大館市になります。5 番が岩瀬、6 番が引欠川（ひっかけがわ）下流域、7 番が片貝家ノ下遺跡、8 番が道目木（どうめき）遺跡、この 8 番が最上流部の確認地点ということになります。赤い字が今まで発掘調査が行われた遺跡です。ではこの中から米代川を挟んで向かい合う位置にあります 2 と 3 ですね、小ヶ田埋没建物と胡桃館遺跡を見ていきたいと思います。遺跡間の距離は 3.2km ぐらいあります。

小勝田の埋没建物



平田篤胤『皇国制度考』

久保田藩士岡見知康の実見録

村上講師 スライド 10 埋没建物発見に関する近世の記録

います。通常の建物ですと建替えや取壊しなどがありますので、一つの建物が長く後世に残ることはありません。たとえば発掘調査で見つかる竪穴建物の場合ですと竪穴の形ですとか、柱の穴ですね、そういったごく限られた情報しか見つかりません。そのため建物の外観や構造を推定するのは非常に困難です。これに対して埋没建物は短い時間でパックされています。そのため建物そのもの、もしくは立ったままの状態の痕跡が三次元的に残されています。建物の外観や構造を直接知ることができます。古代建築史に

はじめは小ヶ田埋没建物と呼ばれるものです。米代川の支流小猿部川の左岸に位置する遺跡です。今から 200 年前の江戸時代、文化 14 年、西暦 1817 年に発見された建物です。この建物については紀行家の菅江真澄や平田篤胤らによる記録が残されています。これは真澄の絵ですが、これとは別に出土品を記録したものもあります。そちらの出土品の記録には細かい解説があるんですけども、この建物の絵図には全く解説がありません。それでこれは聞き書きではないかというふうに推測されています。つまり真澄が現地を訪れたときにはすでに解体されていた可能性がある、ということに

なります。こちらは同じ建物を平田篤胤が記録、というか平田篤胤の『皇国度制考』にあるものです。これは久保田藩士の岡見順平知康という人の、実見録を掲載したものになります。これは建物のスケッチ、見取り図のようなものですが、建物の特徴や、部材の寸法まで記録しています。このほかに地元の肝煎、長崎七左衛門という方の記録もあります。この人の記録には絵図はありませんが、住居の特徴などを詳細に記録しています。それでこの記録の中にはこれまでこういったものが 34 軒も見つかっているという驚くべき記述もあります。小ヶ田のこの建物の記録については、床面が入口から 1m ほど低い場所にあること、あと屋根の上に粘土が載せられていることが複数の記録に共通していますので、土屋根の堅穴建物だったとみられます。

次は胡桃館遺跡です。この遺跡は集落ではなく官衙的な性格と評価されています。小ヶ田のような堅穴建物は見つかっていません。米代川の右岸、標高 27m、水面からの高さが 10m、米代川から 3km ぐらい離れた場所にあります。この遺跡は、昭和 40 年に、水路に突き出た建物の一部を秋田県の考古学の重鎮であります富樫泰時氏が調査し、そのあと当時の文化財保護委員会の技官でありました坪井清足氏の視察により遺跡の重要性が確認され、昭和 42 年から 3 年間調査が行われています。のちに出土部材は、重要文化財に指定されています。

ここからいくつかの建物を見ていきたいと思います。これは B1・B2 建物になります。奥の方が B1 建物で掘立柱建物、そして手前の方が B2 建物で土台建物になります。手前の B2 のほうは桁行が 8.8m、梁行きが 6.7m の板校倉式の建物になります。奥の B1 建物はこれより一回り小さく、桁行が 7.3m、梁行きが 5.5m の掘立柱建物になります。B2 建物に比べて粗雑な印象を受けるつくりになっています。これが平面図になります。泥流の影響で上のほうはもうない状態です。復元された平面図になりますね。B1 建物の方には出入口が 1 か所、B2 のほうは 3 か所にあります。このほかに胡桃館遺跡からは B2 建物よりも一まわり大きな板校倉式の土台建物が見つかっています。C 建物と呼んでいます。こちらは桁行が 11.8m、梁行きが 9m になります。それで下の写真はこの土台部分ですね、土居（どきよ、どい）なんですけれども、これを見ていただくと、いかに大きいかかわかるかと思います。そのほか高床式の建物も見つかっています。上のほうの構造はありませんが下の柱の部分と梯子が見つかっています。これを登って上の蔵の方に入っていたと想定されます。これが胡桃館遺跡の復元図になります。実際の建物をもとに復元していますので、だいぶ信憑性が高いものと思われます。

次に片貝家ノ下遺跡の内容を紹介したいと思います。片貝家ノ下遺跡は推定面積が 6 万 m² の平安時代の遺跡です。大館市の中心部からは南に 6km、引欠川という川の右岸に位置しています。標高が 58m ほどです。十和田湖からは南西に 40km 離れた場所になります。遺跡の東側に台地がありますが、そこに、700m ぐらい離れたところに同じ時期の遺跡で片貝遺跡という遺跡があります。それで画面の奥の方ですね、先ほどお話しした最上流部の建物確認地点である道目木遺跡があります。

片貝家ノ下遺跡の確認調査は令和元年度で 5 年目になります。実際に掘削したのは 1 年目と 2 年目だけで、それ以降の調査はレーダー探査のみを行っています。遺跡の面積 60,000m² のうち確認調査の対象となった面積は 39,000m² でこのうち実際に掘削したのは 3,900m² になります。片貝家ノ下遺跡は平成 27 年の春に試掘調査で発見されました。この年の秋に行われた確認調査で、建ったままの状態で埋没した、三次元的に屋根



村上講師 スライド 12 胡桃館遺跡の埋没建物

竪穴建物屋根痕跡



村上講師 スライド 25 土屋根の軒先と周堤

の痕跡を残す埋没建物が検出され大きな関心を集めました。翌 28 年の確認調査ではやはり建ったままの状態の痕跡が残る竪穴・掘立柱併用建物跡、あとは掘立柱建物跡、そのほかに水田跡も見つかっています。それで集落と耕作地を含む周辺の景観を極めて高い精度で復元できる遺跡であることが判明しております。当初、本遺跡の確認調査は開発を前提に進められていましたが、遺跡の重要性から集落の広がりが見込まれる 39,000m² が事業区域から除外され保存が決定しております。

遺跡の中の様子になります。一番上の層が耕作土になります。厚さが

20cm から 40cm です。2 層目が火山泥流堆積物で、シラスと呼んでるものです。厚さは深いところだと 2m50cm ぐらいあります。そしてその 2 層の下、薄いんですけども降下軽石層、十和田火山の噴火で空から降ってきた、だいたい直径が 3mm ぐらいの軽石層があります。そしてその軽石層の下、黒い土、こちらが平安時代の地面になります。

確認調査は、トレンチという細長い溝を掘って調査しています。黒い線の部分がトレンチです。2 回の確認調査で検出された建物は、竪穴建物跡が 13 棟、竪穴・掘立柱併用建物跡が 1 棟、掘立柱建物跡が 3 棟になります。確認調査では遺跡全体の 10% も掘っていませんので、まだ見つかっていない遺構を考慮しますと大規模な集落跡と推測されます。これまでの調査では噴火災害後の復旧の痕跡は確認されていませんので、この災害を機に村は廃絶したものと考えられます。

では建物跡を見ていきます。はじめに検出した竪穴建物跡の概要を説明します。竪穴建物跡は 1 辺が 3m から 6m の方形です。当時の地面から床面までの深さは深いもので 70cm ぐらい、周堤の上からは 1m 以上の深さがあります。確認した竪穴建物跡には三つのパターンがあります。一つ目は噴火前に役目を終え、竪穴が埋め戻されていたもの、画面の左側の方になります。二つ目は噴火時に壁や屋根のない竪穴だけの状態だったもの、画面の右側の方になります。そして三つ目は、噴火した時に現役の建物で、建ったままの状態で見つかったもの。次のスライドはこの三つ目の、建ったままの状態で見つかった建物を見ます。

屋根の形が、途中までですけれども、三次元的に残されています。屋内は、流れ込んだ火山泥流による堆積物で充填された状態です。木材などの有機質の部分は腐食して残っていませんが、屋根土が残っていますので、屋根の形が保存されています。屋根の軒先の部分が周堤に接していますので、軒先が地面につく伏屋（ふせや）形式と呼ばれるタイプの竪穴建物だということが分かります。竪穴の周囲には周堤と呼んでいる土手が廻っていますが、土屋根と一体化しています。屋根の角度が一番急なところで 45 度ぐらいです。この建物は残念ながら床面から 1.7m の高さまでしか残っていません。そこから上は耕作などにより失われています。この竪穴から少し離れたところには、煙出しの穴があります。

屋根の形が残る部分になります。拡大したものです。この黒褐色の粘質土が屋根土になります。この層の上には降下軽石が堆積しています。今度は屋根の痕跡を上から見た状態になります。床面から 1.7m の高さになりますが、屋根を水平にカットしたような状態です。この屋根痕跡のこちら、中が建物内、外が建物外ということになります。1.7m の高さでの屋内空間は 2.9m と、3m 近くあったことが分かります。そしてこの部分、ちょっとわかりづらいんですけども土器が横倒しのような状態で高さ 1.7m のところから見つかります。同じような出土状態は別の竪穴建物でも確認されています。

今度は竪穴ではなく掘立柱、平地式の建物になります。桁行が 9m 以上、梁行が 7m の掘立柱建物跡の一

部になります。壁の板材と柱の痕跡が確認できます。柱は丸い材と四角い材があるようです。そしてこの面から 80cm 下に床面相当部分がありました。

今度は竪穴建物と掘立柱建物がセットになった竪穴・掘立柱併用建物跡と呼んでいるものです。画面の奥の方、こちらが竪穴部分で、手前のほうが掘立柱部分になります。右上の方に青森県の発茶沢 1 遺跡の有名な復元想定図がありますが、大体このような構造になると考えられます。竪穴側では屋根痕跡とかまどの煙道部分しか確認されていません。現状では屋根の途中でカットしたような状態で、確認面での幅は 4.2m あります。そして、この屋根の角度で当時の地面まで葺き下ろしますと幅は 5.8m になりますので、大体竪穴の大きさはこれぐらいになるかと思われます。竪穴の床面は、今回の調査では確認していませんが、ほかの竪穴の事例からだいたい 70cm ぐらい深い位置にあると想定されます。

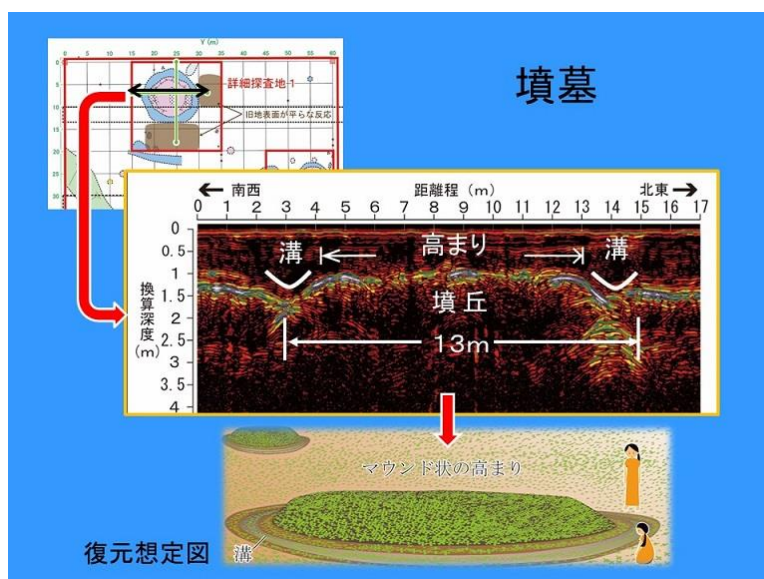
今度は掘立柱建物です。3.6m×4.2m ほどの大きさになります。辛うじて壁と柱の痕跡が確認できます。この建物の床面にはこちらに焼土が形成されています。次のスライドでは赤い枠の部分、こちらの拡大画像を見ます。屋根土の部分になります。上にはやはり降下軽石層が堆積しています。この屋根とちょうど向き合う部分の屋根土からは、このような形で土師器の小片が 2 点出土しています。

以上片貝家ノ下遺跡から見つかった建物を見てきましたが、ここで少しレーダー探査の成果も紹介します。これは先ほど見た、三次元的に形が残る竪穴建物跡ですが、試験的に 2 年後にレーダー探査をしました。カラフルな部分が強い反応が出ている部分で、この遺跡は非常に相性も良くてしっかり竪穴の床面ですとか屋根の傾斜が確認できます。

今度は別の遺構です。墳墓と想定される遺構です。これは 27 年度の確認調査で性格不明の溝と地面の高まりを確認していた部分です。この結果を見て、そうだったのか、という思いになりました。このレーダー画像を見ますと高まりと溝が確認できます。この高まりは平安時代の地面から 5、60cm の高さがある墳丘とみられます。下の図は復元想定図になります。このような墳墓とみられる遺構は全部で 6 基確認されています。

これまでの確認調査によって居住域、耕作域、墓域の各領域が明らかになってきました。この図を見ますと 居住域の中に墓域がありますが、集落最後の建物群はこの墓域よりも東側のほうから見つかったので、この墓域は移動した集落、東側の集落との関係で見ていく必要があるかも知れません。

最後に、米代川流域の埋没建物からわかることをまとめますと、平安時代の秋田県北部には土屋根、伏屋形式の竪穴式建物が存在したことがわかりました。建物の形状は江戸時代の埋没建物の記録と合致する部分が多いため、米代川流域の集落において土屋根の建物は珍しくなかったとみられます。一方で胡桃館遺跡のような官衙的な性格の遺跡では、校倉式の大規模な土台式建物や高床式の建物など、律令国家側に見られる建築様式の建物と、在地的で粗雑な掘立柱建物が混在しており、辺境の地であることを物語っているかのようです。辺境の地に展開した建物の種類や構造を知る上でも埋没建物は非常に貴重な資料と言えます。これで発表を終わります。



村上講師 スライド 31 片貝家ノ下遺跡の墳墓

澤井 村上先生どうも有難うございました。この火山堆積物の中に建物の構造がこれだけきれいに残っているというのは、私共にとってはある意味ショッキングと言いますか、写真にも出てきました方形の竪穴建物

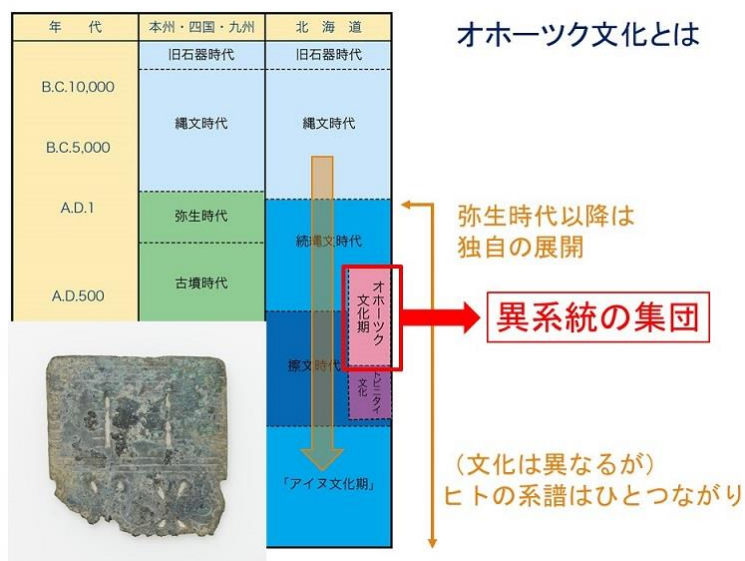
で伏屋づくり、煙出しがある、かまどがあるということは北海道の擦文文化の竪穴住居と恐らくは構造が非常によく似ていたんではないかなと思いますし、また最後のところに少し御紹介されましたけれど、丸い形で溝を掘って、それを多分内側に盛ったマウンド状の墳墓がありましたけれども、これも北海道石狩低地帯で、僅かですけれども見られる北海道式古墳の形状と非常によく似ているものということで、大変興味深くお話を伺いました。

それでは続きまして三人目の先生に御登壇いただきたいと思います。熊木俊朗先生です。東京大学大学院人文社会系研究科教授でございます。1967年東京都立川市生まれ、東京大学大学院人文社会系研究科修士課程修了、同研究科准教授を経て現職でございます。北海道を中心とした北東アジアの考古学、特にオホーツク文化や擦文文化について調査研究を進めていらっしゃいます。主な著作に『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』がございます。それでは熊木先生よろしくお願ひいたします。

熊木 御紹介いただきました熊木です。東京大学の教員ではありますが、私、北見市常呂町に住んでもう20年になります。常呂の実習施設に拠点を置いて研究活動をしておりまして、今日発表するオホーツク文化に関しても、常呂町にあるトコロチャシ跡遺跡、あるいは網走市の最寄貝塚の発掘調査などにも関わらせて、オホーツク文化の調査に携わってきた経験があります。そのようなところから今日は、北海道の集落遺跡の中でも、特にオホーツク文化の集落遺跡について御紹介していきたいと思います。

まずオホーツク文化とは何かということで、ごく簡単に話をします。こちらが本州の時代区分ですね、これと北海道の時代区分を対比させてみました。皆さん御存じと思うんですが北海道の時代区分は、本州の弥生時代以降独自の展開になりまして、狩猟採集を基盤とする文化がアイヌ文化まで続いていくんですね。続縄文、擦文、それから考古学で言うアイヌ文化と続いていくんですが、この間、人が途中で大きく入れ替わるということではなくて、それぞれの文化の内容はもちろん大きく違うんですが、基本的にはひとつつながりのものと捉えてもいいと思います。それに対してこのオホーツク文化というのは、5世紀から北海道では9世紀の間ですね、北から来た人たち、異系統の集団だったんですね。顔を見ますとやはりアムール川の下流域やサハリンの北部に住んでいた、今住んでいるロシアの先住民族に近く、アイヌの人たちとは少し違う顔立ちをしておりますし、こういう大陸系の遺物も持ち込んでいます。また、生活も、海に適應していたり、動物、特に熊に対する儀礼ですね、そうしたものを持っていたりする。そのような点で併行する時代の、続縄文文化や擦文文化とは大きく異なる、まあ言ってみれば異民族だったわけですね。こういう人たちの集団がどんな集落をつくっていたのか、ということを紹介していこうと思います。

まず遺跡の分布なんですけども、オホーツク文化、アムールの河口からサハリンの全域、北海道では宗谷、



熊木講師 スライド2 オホーツク文化の占める位置

利尻礼文から稚内、それからオホーツク海沿岸をずっときて知床半島、根室、おおよそそんなところに分布しています。この時代の周辺地域の文化を見ますと、先ほどは北から来た人たち、と言いましたが、この当時のアムール川や松花江の流域には、靺鞨系の文化というのが同時期の文化としてありました。これがオホーツク文化の土器でこれが靺鞨文化の土器なんですけども、この例などを見ても明らかのように、この靺鞨系の文化の影響をかなり受けている。大陸系の金属器がもたらされたり、土器が似たりですね、そういう物質文化的な影響を受けている、という関係であったわけです。

それから北海道の中を見ますと、先ほど八木先生の紹介にもあったんですけども、オホーツク文化が北海道に展開していた時期の擦文文化というのは、実は道央から南の方にしか分布していないんですね。このあと、オホーツク文化が広がっていた地域にだんだん擦文文化が進出し、9世紀ごろにはオホーツク文化が擦文文化に押される形でだんだんこう縮小して、擦文文化の中に吸収されていくという流れになります。なので、オホーツク人と擦文人というのは同時期に隣に、隣同士で住んでいたわけではなくて、基本的には排他的な、住みわけのような関係になっていた、という風に理解してもらえるといいかと思います。

これは、北海道教育委員会が現在調査を進めている北海道の竪穴群遺跡の分布の地図を示したものです。色々な時期の竪穴群遺跡があるんですが、基本的には擦文文化の竪穴が中心になるわけですね。なので、ここに示した分布を見ますと北海道の東部に竪穴群遺跡の分布が多いんですが、これは先ほどお話ししたように、もともとオホーツク文化がこの地域に展開してきたあとに擦文文化がやってきて竪穴を作った結果こうなった、ということなんですね。そうした擦文文化の竪穴群遺跡の分布の特徴を見ると、道東の海岸部に多いことが分かりますね。赤い丸が主要な遺跡で、黒い丸が竪穴群の分布を示すんですが、道東の海岸部、特に大きな川の河口や川筋に多いという特徴があります。ただし、釧路川の流域なんかは内陸のほうまで入っていますね。常呂川もそうですし、道央ですと石狩川や千歳川のほうにも入り込んでいるということになります。

一方ですね、オホーツク文化の分布の様子をこれに重ねて確認してみますと、基本的に海岸のみにしか分布していないという違いがあります。どんなに入っても海岸部から1km以内ですね。それから擦文文化の遺跡が極めて少ない所やほとんどない所にも分布している。まず利尻・礼文、ここにも擦文文化があるにはあるんですが、やはり密度的には、オホーツク文化の牙城みたいなところですね、非常に密集してオホーツク文化の遺跡があります。それから知床半島部には擦文文化の遺跡は基本的にはないんですけども、オホーツク文化の遺跡は沢山あるんですね。こうした大きな川とか平坦地がないような、こういう地域にかなり密集して遺跡があるという特徴もあります。

それからオホーツク海岸の竪穴群との比較でみると、やはり絶対的な数、竪穴の数とか分布の密度は少ない傾向にあるんですけども、あとでお話するように個々の集落の規模を見ると決して小さいとは言えないのではないか、と考えています。

海岸部に遺跡があって、平坦地が少ないようなところにもあるという話をしましたが、その代表的な例をいくつか紹介していきます。これは利尻島にある利尻富士町役場遺跡ですね。これは鵜泊港のすぐ近くですね。この写真はペシ岬という岬の上から撮ったところですけども、ここで発掘調査してたんですが、実際にはオホーツク文化の竪穴は後でこの辺から出て来たんですね。こういう本当に見晴らしはいいんですけども住むにはどうかな、という、平坦地のない所に遺跡があったりするんですね。これは、海に面していてランドマークになったり港があったりとか、そういう所にある遺跡の例です。

それからこれは斜里町のウトロ周辺にある遺跡の紹介なんですけども、チャシコツ岬という、ウトロまで行くときに目立つところですが、この岬の上に竪穴群があります。その先のウトロの市街地のところにも道路を通したりするときに発掘調査をしているんですが、このへんもウトロ遺跡など、遺跡の密度が非常に濃い地点になっています。このように、知床半島部では平



熊木講師 スライド6 特徴的な集落の立地

坦な場所の少ない所、大河川の河口じゃないような地点にも遺跡があります。特にこのチャコツ岬上遺跡、知床行った人は大体わかると思うんですけど、亀が横たわっているような、そういう岬があって、その甲羅の上が堅穴群になっています。これは国指定の遺跡なんですけども、31軒ものオホーツク文化の堅穴が窪んで残っています。こういうちょっとアクセスしにくい、まあ我々からするとあまり暮らしたいような所に見えないんですが、非常に眺望が良くて周りの見晴らしがよくて、ランドマークとなるような所に遺跡を作る。このような立地の特徴を持っている例があるわけですね。

一方、擦文文化の遺跡の立地と近いような所、擦文文化の遺跡が、堅穴群があるような所にもオホーツク文化の遺跡がある例があります。これは私が活動している常呂川河口域にあるオホーツク文化の遺跡の位置なんですけども、常呂川がありましてその右岸上にトコロチャシ跡遺跡、それから常呂川河口遺跡、それからサロマ湖との間の砂丘の上に栄浦第二遺跡と、合計3か所のオホーツク文化の主要な遺跡があります。これはそのうちの栄浦第二遺跡の堅穴の窪みを図で示したものです。北海道の堅穴群遺跡では、堅穴の窪みの形によって時期がある程度わかるというのは知ってる方も沢山いるかもしれません。オホーツク文化の堅穴は五角形や六角形をしていますので、窪みの形ですぐわかるんですね。栄浦第二遺跡の東の群の場合、このようにまとまって堅穴があります。それから、ここではほかに縄文から続縄文の円い堅穴や、張出し部を持つ続縄文の堅穴もありますが、主体になるのはこの赤い、四角い形をした擦文文化の堅穴になります。常呂川河口域全体で集落の規模がどのような感じになっているのか、堅穴の数はどのようにになっているのかということで、集計してみると次のようになります。

続縄文の堅穴は11遺跡で265軒、オホーツク文化は4遺跡で74軒、それから擦文文化は32遺跡で1921軒の堅穴があります。これだけ見ると、どうも擦文文化の規模に比べてオホーツク文化の規模が非常に小さく見えますよね。ただこれ、この数字をそのまま受け取るわけには行かないんですね。計算してみると、まあ非常に単純化した計算で、色々問題もあるんですけども、まずは集落の存続期間がありますね。オホーツク文化が約200年、擦文文化はこの地域で300年くらい、大体そのくらいなんですけども、オホーツク文化はスパンがまず短いんですね。それからあとで紹介しますが、オホーツク文化の堅穴では住居を同じところで建替えて再利用することが多いです。1回建替えたり、場合によっては2回建替えたりしますね。なので実質的な住居の数はこれの2倍になると考えて、計算上は考えていいかも知れません。それから大きな住居が多いので、平均すると床面積は大体3倍くらいになると考えられます。同じ1軒でも面積3倍くらいになるということで、これで単純計算すると、オホーツク文化の74軒は、擦文文化の住居に換算すると666軒分に相当すると推測されます。あくまで単純計算ですが。こう考えてみると擦文文化の遺跡は沢山、いろんなところに分散して沢山あるんですが、オホーツク文化の遺跡というのは一か所にこうギュッとまとまっていて、しかも一個一個の、一遺跡一遺跡の大きさが割と大きく、非常に集約したかたちで住んでいる。つまり、常呂の例からは、一つの集落の遺跡はそれほど小さくはないということが考えられるわけです。そのような特徴があると言ってもいいかな、と考えています。

では、このオホーツク文化の集落遺跡について、堅穴以外にどんな内容があるのか、ということで、網走市の最寄貝塚の例を紹介していきます。これ戦後すぐの調査の時に撮られたガラス乾板の写真なんですけど、最近、常呂実習施設のウェブサイト上で当時の写真をこういう高解像度で紹介していますので、興味のある方はぜひ検索してみてください。昭和22年、23年の写真なんですけど、大変貴重な画像があります。これは網走川の反対から撮ったもので、この砂丘のうえて今発掘をちょうどしているところの写真なんですけど、ここにあるのが最寄貝塚ですね。網走川の河口の左岸、オホーツク海に面した左岸に立地しています。さっきの写真はこちらから撮っている写真ですね。この辺が森と砂丘になっていて、中の構造どうなっているかと言うと、まず堅穴の窪み、堅穴住居の跡がこのあたりにまとまってあります。今見えるだけで窪みが6軒、もう少しあったようなんですけども、大体10軒前後の堅穴があっただろうと言われていました。

それから墓ですね、集落のすぐ近くに墓があって、近年の発掘調査で分かったのが128件で、昔の調査の数と合わせるとだいたい300基以上は墓があっただろうと考えられています。とんでもない数なんですけど、集落のすぐ近くに墓域が広がっていたということが分かっています。それから、最寄貝塚の名前にもなっている貝塚ですが、確認されているのは、図で示した7号堅穴の南東側と、10号堅穴の西隣になります。これ

らの地点の周辺にもかなりの貝塚があったらと考えられているんですけど、調査で確認できたのは図の位置になります。

この最寄貝塚の例で見ると分かるんですが、オホーツク文化の集落を代表的な例で見ると、竪穴住居と墓、それと貝塚が、比較的狭い範囲の中でまとまってごちゃっとあり、非常に高密度で遺構が集中しているという特徴があります。ただし、全ての遺跡でこの3つの要素が全部確認できるわけではなくて、例えば墓がほとんど見つからない例もあったりするなど、3つの要素が全部そろってない例もあります。

300基以上の墓がある最寄貝塚の例は極めて特殊ですけども、まあ後で紹介する代表的な遺跡、あるいは拠点的な遺跡と言われる例では大体この3つの要素が揃っています。いずれにしても、非常にまとまった狭いエリアの中にこういうものが集約して営まれているというのが、オホーツク文化の集落の特徴です。

実際の最寄貝塚の様子を見ると、こういう五角形の竪穴とか、墓があります。このように、屈葬で上に土器を被せる被甕というのがオホーツク文化の特徴なんですが、こういう墓が非常に密接してあります。それから貝塚ですね。ここではシジミとかカキ貝などの貝や、海獣などの動物骨を含む貝塚が形成されています。

次に竪穴住居の様子を紹介していきます。これはトコロチャシ跡遺跡という遺跡の竪穴の例です。まず外径は、長軸の長さが11m強と非常に大型の竪穴で、五角形や六角形をしています。それで住居の中央部には凹の字の形で粘土が貼られていて土間のようにになっており、ここは作業場のような空間だったと考えられています。ここからはほとんど遺物は出てきませんね。それから中央部には石組などの形で作られた炉があります。住居の奥側には熊の頭の骨などを中心として積み上げる骨塚といわれるものがあります。これはいわば祭壇ですね。この例では反対側にも小さい骨塚があります。これ以外の壁際の部分にはベンチ状の遺構が作られており、ここで寝泊まりしていたと考えられています。

常呂川河口遺跡の15号竪穴では、この大きな竪穴の中にどのように人が住んでいたのかわかるような情報が得られています。この竪穴では40個余りの土器が出てきてるんですけども、その分布をみると6箇所に大、中、小の土器がセットになったような形で出てきているんですね。なのでこれは6つの家族のような集団が一つの竪穴住居の中に住んでいただろう、という想定がなされています。こうした居住の形態をとる理由としては、このような家族構成が、成人男性が6人ぐらい乗る一艘の船と対応するところから、鯨漁などの協業を行う生業形態と関連するという仮説も出されています。いずれにしても一つの大きな竪穴住居の中で集約して居住するこのようなあり方というのがオホーツク文化の一つの特徴なのでは、と考えているところであります。

それから竪穴住居で一つ、私注目しているのは住居の建替えという現象です。これはトコロチャシ跡遺跡の別の竪穴の例ですけども、この例で見ますと外側の住居を先に作って、これを一度焼いてるんですね。焼いた直後に、骨塚を避ける形で縮小して小さい住居を作り直しています。貼床もこう切り直して作っていますね。このように住居を建替えて何度か住み続けるんですけども、図で見ますと、このように入れ子状に縮小して建替えるという例がいくつも見られます。そして建替えとか住居を廃絶するときには家を焼くわけですね。図の7号竪穴の例も、大小の竪穴が両方とも、廃絶するときに焼かれています。

実はこうした建替え、全ての住居で見られるわけではなくて、どうも調べてみると、こういう建替えを行っている遺跡というのは、拠点的な集落、例えば規模が大きかったり、後で言う大陸遺物をたくさん持って



熊本講師 スライド 12 住居内の施設

竪穴住居の建て替え

(トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点7号竪穴)

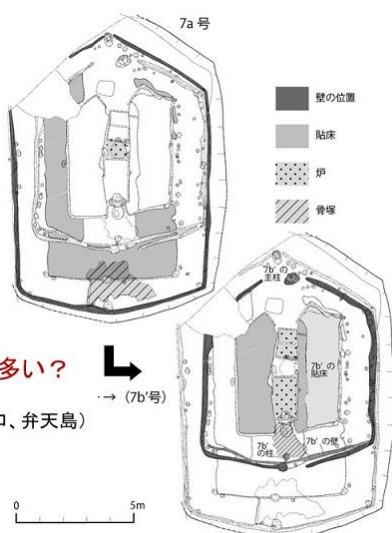
・入れ子状に縮小して建て替える

・建て替え・廃絶時には家を焼く



建て替えは「拠点」な集落に多い？

(香深井1、目梨泊、トコロチャシ跡、モヨロ、弁天島)



熊木講師 スライド 15 住居の建替え

り突出してるんですが、この二つの遺跡に大陸系の遺物が集中して出土している。大陸系の遺物は墓の副葬品にも用いられるので、墓がたくさんある遺跡に集中する傾向にあるんですけども、いずれにしてもこの集落からも出てくるわけではなくて、この二つの遺跡で突出して多く出土しているので、これはやはり交易の拠点となるような性格を示しているのではないと言われていました。実はほかの特徴を見ても、やはりこの目梨泊遺跡とか最寄貝塚というのは非常に特別な遺跡でありまして、先ほど見た建替えが多いとか、これから紹介する骨塚の規模ですね、それが突出していたりとか、そのような、ほかの集落と比較して拠点的な性格を持つ遺跡であることがわかるんですね。

ではその、特別な遺跡の例として、骨塚の規模について2つの例を見ていきたいと思います。一つは先ほど見たトコロチャシ跡遺跡の7号竪穴の例です。これは骨塚を上から見た写真なんですが、断面を見るとこういう形でクマの下顎が前後方向に並んで置かれています。実はこの骨塚では出土した骨を全部回収してクマの頭骨の数を数えたんですが、110 個体分ありました。これは突出して多い例なんですけども、実は我々も見逃していた例があることに最近気づきました。これは今まであまり注目されていなかったんですけども、最寄貝塚の10号竪穴の骨塚です。この写真を見る限り、大変な大きさですね。画像の細かい部分を見ると驚くんですけども、クマの頭骨が見えてるだけで20 個体ぐらいあります。これは、トコロチャシ跡の先ほどの骨塚と比較しても全く引けを取らないですね。恐らく100 個体以上のクマの頭の骨があったはずですよ。モヨロの例は数えた記録がなく、この資料自体もどこにあるのかわからないので、実態はわかりませんが、写真を見るだけでこれは100 個体のレベルだろうなということが分かります。このように、骨塚に入っていたクマの頭骨の数が多量な遺跡として、予稿集の方に挙げたんですけども、常呂川河口遺跡や、目梨泊遺跡の例などがあります。骨塚に含まれるクマの頭骨の数は、普通はですね、大体10 個体からまあ20 もないところがほとんどで、こんなに集中する例というのは極めて希です。やはりこうした何か、非常にモノを集約させる遺跡がある。全体の中で、そういう少数の遺跡にモノや遺構が集中するという傾向がどうもあるようなことを今考えているところです。

今日お話ししたことをまとめてみますと、まずオホーツク文化の特徴として立地がありますね。海に近い所で平坦地がないような絶景、眺望のいい所でランドマーク的なところを好む傾向があるという海への志向ですね。それから集落遺跡の内容を見ると、狭い地域に集約している、竪穴住居だけではなくて、墓や貝塚なども非常に狭い面積の中に集約して住んでいる。それから、遺跡の数自体はそれほど多くはないんですが個々の集落の規模は決して擦文と比べても小さくない、ということを考えております。それから、拠点的な集落の存在というのがかなり際立っておりまして、遺跡の規模、墓、大陸系の遺物や骨塚などの点で、他の遺跡から見ると突出した例というのが目立っていて、少数の遺跡に集中している傾向が見られる。このよう

いたり、墓が沢山あったりとかですね、そういう集落でこのような建替えがよく行われている傾向にあるんじゃないかと考えております。

そういう拠点的な集落、具体的にはどういふことなのかということで最後、説明していきます。これは北見枝幸にいらっしゃる高島さんという方が作った図なんですけども、大陸系の金属製品ですね、それがオホーツク文化の中でどのような分布を示しているかということを示した図ですが、一つはこの枝幸町にある目梨泊遺跡ですね、そこに集中している。もう一つは網走市の最寄貝塚を中心とした地域ですね、なかでも最寄貝塚はやはり

なところがオホーツク文化の集落の特徴だと思います。集約とか格差、拠点という概念をキーワードとして、集落の間の関係を考えてみたいと思っています。

こういう特徴を、そのあとの時期の道東の擦文と比べてみるとですね、擦文では一つの遺跡における堅穴の数の違い、規模の違いというのはありますけども、出土する遺物ではこういう格差を感じさせるようなところがあまりないですね。この点について、オホーツク文化との違いをどのように解釈できるか、ということの色々と考えているところでもあります。簡単ですが、これで発表を終わります。

澤井 熊木先生有難うございました。オホーツク文化は異系統の集団ということで、ごく限られた場所に、オホーツク海を中心に展開した文化で、少し後の時期に現れる擦文文化とはずいぶん様相が違うということを御報告いただきました。

それでは最後の御報告をいただきたいと思います。高瀬克範先生です。北海道大学大学院文学研究院准教授ということでございます。1974年札幌市でお生まれになり、北海道大学大学院文学研究科を修了しています。岩手県埋蔵文化財センター、東京都立大、明治大学を経て現職。現在北太平洋沿岸の歴史生態学を研究なさっており、主な著作としては『本州島東北部の弥生社会誌』ががございます。それでは高瀬先生よりしくお願いいたします。

高瀬 高瀬と申します。よろしくお願いします。今日は、北千島とカムチャツカのアイヌ遺跡についてお話をさせていただきます。特に、アイヌ語の千島方言を話していた千島アイヌが残した遺跡をとりあげます。通常、千島アイヌの居住範囲は中千島と北千島とされ、中千島では羅処和島に、北千島では占守島に拠点を置いていたと理解されています。しかしながら、狩猟・漁労を経済の基盤として、千島列島北半部をかなり頻繁に移動しながら生活していたことも知られています。千島列島最北端の占守島からおよそ12kmの海峡を隔てたカムチャッカ半島にはイテリメンやカムチャダールと呼ばれている先住民が居住しているため、カムチャッカはアイヌの居住域には含めないというのが一般的な理解です。

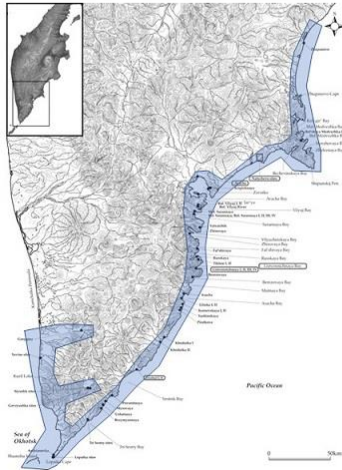
ただし、これは19世紀の民族の分布にもとづく理解でありまして、それ以前についてはもっとダイナミックな歴史が展開していたということが分かってきています。南カムチャツカについては、以前からアイヌが住んでいたことが主張されてきました。言語学の村山七郎氏が、南カムチャッカに川を意味するアイヌ語のベツ、ベツがつく地名がみられるため、そこにはかつてアイヌが居住していたことを1960年代から70年代に指摘しています。しかし、それはいつの話なのか、具体的にどのエリアに住んでいたのかということは全く不明でありましたが、最近の考古学的な研究によってそれが少しずつわかってきています。本日は、その成果を踏まえてお話をいたします。

まず、文献などから知られる千島アイヌの歴史をごく簡単にまとめます。千島アイヌは、ロシアの文献では17世紀の末から18世紀の前半からクリルの名で記録されるようになります。先ほどの地名に関する記録も、ベーリングの1740年代の第二次探検記録の情報が利用されています。1875年の樺太千島交換条約により、それまでロシア領に居住していた千島アイヌの人々は日本領に組み込まれることとなり、国籍の選択を迫られます。その後、日本人の役人が戦艦で北千島を何度か訪問し、日本国籍を選択し千島に残った千島アイヌが、勝手な行動、つまり国境を超えてカムチャツカに渡ったりしないよう監視していました。

しかし、北千島は非常に遠く、現地調査にも多大なコストがかかるため、開拓使や国が千島アイヌの行動を統制するのは容易ではありませんでした。そのため千島アイヌは、1884年に色丹島の斜古丹に強制移住させられます。当時、強制移住させられた千島アイヌの人々は97名でしたが、僅か半年で77名に減ってしまい、その後も凄まじい勢いで人口が減っていきました。強制移住後に、生業、住居、言語、教育など多くの面で日本式の生活への転換が促されましたが、人から文化や言語を無理やり取りあげることが、いかに悲惨な結果を招くかということを示すよい例だだと思います。このような事情もあり、20世紀のはじめには北千島で狩猟をするための季節的な出稼ぎも認められていましたが、それも10年もしないうちに終わってしまいます。1945年の終戦時には、北海道本島などへの移住を再び余儀なくされました。千島アイヌの文化継承者は20世紀中に不在になっており、日本人や日本政府はひとつの民族を消滅させたという負の歴史を

カムチャツカ南部のアイヌ遺跡

30遺跡群100 遺跡以上



内耳土器 (ないじどき)



ロシア科学アカデミー東北学際研究所
(マガダン)

高瀬講師 スライド3 アイヌ遺跡の分布

アイヌが作り、使った特徴的な土器がカムチャツカ半島でも多く出土します。このほかにも、例えばキエと呼ばれる銚頭や、マレクと呼ばれる漁労のための鉤針なども出土します。こうした遺物が出土する遺跡が、なぜアイヌの遺跡といえるのでしょうか。もともとカムチャツカにいた人々がアイヌの物質文化を受け入れた可能性は考えられないのでしょうか。

南カムチャツカでは、内耳土器などが出土する遺跡の直前の段階に位置づけられる遺跡は全くといってよいほどありません。当時、南カムチャツカはほぼ無人状態であったと考えられます。しかも、その後に残されるようになる遺物はアイヌに特徴的なものばかりです。いっぽうで、カムチャツカ半島北部との文化的なつながりをしめす証拠は皆無であり、半島北部から南下してきた集団が遺跡を残すようになった可能性は皆無です。明らかに、アイヌの物質文化をもった集団が南から千島列島を北上して南カムチャツカにやってきたのであり、その人々こそ千島アイヌの祖先と考えざるを得ないのです。

では、千島アイヌの祖先は、いつカムチャツカ半島にやってきたのでしょうか。カムチャツカや北千島における内耳土器の出現時期からみて、千島アイヌの成立時期は15世紀の半ばであったと考えられます。さらに、内耳土器の分布も考慮すると、彼・彼女らは17世紀までは北千島だけではなく南カムチャツカの広い範囲に住んでおり、遺跡の数や遺物の量から考えると、むしろ本拠地はカムチャツカにあったと考えられます。しかし、カムチャツカにおける居住域は18世紀のはじめに一気に縮小し、19世紀の初めまでにカムチャツカから完全に撤退したと考えられます。18世紀前半、ロシア人は毛皮税を取るために北からカムチャツカ半島に本格的に侵入し、コリャークやイテリメンの人々と激しく戦いを繰り返しています。こうした社会情勢が、千島アイヌの居住域縮小に関係しているのではないかと予測しています。

千島アイヌの人々は、19世紀まで堅穴住居を使いつづけていました。こちらの写真は、最後の段階まで使われていた占守島別飛(べつとぶ)地区の堅穴住居です。堅穴住居のおおまかな変遷はわかっておりまして、15世紀から17世紀の古い段階においては、正方形や長方形の住居の一边に出入口がつくものが一般的です。18世紀以降になってくると、出入口が長大化し、そこに小部屋がつくような例もでできます。最終的に、そうした小部屋が大きくなり、19世紀の民族誌で記録されているような複数の居室が通路で連結されている複室型の堅穴住居が用いられるようになります。

カムチャツカ南部のアイヌ遺跡の具体的な事例をいくつかご覧いただきます。このスライドは、東海岸のナルィチェヴォという遺跡群を示しています。ペトロパヴロフスク・カムチャツキーから東北に60kmぐらい行ったところにあります。海岸近くにナルィチェヴォ湖があり、その周りに18箇所の遺跡が確認されています。右下の図は、そのなかでも比較的堅穴数が多いナルィチェヴォ9遺跡の略測図です。この遺跡群全体では、地表面で確認できる堅穴の数は148基です。18遺跡で148基ですので、平均すると一遺跡で10基

背負っています。

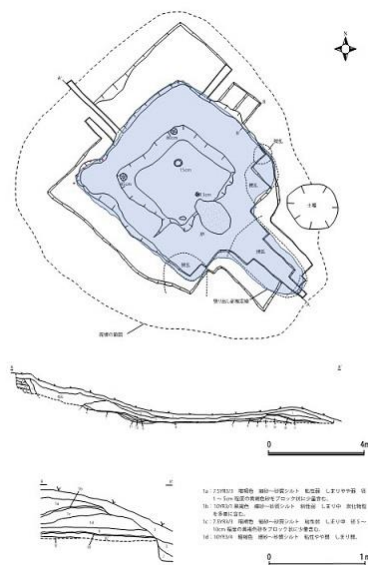
それでは、考古学的な研究の成果を見てみましょう。これまでの調査により、カムチャツカ半島の南部にアイヌの遺跡が実際に残されているということは分かっています。西海岸では遺跡の分布は狭いですが、東海岸では広い範囲で多くの川の河口部にアイヌの遺跡が残されています。遺物の量、遺跡の数、堅穴住居の数からみて、恐らく相当な数の人々が暮らしていたと考えています。

アイヌの物質文化の指標になるのが、内耳(ないじ、うちみみ)土器と呼ばれるアイヌに特有な土器です。

北海道やサハリンでも出土しますが、

にはとどかないぐらいになるかと思っています。ナルィチェヴォ9遺跡では1号から9号の住居が確認されており、かつて我々は2号住居の発掘調査を行いました。

こちらがその写真です。左側の測量図では青い部分が竪穴住居でして、先ほどご覧いただいた通り四角い部屋の一辺に出入口がつきます。村上さんのお話にも出てきましたが、住居を作るときに掘り上げた土を周りに盛り上げた周堤も確認することができます。炉は、住居の真ん中ではなく、出入口に近い方で確認されました。住居中心部の床面はやや掘り窪められて、段差があります。



ナルィチェヴォ9



高瀬講師 スライド8 ナルィチェヴォ9遺跡2号住居

二つ目の事例です。ペトロパヴロフスクよりも南に位置するリストヴェンニツナヤ遺跡群です。この遺跡群では3遺跡が確認されていますが、地表面から確認できる竪穴が50基ほどですので、平均すると一遺跡で10数基になります。通常は竪穴住居が作られないような傾斜が非常にきつい斜面にも、アイヌ文化の人々の竪穴住居がみられます。竪穴住居の周囲に深い溝を掘り、その溝を掘ったときに出る土を盛り上げて周堤が作られています。特に斜面の下の方では周堤を高く盛り上げ、傾斜の下の方と上の方で周堤の高さにあまり大きな差が出ないようにしていることが明らかになりました。おそらく、竪穴住居内部を掘ったときにでる土だけでは十分な高さの周堤を作ることができないために、周堤の外側を溝状に掘ることで十分な高さの周堤を作るための土を確保したのでしょう。

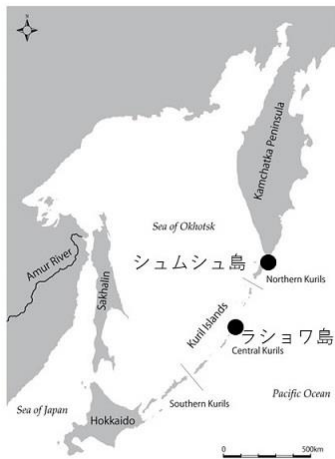
三つ目の事例は、さらに南に位置するクリル湖の遺跡群です。カムチャツカにおけるアイヌの遺跡としては少し例外的で、内陸にある遺跡群になります。この湖は川を介してカムチャツカ半島西海岸、つまりオホーツク海とつながっており、膨大な量のベニザケが遡上してきます。ベニザケの産卵床は湖に流れ込んでいる小さな川にあり、夏から秋にかけて多数のサケを捕獲することが可能な場所です。世界的に見てもヒグマの生息密度が非常に高いところとしても知られていますが、ヒグマもまた湖や川でとれる豊富な食料に支えられています。湖岸には多くの遺跡が確認されていますが、ここではシユシュクという岬にある古くから知られている代表的な事例を御紹介いたします。

この岬の周辺では、一遺跡に10数基から20基に満たないほどの竪穴住居が地表面で確認されています。湖の周囲には全部で15遺跡ほどありますが、そのなかでもシユシュク岬周辺は遺跡の規模が大きいほうです。湖周辺では人為的な攪乱によりかなり破壊されている遺跡もありますが、全体ではおそらく200基は超えない程度の竪穴があると考えられます。

四つ目の事例です。さらに南のトリセストリ1遺跡です。カムチャツカ半島南端に近い地域の東海岸に位置するこの遺跡は、カムチャツカにおいて一遺跡としては最大の竪穴数が確認できる遺跡です。略測図では97基の竪穴が現地表面から確認され、形状からみてもほとんどアイヌ文化の竪穴と考えられます。半島南端にちかいこの地域は、カムチャツカでは千島アイヌが最後まで住んでいたところになります。したがって、複数の部屋が通路で繋がっている複室の竪穴住居も見ることができます。

千島列島に目を向けてみましょう。千島アイヌが強制移住の直前まで住んでいた占守島のアレキサンドル丘、あるいは別所沼と呼ばれているところでは、現時点では10基かそれを少し超えるぐらいの竪穴住居を確認することができます。そのなかには、やはり複室の竪穴住居を地表面から確認することもできます。戦前に別飛地区を調査した馬場脩氏の記録によりますと、全体で260基ほどの竪穴がありました。ただし、この地域ではオホーツク文化の遺物もかなり出土しますので、全てがアイヌ文化の竪穴と考えるわけには行きま

ラショウ島



ラショウI遺跡 約110基

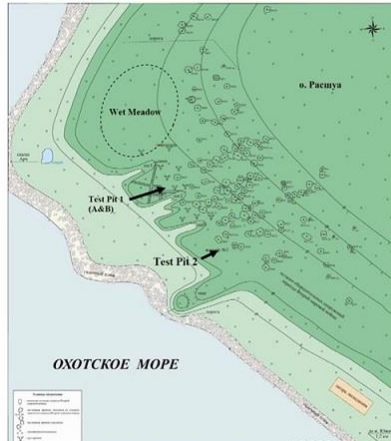


FIGURE 3.25.3: Map of Rasyow I site made by V. O. Shubin and N. V. Toropova using compass, tape, and GPS measurements.

Fitzhugh et al. 2009

高瀬講師 スライド 14 羅処和島の集落遺跡

せん。すこし差し引いて考える必要があるでしょう。

最後は、千島列島内でも一つの拠点があつた羅処和島です。羅処和島は、私はまだ行ったことがありませんので、アメリカのワシントン大学とサハリン州郷土博物館が実施した調査の報告を使わせてもらいます。遺跡の規模と時期からみて、千島アイヌの拠点集落として使われていたのは恐らくラショウ 1 遺跡です。この遺跡で実際に発掘されたのはきわめて狭い範囲ですが、略測図が作られています。竪穴住居は 110 個ほどが確認されていますが、縄文文化やオホーツク文化の竪穴も混在していますので、す

べてがアイヌ文化期の竪穴ではありません。実際にアイヌが残した竪穴はさらに数が少なくなりますので、数十基のオーダーになると思います。

ここで、まとめに入ります。カムチャツカと中・北千島の知見をもとに北海道の竪穴群を眺めてみると、どのような特徴があるのかを考えたいと思います。まず、北海道の竪穴群は規模が大きいことは確実です。先ほど熊本先生のお話にもありましたとおり、2000 基を超えるような竪穴が密集している事例はカムチャツカや中・北千島ではありません。占守島では最大でも 260 基、羅処和島では 110 基、カムチャツカのナルイチェヴォ遺跡群で 148 基、トリセストリ遺跡でも 97 基にとどまります。私はカムチャツカの北部やオホーツク海北岸のマガダン州などでも調査を行っており、こうした地域でも竪穴住居が長期にわたって用いられています。しかし、一つの遺跡で竪穴数が 10 基を超えるような遺跡は基本的にないといつてよい状況ですので、北海道の竪穴群ではいかに数が多いかがお分かりになるかと思います。

北海道に匹敵する規模の竪穴群があるのは、南千島の択捉島と国後島、あとはサハリンだろうと思います。澤井さんが航空写真で数えたところでは、国後島南端の泊周辺のように 700 基以上が確認できるエリアがありますので、詳細に調査すれば数のうえで北海道に肩を並べる竪穴群はありそうです。しかし、より北に位置する中・北千島やカムチャツカに目をひろげてみても、北海道ほど大規模な竪穴群が見つかる見込みはありません。

このほかにも、北海道の場合は竪穴群の存続時間が非常に長いという特徴がありますし、形態、面積、付属施設、深さの多様性が高い点も特徴であり、魅力であると考えられると思います。私の報告は以上です。ご静聴、有難うございました。

澤井 高瀬先生有難うございました。中々私たち北千島あるいはカムチャツカの遺跡のことについて触れる機会がありませんで、貴重な情報をいただきました。

それでは、時間の方も押してきておりますけれども休憩に入りたいと思います。質問のある方は受付の方へ提出していただきたいと思います。今 3 時 57 分です。取りまとめの時間等もありますので、4 時 5 分に再開をしたいと思いますのでよろしくお願いいたします。それでは休憩に入ります。

第 2 部 討論：古代集落遺跡の価値

澤井 それでは討論の方を、第 2 部を開催したいと思います。会場の時間が限られておりまして最大限伸ばしても 4 時 40 分までには終了したいということですので、討論の時間若干短くなりますけどお許しいただ

きたいと思います。質問のほうもたくさんいただきまして有難うございました。全ての質問にお答えする時間がないことをまずお許しいただきたいと思っております。質問いただいた中から今日の話題に合致するものを絡めまして討論を進めていきたいと思っております。

皆様今日お手元にこのカラーの「北海道の古代集落遺跡群」という大変立派な、できたばかりの冊子お手元にいつているかと思います。この堅穴はオホーツク海側の湧別町にシブノツナイ堅穴群という堅穴がございまして、そこはまだほとんど発掘調査されていないんですけども測量などが始まっております。御覧になってわかります通り正方形の堅穴が残っております。これは擦文文化の堅穴群ということで、本日擦文文化を中心に置きました報告というのはなかったんですけども、八木先生のお話の中で若干触れられております。

この写真を御覧になって分かりますとおり、またいろいろな先生から図版で示されましたとおり、北海道あるいは北方地域というのは堅穴が非常にたくさん残されております。そういうところから諸先生方にうかがっていききたいと思います。恐らく発掘調査されたもの、まだされていないものを含めまして万を超える堅穴、北海道地域にはありますし、先ほど高瀬先生からのお話にもありました通り千島列島あるいはサハリンにも残されております。なぜこれほど多くの堅穴が北方地域に残されていたのか、その自然的な要因、あるいは人為的な要因も含めまして熊木先生、このような理由で、というものがありましたら教えていただきたいなと思います。

熊木 遺跡の数としては、本州などでは窪みとして残っていないというだけで、遺跡の規模としては北海道も本州も大きな遺跡はあると思うんですけども、窪みで北海道になぜ堅穴が残っていたのかということを考えますと、正直なところ開発の手が及ばなかったというのが一番大きな理由かなと思います。現在、道東地域で堅穴が多く残っている地域は、長い間開発の手が及ばなかったということが大きな要因であると、まあ身も蓋もない話ではありますが、まずはそこを考える必要があると思います。

もう一つ、よく言われることで、北方地域では土壌の形成が遅いので、堅穴が窪んで残りやすいということがよく言われるんですけども、これに関しては、具体的に本州と北海道でどのくらい土壌形成のスピードや量が違うのかと言うことを検証した考察を把握できていないので、これに関しては今のところ判断を保留したいと思っています。本州に窪みで残る堅穴群があるのかについては、北海道教育委員会の方々が中心になって調査されているんですが、東北ではいくつも遺跡が見つかっています。私が把握している中では、千葉県房総風土記の丘で古代の集落、堅穴が窪んで残っていたという記録がありますね。あるいは新潟県の妙高市に斐太（ひだ）遺跡という国指定の史跡がありまして、そこは弥生文化の堅穴群がやはりくぼみで残っていると。ホームページを見ると弥生文化の中で窪みで残る堅穴では一番南の遺跡だというふうに紹介されていて、窪みがまとまって残ってます。そういうようなことを考え合わせてもですね、単純にやはり気候の問題というわけではないのかなという印象を持っています。

澤井 はい、有難うございます。私たち何となく北海道は冬の間地面が凍ったり雪が積もったりして堅穴が埋まり切れない期間が増えたり、あるいはさきほど熊木先生がおっしゃったように土壌の形成が遅いだろう、ということを考えたりもするんですけども、熊木先生の御勤務されている「ところ遺跡の森」という遺跡がありまして11月ぐらいに行くと落ち葉で堅穴がびっしり埋まっているというような状況が実際にありますので、一概に土壌の形成が遅いからってというのは確かに、簡単に言うことはむづかしいのかなというふうには感じます。東北地方の例ということで言うと八木先生、何か例がありますかね。

八木 そうですね、東北地方で堅穴住居が残っている、地表面で観察できるのはほとんど山の上です。山地集落とか、いろいろな呼び方はあるのですが、山の上で森林に覆われているようなところは残っている例がいくつかあります。それ以外の平地の部分についてはほとんどそういう例はありません。例えば平安時代の中においても、廃絶された住居跡のくぼみがあってもその一部を壊してまた新しい住居を作ると言うようなことをしています。ですから土地利用がどんどん繰り返されていくという、古代の中においてもそういう繰り返しがあったので、東北地方は、関東もそうでしょうけども、平地では窪みというものが残らなかったと思います。パンフレットの写真を見ますと、前の住居を避けるようにして作っていますよね。ですから、そういう土地利用の仕方が基本的に違っていたのかな、と思います。

澤井 有難うございます。平地においては恐らく堅穴住居があったところを埋めて、さらにそこにまた新た

に住居を作るというようなことで、それで窪みが残らない例が多いのではないかと、土地利用の違いがある、この窪みのあるなしというのが考えられるのではないかとのお話をいただきました。

では、やはりこのことに関連するんですけども、なぜこれほど多くの堅穴住居が作られたのかということですね。このフォーラム、札幌会場を本日やりまして、あさって根室で開催するんですけども、その根室会場のほうに登壇してくださる小野哲也先生の、今日のパンフレットの一番後ろのほうに発表要旨がありますが、この根室標津の堅穴群は4000を超える堅穴がある。そして常呂は2000を超える堅穴群、こういう1000を超える堅穴群が作られたということなんですけれども、じゃあなぜこれほど多くの堅穴住居が作られたのか、というあたりですね、八木先生、何かお考えがあれば教えていただきたいんですけども。

八木 はっきりしたことは申し上げられないんですけども、ひとつには住居の存続期間の問題があるのかなと思います。東北地方でも大集落というのはあるのですが、さすがに1000を超える集落というのは、多分ないだろうと思います。盛岡のほうで大きな区画整理にともなって30年ぐらいかけて発掘をしましたが、それでも1000にはいきません。ですから、こちらの擦文時代の堅穴住居の存続期間が短い。短いので繰り返し新しく住居を造っていった。そういうことが一つ考えられるのかなと思います。これはもう実際に発掘をして存続期間をきちんと確認しなければいけないのですが、そういうことが考えられます。

東北地方の例を挙げますと、たとえば住居を使っているうちにかまどが、壊れたのか何かわかりませんが、かまどを作り替えるという例が結構みられます。多いところだと、平安時代になってからですけども、だいたい10%から15、6%ぐらいの住居でかまどの作り替えが認められています。奈良時代などはそういう例が少ないんですけども、平安時代、9世紀10世紀になるとかまどを作り替えてでもまた住み続ける、そういうことが東北地方の特徴なのかなと思います。そのへんはちょっと北海道の方にも伺いたいと思いますが。

澤井 はい、有難うございます。北海道ではかまどを壊して使えない状態にして、家屋を焼却するという例はかなり実際に多いようで、その使われなく、というか一代で、一代というんですかね、非常に存続期間が違うのではないかとこのことを先生おっしゃいましたけども、北海道の擦文文化の場合はもしかしたら、より本州と比べて存続期間が短かったということは言えるかもしれません。常呂のほうを調査されてる熊本先生、このあたり何か御意見がありますか。

熊本 先ほどのスライドで常呂川下流域の続縄文、擦文、オホーツクの住居の数というのを出示してみました。続縄文の堅穴は確実な例が265軒、おそらくは500軒から多くとも1000軒程の堅穴があったと推測されますが、これは前半期に限られているので、600年間ほどのあいだにつくられたものになります。一方で擦文文化は、多分300年ほどの間で2000軒もつくられているので、これはやはりちょっと桁が違うというか、集落の規模が同じとは考えにくいですね。その擦文文化の動きを見てみますと、もともとオホーツク文化があった時期には全くないものが、オホーツク文化がいなくなると突然大規模な集団が押し寄せてきて、300年ぐらいつき、また痕跡が無くなってしまふ、というような激しい変化が起こります。やはりそれ以前の時代とは全く異なる社会状況があったと考える必要があるのかなと思います。

よく我々は、常呂は豊かな場所だったから人が多く住む、というような説明をするんですけども、もちろんそういう背景があるのは間違いないんですが、生態的な要因だけで説明するにはちょっと動きが激しすぎるように思います。それが何なのかはこの場では答えられないんですけども、単なる生態的な要因だけではない、別な要因を考える必要があるだろうというのは、間違いのないところだと思います。

澤井 有難うございます。北海道と環境が違うんで一概に比較はできないんですけども、私15年ほど前にある建築史の先生の科学研究費交付金の入る大きな研究がありまして、少しだけ参加させていただいたことがあって、北海道から日本海を挟んで対岸の沿海州ですか、アムール川流域に赫哲（ホジェン）という先住民がいるんですけども、彼らは今でも堅穴住居を作って利用しているんですね。で彼らの利用スパンというのが大体1年過ぎたらもう放棄すると。新しいのを作っちゃうと。これは現代の民族例ではあるんですけども、意外に短い、意外というか思ったよりすごく短い、ワンシーズンで終わってしまうという例もありますんで、もしかしたらこういう擦文堅穴というのも数シーズンで放棄して次々に新しい住まいを作っていた可能性というのは考えられてもいい、そういうふうに思っています。

それではこの竪穴、八木先生、熊木先生に北海道ということでお話かがったんですけれども、この竪穴住居ですね、このあたりの構造っていうんですか、あるいは集落の構造でもいいんですけれども、本州、東北地方と北海道の似ている点と、ここは違うんじゃないかというあたりの点、八木先生と村上先生からちょっと教えていただけると有難いですが。

八木 はい、住居の作りは基本的にはさきほどのスライドにもありました四角、方形ですね、そしてかまどを持つということですので、それは大きな共通点だろうというふうに思います。また住居の規模が違いについてです。パンフレットを見ても大きい住居、小さい住居があります。この大小は何か、そこに住んでいる家族、人数の違いということも言えると思いますが、いま私たちが東北で考えているのは、大きい住居に家の長（おさ）、家長が住んでいたのではないかと考えています。そこには、大きいせいなのかも知れませんが土器がたくさん出ます。本当に大きいところだと甕がもう何十個も出る場合があったりします。そのほかにも鉄の道具、斧であるとか鎌であるとかそういった農具とかそういったものが多く出るということは、生産活動をその大きい住居が、まあ管理をしていたと考えられます。そのほかにも土製の玉、数珠玉のようなものののですが、そういったものも大きい住居に集中する傾向があります。それらは家族祭祀と言いますか、家庭の、家族の中で行う祭祀、それをつかさどるのがその大きい家の住人、それが家長である。周りに小さい住居があって、そこで一つの大きな家族を形成するという、そういうことを考えています。北海道でそういった分析をきちんとしているわけではありませんけれど、似たような家族制度がもしかしたらあったのかな、という気もしております。

あと、違いということですが、そうですね、基本的には同じだということですが、やっぱり時期が少し、ちょっとずれてくるといいますかね、開始の年代、あるいは終焉の年代が東北と北海道ではやはり時間差があるのかなというふうにみております。まあ簡単に言うとそういうところでしょうか。

澤井 有難うございます。時間差というのは具体的に、東北は何世紀から何世紀で、北海道は何世紀から何世紀かと。

八木 東北北部は6世紀の終わりぐらいから始まります。ただ太平洋側と日本海側でも実は時間差はあります。北海道の例で先ほど丸子山遺跡を示しましたが、東北との対比から行きますと7世紀の後葉、終りぐらいですので、百年までは行かないと思いますが、何十年かの時間差があるのかなと考えられます。終焉につきましては、もとより諸説あってはつきりしないのですが、仮に北海道が12世紀ぐらいまでとしますと青森あたりが11世紀ぐらいですから、やはり1世紀ぐらいのずれはあるのかな、と考えています。

澤井 有難うございます。じゃあ村上先生お願いいたします。

村上 秋田県ですと平安時代の竪穴の大きさというのは、大体平均しますと一辺が4m強ぐらいになるかと思います。それで、かまどがつくんですけれども、南と東壁で大体90%ぐらいですね。それ以外の壁にかまどがつくられるということは大変少ないです。それでさきほどの発表のほうでお話が合ったんですけれども、かまどから炉のほうに変わっていくというお話がありましたけれども、やはり秋田では平安時代の終りぐらいですね、そちらのほうになってくると少しづつ炉も数が増えてくる、そういった傾向にあります。

あと、片貝家ノ下遺跡の場合ですと、住居というか集落の存続期間にもかかわってくるんですけれども、古いほうに作られた、当然なんですけども、竪穴建物が切り合いがたくさん見られるエリアがあります。あとそこでの使用が終わってから、今度は竪穴をそのままの状態に放置する部分もありますし、あと最後に建物が立ったままの状態に埋没している、そういったものもあります。それで片貝家ノ下遺跡については、一応今のところ915年という年代が生きているとすれば、そこでもう村は途絶えていますので、一番古い時期の竪穴を調べることによって集落、建物の変遷がつかめてくるんじゃないかなと思ってます。

澤井 有難うございました。竪穴集落の類似点、構造というのは似ていると。規模はどうも違いそう。あと東北のほうでは大きな竪穴からは様々な遺物が出てきてどうも首長の存在をうかがわせるものがあるようだと。ただ、北海道の擦文遺跡の竪穴というのは掘っても、四角い竪穴とかまどと土器とぐらいなもので、大きいから遺物がたくさん出るとか小さいとあまり出ないとかっていうことも一概には言えない、こちら辺りちょっと難しいところかと思います。

もう時間が迫ってまいりました。もう一つ二つやれればと思ってます。それでは、北海道は擦文文化が12

世紀から遅くても13世紀ぐらいには堅穴を作ることはなくなります。平地式の住居になるんですけれども、サハリン或いは千島列島ではこのアイヌ文化期に至っても堅穴が作り続けられるんですけども、そこら辺の理由について高瀬先生、何かお考えがあれば教えていただきたいんですけども。

高瀬 樺太アイヌが冬の家として堅穴住居を使い続けた背景には、防寒などの実用的な側面で一定の効果がやはりあったのだと思います。ただ、一般的に堅穴住居は寒冷地の住居と言われてはいますけれども、例えばマイナス60から70度ほどまで下がるヤクーチアのようにさらに寒い地域では、堅穴住居がないことにも注意が必要です。永久凍土のために土が掘れませんので、寒ければ堅穴住居になるというわけではありません。北海道で堅穴住居が消えるのは、恐らく本州からの文化的影響がかなり強くなったためであると思います。樺太など北海道以外の地域ではそうした影響が弱かったために堅穴住居が残った可能性があり、なぜ堅穴住居が使い続けられるのかということは、なぜ消えるのかということとかなり密接な関係があると思います。

澤井 有難うございます。堅穴住居がなぜ消えるのかということなんですけども、かまどが囲炉裏に変わるんだと。堅穴住居の壁際にかまどを作りつけて、で擦文土器の中にはめて、火を焚いて調理するというものから、住居の真ん中に鉄製のお鍋ですね、さきほど高瀬先生のスライドに出てきました内耳土器というのがありましたけども、あれは鉄製のお鍋を模して作ったものなんですね。で囲炉裏にかけて使うスタイル、どうもそれと関係がありそうということなんですけど、何度も申し訳ないですけど八木先生こちら辺の話、かまどから囲炉裏、土器から鍋というあたり、何かうかがえますか。

八木 そうですね、そのような変化は基本的に東北も南からの影響で変化していくということだと思います。時期的な流れから言ってやはり南の方が早いものですから、関東であるとか東北南部からの影響による変化だというふうに思われます。その影響は、地域社会の発展や地域の有力者が台頭してくる過程の中で、南の生活様式を受け入れる、近づけるという動きがあったことが想定されます。

また都から地方に役人が赴任してくると、そういった人たちが東北の従来の生活様式を変えていくことも当然あったと思われれます。あまりいい言葉ではないのですが、日本化されてきて、従来のものがどんどんなくなっていく、そういう動きが見て取れるのではないかと思います。

澤井 大きな日本化のうねりの中に擦文文化というのもあって、堅穴住居から平地住居に変わっていった、というふうに考えることもできるか、ということですね。はい、有難うございました。もう時間も4時半を回ってきました。

最後なんですけども実はこの第二部討論テーマというのがですね、「古代集落遺跡の価値」ということで価値の話をしないと締められないということでございますので、実は熊木先生のいらっしゃる常呂のある北見市と、それからさきほどお話に出ました4000以上の堅穴群のある根室の標津町、それから北海道の三者が、将来的には世界遺産登録を目指したいということで「北海道東部の窪みで残る大規模堅穴群」ということで世界遺産登録に向けて頑張っているという途上でありまして、最後に熊木先生に大規模堅穴群のもつ価値と、期待、あるいはこれからの課題というあたり一言いただいて終わりにしたいと思います。お願いいたします。

熊木 今、澤井さんのほうからお話が合ったように、以前世界遺産の暫定一覧表の候補として常呂遺跡と標津遺跡を提案したことがあったんですけども、その時の評価は、遺跡としての価値は大いに認めましょうということだったんですが、世界遺産としての顕著で普遍的な価値がどこにあるのかが問題になりました。すなわち、アイヌ文化の成立に至るまでの北海道の歴史や、北東アジア全体の歴史を見たときに堅穴群というのがどのような価値をもつのか、その観点からの説明が不足しているという評価をいただいたんですね。まさに問題はそこにありまして、今日の討論の中でも何度もお話が出ました、なぜこういうものが残ったとか、ほかの地域と比較してどういう違いがあるのかというところがまだ明確にはなってないと思います。ですので今日はあまりお話しには出ませんでしたけども、ほかの地域ですね、サハリンやアムールなど、他の地域も含めた中で、この堅穴群というのがどういう価値を持っているのかというのを、考古学の立場からまずは明確にする必要がある、ということ意識しています。

また、登録に向けた活動という意味では、世界遺産という話になってくると、やっぱり研究者がやっ

だけでは全然だめで、いかに地元の人たちが、あれに価値があつて是非世界遺産にしたいというような動き、すなわち地域住民の想いですね、そういう声が地域から上がってこないとなかなかやはり盛り上がらない、難しいということを多くの方から言われています。だからそうなることをめざして、我々としてもいろいろな普及活動とか情報発信をしていきたいと思っていますし、自分ができる役割としては、そういう普及活動というのも課題になるのかなと思っています。現状だとなかなかまだ、地域で盛り上がってという状況ではないので、研究と並行しながら情報発信の側面も大事にしていかなければ、というのを地域にいるなかで考えるところであります。

澤井 有難うございます。専門で研究しているものたちだけでは到底これは実現することはできません。今日御来場の皆様の後押しというものがぜひとも必要になってきます。堅穴群につきましても、一部ですけれどもここ北大構内の北 18 条の遺跡保存庭園というのもございます。それから植物園でも堅穴の跡ご覧いただけます。知事公館でもございます。全道各地私たちの身近なところでこういう堅穴というのが残されておりますので、ぜひ関心を持って立ち寄っていただいて、周りの方々にも吹聴していただければ、というふうに思います。

それでは時間のほうももう 10 分ほど押してしまいましたけれども、第二部討論のほうをこれで終了させていただきます。拙い司会で申し訳ありません。先生方どうも有難うございました。それでは司会のほうを譲りたいと思います。

閉会

高久 先生方、最後まで時間の押した点を含め、有難うございました。以上をもちまして終了させていただきますが、最後に私ども、当北海道文化遺産活用活性化委員会の事務局長である安部事務局長から閉会の挨拶を申し上げます。

安部事務局長 皆さんお疲れさまでした。本日のフォーラムの閉会にあたりまして一言御挨拶を申し上げます。本日会場にお見えの皆様におかれましては寒波で冷え込む中、また足元の悪いところ会場まで足をお運びくださいまして、長い時間にわたり御参加くださいまして有難うございました。また今日のフォーラムを非常に有意義なものとしてくださいました講師の八木先生、村上先生、熊木先生、高瀬先生、そして司会進行していただきました澤井先生に心より感謝を申し上げます。

北海道では来年 4 月に皆様も御存じのとおりアイヌ文化復興・創造の拠点の「ウポポイ」がオープンするほか、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が今年度の国の世界文化遺産の推薦候補に選定され、現在ユネスコ世界遺産センターへの推薦書提出の準備が進められているところです。そういう中北海道においてもアイヌ文化や埋蔵文化財に対する関心が深まっていると考えております。このような中、今回のフォーラムでは講師の先生方から御専門の古代集落遺跡やアイヌ遺跡の研究成果を丁寧に紹介していただきますとともに、堅穴住居や古代集落遺跡の価値などについて熱心に討論をいただきました。北海道に先人が残した遺産とその意味について、新たな発見や価値、魅力などの理解を深めることができ、貴重な機会となったと考えております。改めて先生方にお礼を申し上げます。

このフォーラムが御参加いただきました皆さんにとって北海道の文化遺産の理解と、その遺産を継承していくことの意義について、お考えいただく機会になりますことを祈念いたしまして、閉会の御挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

高久 以上をもちましてこのフォーラムを終了させていただきます。有難うございました。

根室会場の記録



開会

高久事務局長：北海道大学学術交流会館に普及啓発フォーラムにお集まりの皆様大変ご苦労さまです。ただいまから、北海道文化遺産活用活性化実行委員会主催により「2019 年度地域の文化財普及啓発フォーラム」を開催いたします。本日の総司会を担当いたします、事務局の高久でございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

主催者として今回のフォーラムの趣旨について簡単に説明させていただきます。北海道文化遺産活用活性化実行委員会の今年度行おうとしております事業は、歴史資産を活用した普及啓発、歴史資産の情報発信、それから地域性を考慮したヘリテージ専門育成講座の三本の柱で事業を実施しております。今年の普及啓発事業は、地域の歴史・文化の特性を強く反映した文化財について広く道民の理解と関心を深めるために、埋蔵文化財を取り上げ、北海道東北部に多く分布する、国内地域には類例の少ない古代の堅穴住居遺跡群をテーマとした普及啓発事業として「北海道の古代集落遺跡」と題したフォーラムを開催いたします。

第一部では古代集落の遺跡について、道外を含めた 4 名の講師の研究成果を紹介させていただきます。第二部では、休憩を挟み、古代集落の遺跡の価値について 4 名の講師と司会を交え討論していただきます。それでは、最初に実行委員会を代表して角 幸博会長より挨拶をいただきます。

角会長 ただいま紹介いただきました北海道文化遺産活用活性化実行委員会の会長を務めております角と申します。主催者として一言御挨拶を申し上げます。本日は師走の大変お忙しい時に、またお足下の大変悪く、このように多くの方が出席いただきまことに有難うございます。私ども実行委員会は、一般社団法人北海道建築士会、NPO 法人歴史的地域資産研究機構、一般財団法人北海道文化財保護協会の三者で構成し、文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）の交付を受けて、北海道の地域の特性を示す文化遺産の保護、その継承と活用に取り組んで参っております。

北海道には札幌の時計台をはじめとしまして、近代化の過程を通じて多くの優れた建築物が残されております。私どももこれまでヘリテージマネージャーの育成事業などを通じて、主にそうした近代の文化遺産の保存と活用に取り組んで参りました。しかし、文化遺産に反映された北海道の歴史・文化の特殊性というのは、そうしたいわゆる開拓の過程だけに見られるものではございません。千年以上も前の先史時代からすでに、北海道には本州とは異なる歴史の歩みがあり、それが多くの遺跡として今日まで残され、またその歴史から生まれた文化の伝統がアイヌ文化にも受け継がれております。

今回のフォーラムでは、そうした古代遺跡の調査研究にたずさわる専門家を道内外からお迎えし、本州や海外とも比較しながら、北海道の古代遺跡の特徴と、その固有の価値について語っていただきたいと思います。

フォーラムの題名を「北海道の古代集落遺跡」といたしました。北海道の堅穴住居群を中心とする集落遺跡から古代の生活文化を理解する多くの糸口が見つかるはずだと思いますけれども、そうした先人の残した遺産を、我々はまだ上手に受け止めていないのではないかと、いうふうにも考えております。そうした意味で、このフォーラムが、この土地に残された、他では見ることでできない文化遺産を理解し、それを継承していくことの意味についてお考えいただく有意義な機会となれば大変うれしく思います。

最後になりましたが、このフォーラムの開催にあたりましては根室教育局の皆様、根室市教育委員会の皆様には多大な御協力をいただきましたことに感謝申し上げます。本日は限られた時間でございますけれども、最後までよろしくお願い申し上げます。

高久 ここで来賓として出席いただいております北海道教育庁根室教育局藤田寿香局長から御挨拶をいただきます。

藤田局長 御紹介いただきました根室教育局藤田でございます。よろしくお願いいたします。本日は大変お疲れ様でございます。2019 年度地域の文化財普及啓発フォーラムの開催に当たりまして一言御挨拶を申し上げ

げます。はじめに本フォーラムの開催に向けまして本日まで準備に当たってられました北海道文化遺産活用活性化実行委員会の皆様の御尽力、御労苦に対しまして心から敬意を表する次第でございます。

さて本日のフォーラムは古代の集落遺跡をテーマに、道内外からお迎えしました専門家の皆様により、その特徴や価値を語り、論じていただくものと伺っておりますが、当根室管内にはこうした遺跡が道内でもとりわけ多く所在をしております。その中には根室市の西月ヶ岡遺跡や標津町の標津遺跡群のように国の史跡として保護されているもの、また羅臼町の松法川北岸遺跡のように国の重要文化財となった出土品が発見された遺跡も含まれております。

こうした貴重な文化財を取り巻く状況を見ますと、文化財の滅失や散逸等の防止が緊急の課題の中、平成30年に文化財保護法の見直しが行われ、文化財を将来へと守り伝えていくためには地域社会総がかりでの取り組みが必要であり、そのために地域における計画的な保存・活用等の措置を図ることとされたところでございます。その一部、具体的内容としまして、地域の中で文化財所有者の相談に応じたり、調査研究を行ったりする団体を市町村が「文化財保存活用支援団体」として指定することを可能とするなど、文化財の保護に地域の住民がより積極的に関与する道が開かれております。こうした流れの中で今回のフォーラムが、民間団体を組織されました実行委員会から文化庁の支援を得て、道内に共通してみられる類型の文化財の価値を広く普及啓発するために実施されるものであり、各自治体の立場を超えた貴重な取り組みであると言えるものです。

また文化財の価値の発見・追及といった面でも、北海道の埋蔵文化財の場合、それがいつの時代のどのようなもので、どのような意味を持つか、ということโดยตรงで説明した文献は存在しないことが一般的のようで、そのためその文化財としての価値は、主に考古学的な研究を通じて明らかにされていくこととなります。本日のフォーラムでは、まさにそうした調査研究の専門家の皆様にお集りをいただき、根室管内の地域性を示す文化財の固有の価値を論じていただけるものと、大変期待をしているところでございます。広い視野から北海道の古代集落遺跡の特性・価値を御論議いただき、参加者の皆様にとって、身近な文化財の持つ固有の価値を見直していただく貴重な機会となることを願っております。

結びになりますが、本日のフォーラムが実り多いものとなりますよう心からの御期待、さらには研究報告をいただく専門家の皆様方へのお礼を申し上げますとともに、参加されている皆様方の今後の御健勝を祈念し、お祝いの言葉とさせていただきます。大変御苦勞様です。

高久 有難うございました。続きまして根室市教育委員会寺脇文康教育長より御挨拶をいただきます。

寺脇教育長 只今御紹介いただきました根室市教育委員会教育長寺脇でございます。本日はこの地域の文化財普及啓発フォーラム「北海道の古代集落遺跡」にこのように多くの皆様にお越しいただきましてまことに有難うございます。ここ根室市は確認されている遺跡の数が308箇所と北海道で5番目に多く、道内でも有数の遺跡の数を誇る町でございまして、そうした当市におきましてこのフォーラムが盛会裏に開催されますことを心からうれしく存じますとともに、このたびのフォーラムの開催に御尽力いただきました北海道文化遺産活用活性化実行委員会会長、角幸博様を始め関係の皆様方に厚く御礼を申し上げます。

只今当市で確認されている遺跡の数が308箇所と申上げましたが、その中でも多いのが本日のフォーラムのテーマであります集落遺跡でございまして、市内では西浜町の国指定史跡、西月ヶ岡遺跡で350軒、また納沙布岬近くのトーサムボロ湖周辺で1500軒を超える竪穴住居跡が見つかったのほか、温根元竪穴群、弁天島貝塚竪穴群など、縄文時代からオホーツク文化期、擦文文化期に至るまで、長期間にわたる多くの居住の痕跡が確認されますとともに、各文化を特徴づける様々な遺物が出土されております。

また根室市においては、当市で戦前から長く考古学研究を続けてこられた北構保男氏から平成29年に13万点を超える貴重な考古資料を寄贈されたところでございます。この寄贈資料の出土地は根室市内を中心に旧樺太や北千島にまで及んでおり、オホーツク文化を特徴づける貴重な資料が多数含まれております。現在根室市におきましてこれらの詳細な整理や分析を行いますとともに、その活用や発信等につきましても検討を重ねているところでございまして、本日これから研究成果として御紹介いただきますオホーツク文化や北

千島、カムチャツカの遺跡に興味をつなげるところでありますとともに、このフォーラムが今後、市内に所在しておりますこうした遺跡や遺物につきましてもその文化的価値をさらに明らかにして、古代文化研究の中に位置づけられていく、このような糸口になりますことを期待する次第でございます。

結びに本日研究報告等のお話をいただきます専門の諸先生方に厚く御礼申し上げますとともに、本シンポジウムが御参加いただきました皆様にとりまして実り多きものとなりますことを心から御祈念申し上げます、フォーラム開催のお祝いの言葉とさせていただきます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

高久 有難うございました。ここで日程について説明をさせていただきます。最初にお配りをしました「北海道の古代集落遺跡」という次第・発表要旨の1ページ目を御覧いただければと思います。その前に最初のページの、「2019 年度地域の文化財普及啓発フォーラム」の文化財の財の字が間違っております。大変失礼をいたしました。それでは1ページ目をお開きいただければと思います。これからそれぞれ研究成果の紹介を行ってですね、3時に休憩を取ろうと思っております。3時に休憩を取り、第二部討論の終わりを16時ということで予定しております。

お配りをしました質問用紙につきましては休憩の際に質問用紙を入れる箱を用意しておきますので、事務局まで提出願います。それからアンケートにつきましてはお帰りの際に、明年度以降の参考とさせていただきますと考えておりますので提出に御協力をお願いいたします。最後になりますけれども、この行事につきましては道民カレッジ連携講座になってございますので、ほっかいどう学2単位となりますので、カレッジの手帳をお持ちの方は受付のほうまで提出していただければと思います。それでは北海道教育庁生涯学習推進局文化財・博物館課、西脇主幹のほうに司会を交代させていただきます。

第1部 研究成果紹介：古代集落遺跡の諸相

西脇 皆様こんにちは。北海道教育委員会に勤務しております西脇と申します。チラシを御覧になった皆様は北海学園大学の澤井先生が司会と御承知になってお出でになったと思いますけれども、本日澤井先生の御都合がつかみませんで、申し訳ありませんが私が司会を代理してやらしていただくことになりました。拙い司会でございますがどうぞよろしくお願いいたします。第一部として先ほど御説明がありましたように4人の先生方がそれぞれこれまで調査研究を続けてこられた成果を御紹介いただきます。

お一人目は八木光則先生でございます。八木先生は道内の八雲町でお生まれになり、その後長らく盛岡市で遺跡の調査研究を続けられたあと、現在岩手大学で後進の育成に当たられているところです。それでは八木先生、どうぞ宜しくお願いいたします。

八木 皆さん、こんにちは。ただいま御紹介いただきました八木と申します。よろしくお願いいたします。八雲の生まれです。北海道の広さというのはよくわかっていたのですが、昨日こちらに着いたのですけれど本当に北海道は広いなと思いました。先ほど地図をちょっと見ていましたら盛岡と札幌、札幌と根室の距離がほとんど同じなんですね。直線距離にすればほとんど同じです。本当に広いなというふうに思いました。さて時間もありませんので早速始めたいと思います。

はじめに、古代という文字についてお話をさせていただきたいと思います。日本古代史というような言い方もあります。これは教科書で言う日本史の時代区分のことなのですが、基本的には古代国家の始まりを以て古代が始まる。それはおおそ飛鳥時代の開始に重なります。世紀で言いますと6世紀の終わり頃です。これには諸説がありますけどだいたいそのような形です。6世紀の終わり頃と申しますと、皆様方がよく御承知の人物としては聖徳太子が推古天皇の摂政になったのがそのころということになります。

ただし日本列島すべてがみんなその古代の枠組みの中に収まったかというとなかなかそれは難しいだろうと思われます。ここで古代の定義の中に含まれるとするならば、それは国家の支配下、古代国家の支配下ですね。あるいは影響下にあった地域、まあそういった地域が古代と言ってもいいのかなというふうに思われます。そういう目で見ていきますと東北部の、私が住んでいる盛岡のあたりというのは、国家側からは二

次的な影響を受けてはいるのですが、かなり独自の社会を形成していた。その社会というのはエミシ社会ですね。「蝦夷」の字を御覧になると皆様はエゾという読み方を連想されると思うのですが、古代においてはエミシという表現だったと考えられています。さらに北海道に参りますと、独自色の強い擦文文化というものが成立しています。そういう意味では同じ枠組みの中で古代史ということで日本列島すべてを同じような形で話すのはややちょっと問題がある、ことにはなりますが、今回は東北との対比、そういった意味から便宜的に擦文時代を古代に含めて考えて進めていきたいと思います。

それでは本題に入りたいと思いますが、今日はちょっと時間ありませんので、古代集落の始まりと終わりの部分だけをお話しさせていただきます。中がすっぽりと抜けます。そのへんはあらかじめ御了解いただきたいと思います。

まず東北北部での古代集落の形成ですが、先ほど申しました6世紀の終わり頃、古代集落が東北北部でも始まります。それ以前は古墳時代という時代になるわけですが、その時代は東北北部、それから北海道もそうなのですが堅穴住居が作られない、そういう時代でした。その前の時代、縄文時代であるとか、あるいは北海道ですと続縄文時代という時代区分もありますが、その前半期においては堅穴住居があって、一定程度の定住生活を行っていた。それがなぜかこの時期になると遊動生活になる。遊び歩いているわけではなくて、游牧民の遊という字を思い浮かべていただきたいのですが、いろいろ移動しながら、例えば狩猟のたびに獣を追いかけて、移動しながら生活をするというような時代であると考えられております。日本列島の中でも特異な社会であったということになります。

その時期の人が住んだ跡ということで二つの遺跡をご紹介しますと思います。一つは岩手県の岩泉町豊岡V遺跡というところ。2~3m前後の丸い、浅い窪みです。その中央に床が赤く焼けたところがありますが、それが火を焚いた炉の跡です。柱の跡がありませんので、明確な柱を建てないで、移動式のテントのような構造と考えられます。そして中で暖を取ったり、あるいは煮炊きをしたりしたのでしょう。

もう一つは札幌市のK135という遺跡です。ここでは大体五角形に配置された穴がいくつ確認されています。形は正五角形ではなくてかなりバラエティに富んでいますが、だいたい5本柱で、テントを建てたような跡が確認されております。ここでは外で火を焚いたらしく、テントの周囲に赤く焼けた炉跡がたくさんあります。炉から獣の骨であるとか鳥の骨であるとか魚骨、魚の骨が出てきたりします。このように移動性の高い生活をしていました。

そして、6世紀の終わりごろから変化が始まってきます。ひとつには蝦夷（えみし）という言葉がはっきりと出てきます。これは国家側がつけた呼び方です。その蝦夷とは何かと言うと、自分たちの支配領域の外側の人間、北方に住む人間を蝦夷というふうに呼びました。その地域はどこかと言いますと、今の仙台のあ



八木講師 スライド5 蝦夷社会の範囲と地域性

たり、それから日本海側ですと新潟市のあたり、このあたりに蝦夷の国境（くにざかい）というものを設定します。それより南の地域は自分たちの支配領域という位置づけをするわけですが、その北は支配の外にいる人たち、という意味で蝦夷と呼んだのです。この根室のあたりは別の文化、オホーツク文化にあたるわけですが、北海道の中央部まで大きくは蝦夷と呼ばれた人たちが住んでいました。東北から北海道まで非常に広い地域になります。ですから地域ごとに文化も違う、それから人の特徴も違う。それらの違う要素を無視して、一括して蝦夷と呼ばれていました。

その広い地域を、私は大きく南部蝦夷社会、北部蝦夷社会といふように分けて考えています。南部蝦夷社会は6世紀に国境が決まった後にすぐに国家側の動きを受けます。関東地方、中部地方からも多くの移民がやってきたりして、だんだん支配領域の中に組み込まれていくという歴史をたどります。一方、北部蝦夷社会では、遊動生活や閑散とした小集落から集落を形作って定住生活を始めるようになります。その中でも初期の古代集落は岩手県の南側の胆沢、青森県の東側の八戸の二か所を中心に始まります。同時に末期古墳と呼ばれる、蝦夷の墓も造られ始められます。

八戸の例をみていくと、四角い竪穴住居を真上から見た図ですが、柱の穴が4本だったり6本だったりしますが柱を建てて、かまどを設けます。土でドーム形の施設を作ってそこで煮炊きをするということになります。ここで火を焚きますので煙が出ます。煙を外に出すための煙道、溝やトンネルがあるのですが、ここではない。こういった特徴というのは関東地方に多い。関東のどこかというのはなかなか特定できないのですが、関東地方に一般的な住居の、かまどの作り方ですから八戸の場合には、関東からの影響を受けてこういう竪穴住居ができただろう、というふうに考えられます。

胆沢の地域ですと、かまどの外に伸びる煙道が長く伸びます。これが一つの特徴です。そして焚き口の天井部、かまどの上部に石を渡してかまどを丈夫にしている構造なのですが、こういった構造というのは実は福島県の南部あたりに見られます。恐らくこの岩手県の南のあたりでは、福島県の南からの影響を受けてこういった住居が作られるようになっただろう、と考えられます。同じ東北地方でも八戸のあたりとそれから岩手県の南のほうとでは地域差があるということになります。

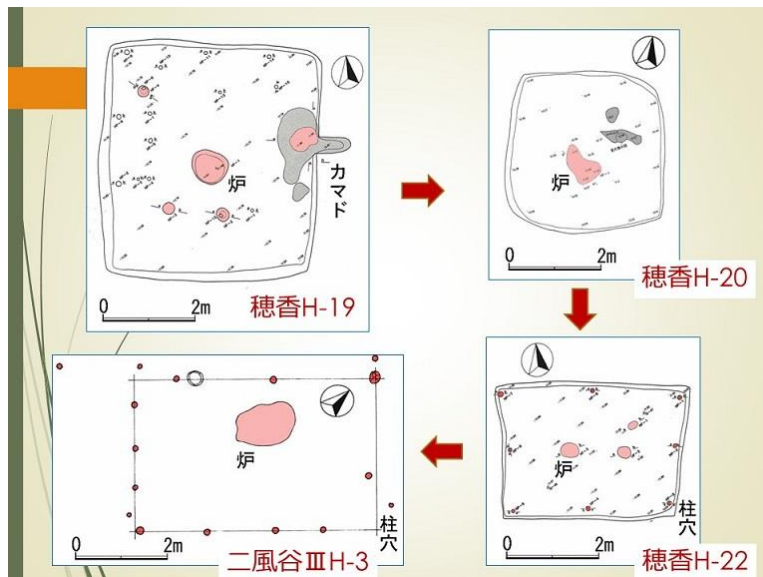
今度は北海道に急に飛んでしまいますが、北海道でも擦文時代の集落というものが開始されます。その時期の前に北海道が日本書紀に登場してきます。阿倍比羅夫が、恐らくは新潟のあたりを出発して日本海を北上して、秋田や津軽を通して北海道にやってきました。658年から660年、7世紀の半ばということになります。このころはまだ住居が北海道に作られていない時期になりますので、続縄文時代の終わりごろと考えられます。そのあとに擦文時代というものが始まるわけですが、主に石狩低地帯を中心に、今の札幌、千歳、恵庭あたりでしょうか、そのあたりを中心に竪穴住居による集落が開始されます。オホーツク海沿岸についてはまた別の動きがありますが、それについてはあとで熊本先生からお話があります。

竪穴住居による集落が始まるわけですが、その影響というのは恐らく八戸からやってきたのではないかと考えています。現在フェリーが八戸ー苫小牧間に通っていますね。そのルートを通して、恐らくは渡島半島のどこかを經由しながらだと思えますけども、八戸からの影響が苫小牧に上陸して、そして札幌方面に入っていくということがあったものと思われれます。末期古墳という墓も同じように作られていくわけです。最初の頃の集落ですが、千歳市の丸子山遺跡というのがありません。ここは独立丘陵だったようですね、独立した丘陵の上の平坦部に、この四角く囲っているのが竪穴住居、全部で6軒確認されています。

住居跡の壁際にかまどがあったろうと思われる位置が焼けています。そして外に煙を出す煙道がこの場合にはない、ということで八戸との関連性を考えているわけです。そのほかに床の中央に付近に炉を設けて、かまどとは別に煮炊きか、あるいは暖炉か、明かりを取るものなのでしょうか、そういう炉を設けています。るまた別のタイプのものではかまどの跡はほとんどなくなっていますけども床が少し焼けたところがあります。さらに煙道もある別のタイプのものも出てきています。これが石狩低地帯の最初の頃の住居、集落と考えられます。だいたい7世紀の終わりぐらい、奈良時代が始まる少し前の時期になりますね。

さて、今度は一挙に古代集落の終焉まで飛んでしまします。まず東北部で竪穴住居が終わるのはいつか、地域によって時間差があります。岩手県の北上盆地や秋田平野のあたりですと、10世紀の中頃、平安時代もだいぶ進んだ頃に竪穴住居から平地式の建物に変化します。それとともに今までかまどを造ってそこで煮炊きをしていた形から囲炉裏に変わってきます。かまどではその上に土器の甕を載せてそれで煮炊きをしていたのですが、今度は囲炉裏になりますので、土器をそのまんなかに置くということも大変になり、土器が使われなくなります。上から鍋を吊るす鍋が使われるようになったと考えられます。

私たちが見慣れている鉄鍋は丸い弦が付いていますが、古い段階では弦がなくて鍋の内側に耳のような把手がついています。それを縄で上から吊っていたのだと思います。残念ながら鉄鍋の出土例というのは少ない。リサイクルされたのかも知れません。いずれにしても少ないのですけども、土器の甕がなくなっていま



八木講師 スライド 13 竪穴住居から平地式住居へ

すから、それに代わるものというのはやはり鉄鍋を考えざるを得ません。また東北地方でも北のほうの青森県ですとか秋田県の米代川流域では 11 世紀代まで竪穴住居が継続しています。平安時代もだいたい進んで古代の終わりあたりに近づいてくる頃まで竪穴住居が造られています。

東北地方には胆沢城であるとか秋田城という、そういう政府側、国家側が造った施設、城柵がありますが、その機能を停止するのがおおそ 10 世紀の半ばぐらいです。集落がなくなる時期、竪穴住居が見えなくなる時期とほぼ同時です。城柵がなくなると、それとともに次第に在地有力者の勢力

が伸びてきます。そういった中で勝ち抜いたのは最終的には前九年合戦を戦った安倍氏、あるいは秋田県側ですと清原氏という人たちがいるわけですが、そういった人たちが台頭してきます。

青森の各地でも、この時期に北海道との北方交易がかなり盛んになっていました。ラッコであるとかオットセイ、アザラシの皮だとか、あるいはヒグマの皮、鷲の羽などを交易するということが非常に盛んになっていました。その本州側の玄関口として青森がありました。その地域の人たちのそういった交易の利益を得てでしょうか、有力者が各地に勢力を持つようになっていく。そしてだんだんと中世社会へ移行していくという、そういう流れがあります。

今度は北海道です。竪穴住居の終焉ですが、これには諸説があって、なかなか定説はないのですが、今確認されているのは、例えば渡島半島の西側、日本海側では擦文土器というのは大体 11 世紀代ぐらいではないかと言われているし、あとこの近くですと釧路市の遺跡から出ました鏡があります。その鏡が 12 世紀というふうに言われています。それからご当地、根室市の穂香遺跡では、竪穴住居からアイヌのチセに似た住居へ移行するということもだんだんわかってきております。その竪穴住居の終焉というのはアイヌ文化への移行期につながっていくという、まあそういうような流れになっているわけです。

具体的にみていきましょう。奥尻町にある青苗貝塚から出てきた擦文土器は、かなり北海道のなかでも地域性の強い土器のようですが、このような擦文土器がこの地域では最後ぐらいと言われています。それから釧路市材木町 5 遺跡の竪穴住居跡から出土した鏡です。青銅でできていますので緑青が吹いていますね。表側は平らになっていて人の顔を映す面になっています。裏には文字が刻まれています。真ん中につまみがあり、そのとなりに四角い区画があります。そこに 2 行にわたって文字が刻まれています。はっきりわかる文字とそうでない文字があるのですが、復元的に描いてみますと「湖州真石家念二叔照子」と読めます。これが 12 世紀というふうに考えられています。

ご当地の穂香遺跡の住居の形の変化を模式的に順番に並べて見てみると、まずかまどがあって炉がある形態、その次にはかまどがなくなって炉だけが残る、3 番目は炉が複数になって、小さい柱の穴がいくつか出てくるようになります。ここまでは竪穴住居、地面を掘り窪めるような形だったのですが、次の例は平取町の二風谷になりますけど、竪穴住居ではなくて平地式で、柱の穴と真ん中の炉が確認されている。概ねこのような形でアイヌのチセなどにつながっていくのだろうというふうに考えられております。

最後のまとめになりますが、竪穴住居による古代集落、これは北海道も東北北部も、集落の開始は古代、あるいは擦文時代の開始となっておりまして、また、集落の終焉というのは中世的な社会、あるいはアイヌ文化へとつながっていくという。ですから古代の集落、擦文時代の集落というのはその時代性を特徴的に表していると評価することができます。

これで終わりにさせていただきたいと思います。ご清聴有難うございました。

西脇 八木先生どうも有難うございました。東北から北海道の南側にかけての地域を広く見渡して、大きな時代の動きについて御説明をいただいたと思います。

続きまして、熊木俊朗先生でございます。熊木先生は東京都でお生まれになり、東京大学で学ばれたあと常呂町、現在北見市の一部になりましたが常呂町にある東京大学の研究施設で長く研究を続けてこられました。八木先生のお話に対しまして北海道の東北側、それからさらにその北に連なるサハリン、アムール川流域などにも深い造詣を持っていらっしゃると思います。それでは熊木先生どうぞよろしくお願ひいたします。

熊木 只今ご紹介いただきました熊木と申します。私、今ご紹介いただいたように、北見市の常呂実習施設に20年以上おまして、そこで地元の常呂にありますオホーツク文化の集落や、網走市の最寄貝塚の発掘に携わってきました。それから根室では、もうずいぶん前ですけれども、たしか1995年に、北構先生と国立歴史民俗博物館が調査をされていた、弁天島遺跡のオホーツク文化の発掘に参加させていただいたことがあります。そのように、オホーツク文化の遺跡の調査に関わってきた経緯もありまして、本日はオホーツク文化の集落遺跡の特徴についてお話しさせていただきます。

まず最初に、オホーツク文化とは何かということで基本的なところを簡単に押さえてみたいと思います。こちらが本州の歴史と北海道の時代区分ですね、その違いを年表で示したものですけれども、皆さん良く御存じとは思いますが、本州で言う弥生時代以降、北海道と本州は歴史の歩みが異なるようになります。狩猟採集を基盤とした社会がアイヌの時代まで続いていくということで、縄文のあとは続縄文、擦文、アイヌ文化と続くわけですが、この、縄文からアイヌに至る間、文化の内容は大きく異なっていくのですけれども、基本的にこの間、人がまるきり入れ替わるとか、そういうことは基本的にはありませんで、人の系譜としてはつながっていきます。このように言うときちょっと誤解を招くので、あまりこういう言い方をしたくはないのですが、よくこれを北海道在地の系譜というように表現しています。

そういう縄文からアイヌにつながる流れがある一方で、それとは異なる集団が北から来た時期があります。5世紀から9世紀の間、北から来て北海道のオホーツク海岸に住んでいた人たち、これをオホーツク文化と呼んでいるわけですね。人の形質を見ると、アムールの下流域に現在住んでいるロシアの少数民族と顔かたちがよく似ていて、北方の系譜に連なっている。人の形質だけではなく、実際に大陸系の遺物もこの文化に伴ってたくさん入ってきている。こういうその北方域由来の異系統の集団が、オホーツク文化になります。今日お話しするのは、そのオホーツク文化の集落についてです。

地図上でオホーツク文化の分布をみますと、アムールの河口からサハリンの全域、それから北海道では利尻礼文から根室までのオホーツク海岸沿いに遺跡がみられます。大陸の系統という話をしましたが、同じ時代のアムールから松花江にかけての流域をみますと、ここには靺鞨系の文化というのがありまして、ここからいろいろなもの、特に金属器などが導入されてくるわけですね。土器について見ますと、これが靺鞨系文化の土器なんですけど、オホーツク文化の中期ごろの土器は、これの影響を非常に強く受けたものになっています。これは一つのわかりやすい例ですね。

大陸との関係はそういうことになっているんですけれども、先ほど八木先生のほうからお話のありました擦文文化の遺跡ですね。オホーツク文化と同時期の頃の、8世紀とか9世紀ごろの擦文文化の分布というのは、基本的に道央より南の地域に限定されているんですね。要するにオホーツク人が北海道のオホーツク海沿岸に住んでたところには、隣に軒を並べて擦文人が住んでいたわけではなくて、基本的に北海道の北と南というか東と西というか、地域を別にして住み分けていた状況にあったわけです。これが9世紀以降、10世紀ごろになってオホーツク文化が擦文文化に吸収され始めるころになると、擦文文化は北回りで徐々に勢力を拡大していった、道東北部の地域にも擦文文化の集落遺跡が交替するように広がってくる、というのが大まかな流れであります。

これは、北海道教育委員会がまとめられている全道の堅穴群遺跡の分布を示した地図になります。縄文から擦文まですべての堅穴群遺跡が入っているわけですが、基本的に堅穴群遺跡の主体となるのは擦文

竪穴群遺跡の分布

擦文： 道東の海岸部、大河川の河口部・川筋に多い



熊木講師 スライド4 遺跡の分布の比較

文化の住居跡になっています。分布を見ますと道東の海岸部、その中でも大きな川の河口部や川筋に多いという特徴があります。道東部にある擦文文化の遺跡は、先ほど言ったようにオホーツク文化が終わった後に広がってくるわけですが、その分布を見ると大きな川の川筋と海岸部に多いという特徴があります。加えて、釧路川とか中標津ですね、こういったところでは川筋に沿って内陸まで集落があるのが分かります。

これに対してオホーツク文化の集落というのはどういう分布になっているのでしょうか。先ほど述べたように、基本的には北海道ではオホーツク

海の海岸沿いにもみ分布しています。それから、擦文文化の集落は河口部の平坦地や砂丘、川筋に沿ったところの台地の上などに多いんですけども、オホーツク文化の集落は河口部の砂丘などに加えて、非常に狭いところとか切り立った崖際といった、周辺から隔絶したようなところにもある、そういう特徴があるんですね。特に擦文文化の遺跡が極めて少ない利尻・礼文、ここあたりは非常にオホーツク文化の遺跡の密度が高いですし、擦文文化の集落が基本的には存在していない知床半島部にも、これオホーツク文化の遺跡の集落がたくさんある、そのような特徴があります。

こうした利尻・礼文や知床半島部以外の、のちに擦文文化が広がってくるような場所でもオホーツク文化の遺跡あるんですけど、のちの擦文文化の遺跡と比べると、遺跡の数や密度、そして竪穴の数も全体として少ないと言えます。ただし、個々の集落の規模を見ると決して小さくはない、ということをお話していきます。その前にですね、代表的なオホーツク文化の遺跡の例をいくつか見ていきたいと思います、ここでは海岸部の平坦地の少ないようなところにある遺跡の例を2つほど紹介してみます。

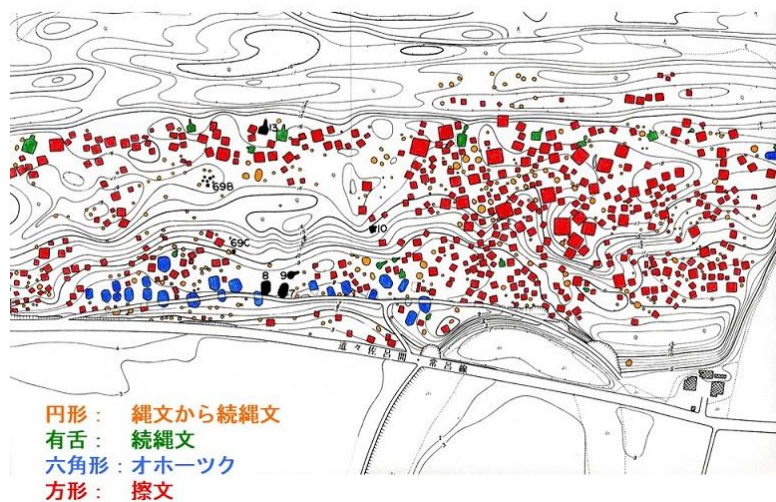
これは利尻島にある利尻富士町役場遺跡というところで、ここがフェリーがつく錨泊港ですね、その錨泊港の上のこの小さな岬の付け根あたりに遺跡があります。この時は海岸に近い地点を掘ってたんですが、集落はもう少し奥側にあり、後の調査で発掘されました。この小さな岬がペシ岬で、ランドマークとなるようなこの岬の付け根部分の、見通しはいいところですけども平坦地は余りないような、狭くて切り立った崖に近いところに集落が作られる。このようなあり方が一つの例となります。

それから、最近、国の史跡になった斜里のウトロのチャシコツ岬上遺跡と言う遺跡があります。地図を見ると、ここがウトロの市街地でありましてここにもウトロ遺跡というオホーツク文化の集落があるんですけども、網走側から来るとその手前になります。現在はトンネルがある所の海岸側に、ウトロの道路を走っているとすぐわかる、亀が寝てるような岬があると思うんですが、その亀の甲羅の上にあたる部分が、オホーツク文化の大集落になっています。31軒もの竪穴が窪みで残されている、道内のオホーツク文化では二番目に大きい集落なんですけれども、こういう、周囲から隔絶した断崖となっている、この岬の上に非常に密集した形で竪穴があるわけです。このようなあり方も擦文文化にはない、オホーツク文化に極めて特徴的なあり方だと言えます。

次に、オホーツク文化のあとに擦文文化の集落も作られるような、そういう立地の遺跡の例も紹介していきます。これは北見市の常呂川の河口部にあるオホーツク文化の集落の位置を示したものですが、常呂川の右岸の低地上と段丘上に2つ遺跡があります。常呂川河口遺跡とトコロチャシ跡遺跡です。それからこちらがサロマ湖で、サロマ湖と常呂川間の海岸部の砂丘地帯に栄浦第二遺跡という遺跡があって、ここは道内のオホーツク文化では一番大きな竪穴群遺跡なんですけども、こういった立地の例があります。特に栄浦第

二遺跡はオホーツク文化のあとに擦文文化の集落が広がってくる場所なんですけれども、具体的に堅穴群の様子、ある地点を拡大してみますとこんな状況になっています。ここでは、発掘調査したのはごくわずかしかなくて、ほとんどは窪みで残ってるものなんですけれども、形である程度時代が分かるんですね。青い部分がオホーツク文化の堅穴群ですね。狭い地点にまとまった形で分布しています。四角い形をしているのが擦文文化の堅穴で、これが一番数が多く、全体の半分以上が擦文文化になります。それから出入口が付いていて、その出入口が北を向いている堅穴が、続縄文文化のものになります。

堅穴群の中のオホーツク文化 (栄浦第二遺跡)



熊木講師 スライド8 栄浦第二遺跡

こんなような形で、一つの遺跡内に異なる時代の堅穴があるんですけれども、常呂川河口域全体の堅穴群の堅穴の数を見てもみると、続縄文の前半期では 11 遺跡あって 265 軒の堅穴があるということが分かっています。オホーツク文化は 4 つの遺跡で 74 軒ですね。擦文文化では 32 の遺跡があって 1921 軒という非常に多くの数の堅穴があるんですが、これだけ見るとオホーツク文化と擦文文化の集落の規模はだいぶ異なっていて、オホーツク文化の数が非常に少ないような印象を持たれると思います。実際の規模が、オホーツク文化と擦文文化とでどのくらい違うのか、というところなんですけれども、非常に単純化した計算で見ますと、まずですね、オホーツク文化は常呂地域では存続期間が 200 年くらい、擦文文化は 300 年ぐらいで、オホーツク文化の存続期間は擦文文化の 3 分の 2 くらいなんです。それからオホーツク文化の堅穴は、一か所で 1 回か 2 回建替えが行われることが多いので、建替えが行われない擦文文化と比べると、実質的な住居の数は大体 2 倍くらいと考えていいかと思います。それから、オホーツク文化では大型の堅穴が多いので床面積は平均すると擦文の 3 倍くらいになります。これらの点を計算に入れると、常呂川下流域のオホーツク文化の堅穴 74 軒は、擦文文化で言えばおおよそ 666 軒分ぐらいに相当する規模になることがわかります。この計算は様々な点で問題はあるのですが、オホーツク文化の堅穴数は地域全体でみると少ないですが、個々の集落の規模は擦文文化と比べてそれほど小さいとは言えないのではないかと考えています。

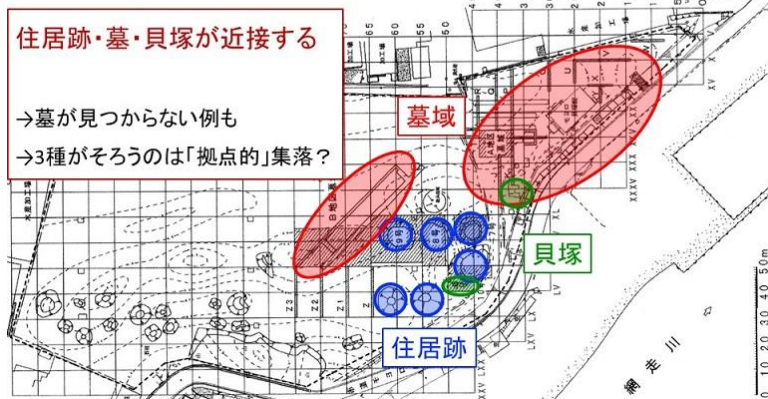
次に、オホーツク文化の集落の内容について、代表的な網走市の最寄貝塚の例で見ていきたいと思います。この写真は網走川の対岸から最寄貝塚を見たところです。これは昭和 22 年、23 年に発掘をしている時の様子ですね。最寄貝塚全体の図を見ますと、西側は続縄文の集落があるところで、オホーツク文化の集落はその東にあり、現在見られるだけでも 6 軒の窪みがあったことが確認できます。

それから墓ですね、墓がだいたいこの堅穴群の奥の区域と、砂丘の先端の方の区域にあったと考えられています。実際に奥の区域では発掘で墓が確認されていますし、砂丘の先端部ではかつての発掘でここに墓があったとされているんですが、全体では 300 基以上の墓があったと考えられています。それから貝塚ですね。最寄貝塚の名前にもなっている貝塚が、分かっているだけでこの 7 号堅穴の南東側と、10 号堅穴の西隣あたりですね。この 2 か所があって、記録が正確に残っていないのでわからないんですけれども、これらの地点の周辺などにも貝塚が広がっていたらと考えられています。

このように、堅穴住居と墓と貝塚が非常にまとまって近接しているというのが、代表的なオホーツク文化の集落のあり方になります。ただし、すべての遺跡でこの 3 つの要素が全部揃っているわけではなくて、墓が見つからないような遺跡もありますし、逆にこうした 3 つの要素がすべてある程度の規模を持ちながら併存しているような遺跡は、あとで見ると抱点的な性格を持つ集落ではないかと考えています。

それぞれの遺構を写真で見ていきましょう。これは最寄貝塚の 9 号堅穴ですね。六角形をした大型の堅穴

オホーツク文化集落の構成（網走市モヨロ貝塚）



熊木講師 スライド 10 代表的なオホーツク文化の集落（最寄貝塚）

11m で、五角形の非常に大型の竪穴になります。中の構造を見ると、凹の字のような形状で粘土の貼床が張られています。この貼床の上からは遺物がほとんど出ないので、ここは土間のような形で使われてたと考えています。中央には石囲いの炉があります。そして住居の奥側ですね、クマの頭の骨などを積み上げた骨塚がありまして、この例では反対側にもクマの手足を集めた小さい骨塚があったんですけども、奥の部分に祭壇のような骨塚を作るというのも特徴ですね。こうした構造を持つのがオホーツク文化の住居の典型的なあり方になります。

中にどのように人が暮らしていたかが分かるような形で遺物が出土した例があります。これは常呂川河口遺跡の 15 号竪穴ですが、ここでは 40 個余りの土器が、大中小のセットとなって、6 か所に分かれるような形で出土しています。ここから、こうした大型の竪穴では 1 軒に 6 つの集団ですね、まあ家族という言い方で表現していいかと思うんですけども、そういう 6 つの集団が、1 軒の竪穴で暮らしていたのではないかと解釈されています。このように、複数の家族が 1 軒の竪穴で共同生活をしている理由なんですけど、一つの仮説としては、鯨鯨ですね、1 艘の船に 6 人から 7 人の漕ぎ手と鋳打ちが乗るような、そういう鯨鯨など協業を伴う生業が背景にあったという仮説があります。すなわち、海での生業の形態と住居の居住のあり方が密接に結びついていることになるんですね。いずれにしても、大型の竪穴に複数の家族が住んでいるというのが、オホーツク文化の竪穴の特徴になります。

それから竪穴住居に関して注目しているのが、住居を建て替えるという行動ですね。この、トコロチャシ跡遺跡の 7 号竪穴の例では、最初に大型の住居を作りまして、その住居を焼いて廃絶してですね、その内側に壁を入れ子状に縮小して住居を建て直すという建替えが見られます。図で示すと、まず外側の住居を作って貼床と骨塚も作って、これを一度焼いてですね、骨塚を避けるように内側に入れ子状にまた壁を作り直して、貼床もわざわざ切りなおして、炉も違う位置にちょっと作り直して、また骨塚を作り直します。最後は、内側の住居も焼いて廃絶する。

こうした建替えは、オホーツク文化の住居では比較的多く見られるんですが、色々調べてみるとこうした建替えを繰り返して一か所に住み続けるというような形態は、のちほど述べる拠点的な集落に多く見られる特徴だということが言えるのではないかと、私は考えているところです。具体的には、礼文の香深井 1 遺跡や枝幸の目梨泊遺跡、それからトコロチャシ跡や先ほどの最寄貝塚、弁天島といった遺跡で多く見られることでありまして、これは一か所に長く住むという、拠点的な集落の性格を示す特徴の一つではないかというように考えているところです。

拠点的な集落という話が出ましたが、オホーツク文化には多くの集落があるのですが、集落はすべてが同じような内容を示すのではなくて、拠点といえるような性格の遺跡があるのではないかと、というお話をしてみたいと思います。この問題で最初に注目されたのは、大陸系の遺物が、ある特定の遺跡に集中して

であるというのがオホーツク文化の特徴です。それから墓ですね。竪穴と非常に密接した位置に、墓が密集して分布するという特徴があります。墓制では、屈葬で頭の上に土器を被せる甕被りというのが典型的なあり方ですね。そして貝塚の様子ですけども、これは 10 号竪穴のへりから外にかけての部分で調査された貝塚になります。こういう 3 つの要素が一つの集落の中で密接して併存するというのが、代表的なあり方になります。

次に、竪穴住居の特徴を見ていきます。これはトコロチャシ跡遺跡の 8 号竪穴になります。長軸の長さは約

いることです。これは枝幸町にいらっしゃる高島さんの研究に基づいた資料ですが、大陸系の金属器ですね、これはオホーツク文化の遺跡から満遍なく出土するのではなくて、目梨泊遺跡と最寄貝塚を中心とした地域にのみ集中していると、そういう傾向があるということがまず最初に指摘されました。これについて高島さんは、この2つの集落は交易の拠点となるような性格であっただろうと解釈されています。このように、大陸系の金属器の分布をみると、このように特定の集落に集中する傾向があるわけです。

建替えや金属器の分布以外にも、特定の集落に集中するものがあること

に最近気づきました。それは骨塚の規模です。これトコロチャシ跡遺跡の7a号堅穴の骨塚なんですけど、これが上からみた写真で、これは横からみた写真なんですけども、クマの顎の骨が非常にたくさんあるのが分かります。これすべての骨を回収して、クマの頭の骨がいくつあるか数えてみたんですけども、ここでは110個体分のクマの骨が一つの骨塚から出ています。

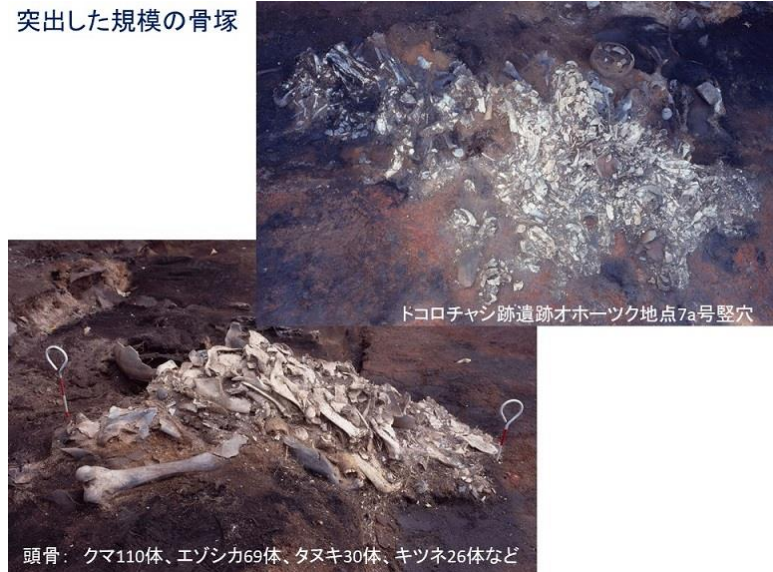
これは、これまで出土した中で突出して多い数でありまして、ふつうは20個体以下ぐらいがよくある数なので、110個体という非常に大きな数が注目されました。ただし、今まであまり指摘されてこなかったのですが、実は最寄貝塚の10号堅穴の骨塚も実はこれぐらいの規模であったと私は考えています。これがその10号堅穴の写真なんですけど、この骨塚では、大体同じような感じでクマの頭の骨が出ていまして、拡大してみると沢山のクマの頭の骨があるんですね。写真をざっと見ただけで20個体以上ありますんで、おそらくトコロチャシ跡の例かそれ以上、100個体以上の規模だったんじゃないかと考えています。こうした、他の遺跡から見ると突出した大きさの骨塚を持つ遺跡、トコロチャシ跡遺跡とこの最寄貝塚のほかにも、予稿集にあげた常呂川河口遺跡や目梨泊遺跡の例がありますが、そういう大きな骨塚を持つ遺跡というのがやはり、大陸系遺物のあり方とも重なるかたちで、目梨泊遺跡や最寄貝塚などに集中する傾向にあることが言えると思います。

オホーツク文化について、今日お話したことをまとめてみますと、まずは集落遺跡の立地ですね。海の近くにあっても平坦地の少ないような、眺望やランドマークとなるような地形を重視した立地にある、というのが特徴の一つになります。それから個々の集落を見ると、墓と堅穴住居と貝塚が要素としてあるという紹介をしたんですが、それが狭い面積の中に集約してある。それから遺跡の数とか堅穴の数については、擦文文化と比較するとそれほど多くない印象があり、絶対数ではもちろん多くないんですけども、個々の集落の規模という観点で見ると、堅穴の1軒1軒が大きいこともあって決して個々の集落の規模は小さくなかったのではないかと考えています。

それからもう一つ注目できるのは、すべての集落が同じような内容や性格だったのではなくて、拠点的な性格の集落が存在していたのではないかと、という点です。それを示すものとしては、堅穴や墓の数と言った規模の違いや、あるいは大陸系の威信財などを集中して持っていること、さらに突出した大きさの骨塚の存在があるのですが、これらの特徴がすべて特定の遺跡に全て集中しているような傾向があるんですね。

これまで言われてきたオホーツク文化の特徴としては、海への高度な適応などがあるのですが、それに加えて、一つの場所に集約して住むとか、遺跡間を見ると格差があるとか、拠点的な性格を持つ集落があるのではないかと、というようなことがオホーツク文化の集落の特徴を考える際に重要な視点になってくるのではないかと考えているところであります。

突出した規模の骨塚



熊木講師 スライド 17 トコロチャシ跡遺跡7a号堅穴の骨塚

このような「集落間の格差」という点を擦文文化と比較すると、擦文文化の集落では規模の大きさにはもちろん差がありますけれども、出てくる遺物に格差を認めるのはなかなか難しいところがありまして、その点からすると、こういう集約とか格差とか拠点というのはやはり、オホーツク文化の集落を読み解くうえでのキーワードとなっていくのではないかと、擦文文化とはそういうところでは違いがあるのではないかと、ということを考えているところであります。そんなところで今日のお話を終らせていただきます。有難うございました。

西脇 熊木先生有難うございました。これで道内の集落遺跡の大きな2つの類型ですね、擦文文化とオホーツク文化の集落の特徴を御紹介いただいたような状況になります。

続きまして小野哲也先生です。小野先生は東京都でお生まれになり、北海道大学を出られたあと、厚真町などで発掘をされたのち、標津町の教育委員会に奉職をされております。それでは小野先生からこの地域の地域の集落の状況についてお話をいただきたいと思いますが、スライドの準備よろしいでしょうか。それではよろしくお願ひいたします。

小野 皆さんこんにちは。標津町教育委員会の小野です。根室市の皆さんには特に教育委員会や根室トコロジストの会の皆さんに御協力いただきながら、日本遺産の取組の中でお力添えいただいているところです。今日私の方では根室海峡沿岸地域の古代集落と史跡標津遺跡群、というタイトルで準備してきたのですが、日本遺産がらみの話をするかと思って期待された方には非常に申し訳ないですが、今日は私の業務上の課題を話題にしていますので、聞いていて非常につまらないと思うかもしれません。

最初にこちらのスライドを見ていただきたいのですが、これは根室海峡沿岸地域の古代集落遺跡の分布を示したものです。その分布の中でも堅穴の窪みの数に応じて円の大きさを変えて表示したものになります。この図を見ますと、ちょうど風蓮湖から野付半島のエリアと、忠類川から北の知床半島エリアは、円の大きさ、堅穴の数でいうとAやBとした100基未満の堅穴が分布する傾向があります。次に、納沙布岬から風蓮湖エリアと、野付半島から標津川までのエリアはC、Dという200基未満あるいは400基未満といった規模の堅穴が基本的に分布する傾向があります。これは恐らく堅穴が分布する河口周辺の地形条件の違いであったり、あるいは利用可能な資源の違いなどを反映しているのだらうと考えています。特に羅臼町域は平地が少ないエリアですので、窪みで残る堅穴の規模としては大きくならないと考えているところです。

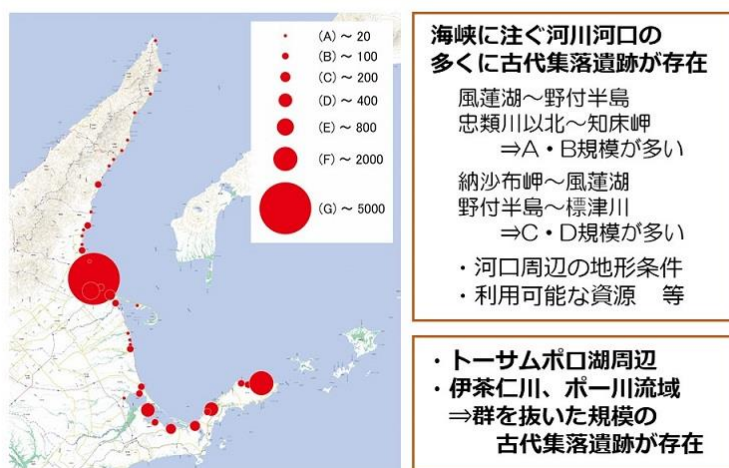
こうした全体の傾向の中で、根室市のトーサンプロ湖周辺と、標津町のポー川・伊茶仁川流域、ここは非常に大規模な堅穴群が形成されています。トーサンプロ湖周辺で大体1,700基、標津町のポー川、伊茶仁川流域では4,000基を超える堅穴群が形成されており、群を抜いた規模の古代集落遺跡が確認されているとい

えます。特にこの標津遺跡群については2番目のトーサンプロ湖のさらに倍の数があるということなので、非常に特徴的な堅穴の分布傾向を示しています。ここからはこの標津遺跡群の話題に入っていきたいと思います。

このスライドは、北を左に向けた状態で、地図の右側に標津市街地が、左側が羅臼方面となります。現在の標津の市街地から4kmほど、羅臼方面に走ったところにポー川と伊茶仁川という川が流れており、この河川流域に堅穴群が分布しています。

この標津遺跡群ですが、広域遺跡

1. 根室海峡沿岸地域の古代集落遺跡



小野講師 スライド2 集落遺跡の位置と規模

保存対策調査研究という事業が昭和52年に行われ、その時の方針に従って現在も保存活用の取り組みが進められています。最初の発見は昭和49年から50年に、標津町教育委員会が東京教育大学に依頼して分布調査を行い、カリカリウス遺跡の存在が確認されました。当時標津川沿いでは大規模草地整備事業が展開していき、そうした開発行為に対し伊茶仁川流域の遺跡群や自然をどうやって保存していくのかという検討が、昭和51年にまず標津町主催で行われます。その次の年、昭和52年に文化庁主催による第1回の広域遺跡保存対策調査研究

という事業が行われ、こときに標津町の標津遺跡群をモデルケースとして開催されました。この時に示された方針が、遺跡群の全てが保存されるべきこと、ということと、遺跡を取り巻く周辺の環境保全に配慮すべきと、この大きな2項目がこの方針の中で示されて、現在まで保存活用の取り組みが進められてきました。

こちらはその標津遺跡群の中核であるカリカリウス遺跡の史跡指定の経過です。それと隣接地の天然記念物標津湿原の、史跡指定、天然記念物指定の経過です。年次的に指定の範囲を広げてきて、現在この大きな赤枠のエリアが指定されて保存が図られています。こういった史跡天然記念物指定による保存と並行して遊歩道の整備や堅穴住居の復元などを行って、公開活用の整備が行われ、今現在ポー川史跡自然公園として公開されています。

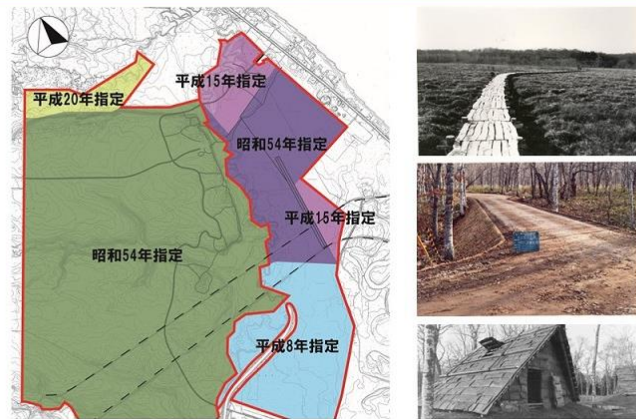
このように保存活用の取り組みが進められてきましたが、今年4月に改正文化財保護法が施行され、その中で史跡名勝天然記念物の保存活用に関する計画を作しましょう、という条文が加えられました。この史跡名勝天然記念物の保存活用計画に盛り込む項目の中に、史跡の本質的価値を明記する部分があります。標津町で保存活用計画を策定するにあたり、この本質的価値をどう整理するかが、今課題と考えているところです。

文化庁調査官からの指導では、本質的価値は史跡指定あるいは天然記念物指定時の説明によく現われるとのことなので、まずそこをしっかりと整理してください、とのことでした。そこでこれまでの一連の標津遺跡群史跡指定の理由を見ていくと、標津遺跡群の中で一番最初に指定が行われた古道遺跡指定時の説明では、擦文土器の時代を中心とした集落跡、という言葉があったり、当時の集落構造を解明するうえで重要であるということであったり、あるいはチャシ跡はこの堅穴群との関連で注目されるものである、というような記載があります。次のカリカリウス遺跡の指定の時では、こちらも擦文時代を中心とする集落跡である、ということと、もう一つ広域的な遺跡の保存を図るものとして指定を行った、と記されています。次の三本木遺跡、これはオホーツク文化の堅穴群ですが、その指定時は、ここで初めて「標津遺跡群」という言葉が出てきて、標津遺跡群はオホーツク海沿岸地方における擦文文化およびオホーツク文化期の集落跡を代表するもの、という記載があります。特にこの三本木遺跡の追加指定に当たっては、この時代の代表的遺跡と考えられる、ということで説明が行われて史跡指定がなされた、という経緯があります。

こういった指定の時の説明文だけ見ると、標津遺跡群の本質的価値は、擦文文化オホーツク文化期の集落跡を代表する遺跡であるということなのか、と捉えられるかもしれませんが。しかしこの説明だと、似たような代表的な遺跡はほかにもたくさんあるので、標津町の町域を超えて標津遺跡群の価値が広がっていくことも想定されます。しかし標津遺跡群という名前がついている以上、遺跡群の範囲は標津町域で収めるべきと思いますが、仮に町域で収めたとしたときは、それは現在の行政区分の中で価値の範囲を止めてしまうことになるので、史跡本来の価値の広がりではないだろうと考えられるわけです。

こちらの図は文化庁の資料から引用したのですが、一般的な史跡指定の流れでは、最初に分布調査など

2. 標津遺跡群について



史跡・天然記念物指定を繰り返しながら遊歩道等の整備を行い、ポー川史跡自然公園として公開活用

小野講師 スライド5 指定と整備の経過

で対象が発見され、発見と同時に分布調査の内容に基づいて各遺跡の調査研究などを行って総合的な検討が行われ、歴史上あるいは鑑賞上、学術上の価値が定められ、こうして守るべき価値や守るべき範囲というのが明確にされて指定されるという流れになっています。この中で特に埋蔵文化財なり地中に埋まっているものについては発掘調査しないと十分な価値が分からないということで、最初に発掘調査もしっかり行われ、総合的な検討が行われて、守るべき価値というのが定められていきます。しかし標津遺跡群の場合、カリカリウス遺跡には堅穴の窪みが2,549基ありますが、指定時に発掘調査された堅穴住居は1軒のみです。

三本木遺跡では堅穴本体には手をつけていなくて、堅穴の窪み周辺に37箇所の試掘を行って史跡指定を行っています。また最初に指定された古道遺跡では、未だ発掘調査は行われていません。ほとんど発掘調査が行われていない状態のまま、今史跡として指定されています。発掘調査を行っていないので、総合的な検討は十分に行われていなくて、さらに歴史上鑑賞上学術上の価値も不明確なまま、守るべき価値が曖昧な状態のまま、守る範囲が決められ、現在の指定に至っているというところがあります。

遺跡群の本質的価値を再整理するにあたっては、現在のいろいろな学術的調査研究成果を加味して、遺跡群としての定義を明確化していくことが必要だろうと考えているところです。

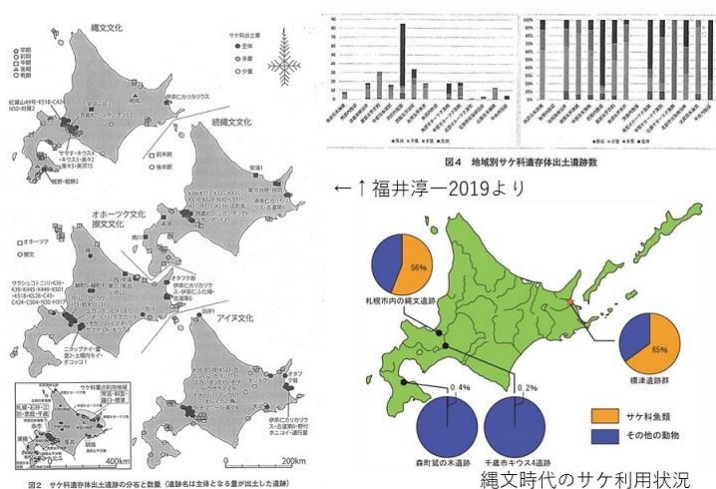
この点を考えるときに非常に参考になるのが、最初の広域遺跡保存対策調査研究の時に示されていた文章です。改めて読み返すと、ここには守るべき価値の本質が記されていると思っているのですが、その文章の一文に、ここが大規模集落ということのほかに、鮭やイトウ、こういったものを豊富に利用する背景の中で作られた遺跡群であり、さらに標津町内の各河川の河口に分布する集落群、こういったものを含めた中での中心的な性格を有する存在であったらうということが記されています。また、縄文、擦文、オホーツク文化といった非常に数多くの遺跡、時代の重複した遺跡であるということ。こうした内容が最初の広域遺跡保存対策調査研究の段階の文章の中に記されています。これは当時文化庁の調査官を務めていた小林達雄先生の文章ですが、この段階ではほとんど発掘調査が行われていない中で、こういった内容が記されているのです。従って今、標津遺跡群の本質的価値をもう一度再定義していく上では、最初の広域遺跡保存の時に示された内容を、これまでに小規模ながらも重ねてきた学術的調査の成果に基づいてきちんと裏付けを取っていく、そういった作業が必要なのかなと考えているところです。

それでは実際に発掘調査でどんな結果が出ているのかということですが、まず一つが、平成以降の調査成果としては、堅穴の窪みが非常に良好に残っているということのほかに、発掘調査の結果明らかになったのは、縄文時代からずっと続く鮭の利用に重点を置いた暮らしということです。これは標津遺跡群の発掘調査で非常に早い段階からフローテーション法という調査方法を採用し、微細遺物の回収にずっと務めてきたことで、炭化種子や動物遺存体など、当時の生業を理解するための基礎資料が収集されたことの成果となります。

見つかった骨の同定を西本先生にお願いして行っていますが、標津遺跡群では各時代にわたり、鮭類が非常に主要な食料として利用されていたということが指摘されています。

もう一つ標津遺跡群のこれまでの発掘調査で分かってきた特徴は、トビニタイ文化の集落が残されている点です。標津遺跡群での発掘調査では、過去50年間に擦文時代の堅穴住居が発掘調査された軒数は52基あります。このうちトビニタイ文化の堅穴住居の軒数は42基で、標津町内の調査事例全体の79%がトビニタイ文化の住居となっています。トビニタイ文化の土器自体は北海道東部に広く分布し

5. 発掘調査成果にみる標津遺跡群の特徴



ますが、ほかの地域で見つかるトビニタイの土器は、基本的には擦文土器を伴う住居から客体的に出土するあり方をしています。しかし標津町と隣の羅臼町では、トビニタイ文化を主体とする住居が見つまっているということで、恐らくこのエリアの非常に特徴的な文化なのだろうと考えているところです。

さらに標津遺跡群の場合は、前代のオホーツク文化からトビニタイ文化への移行期の時期と考えられている資料が出土しているということ。さらにそのトビニタイ文化が終わってアイヌ文化期にあたる14世紀代の遺構も存在しています。標津遺跡群は、アイヌ文化形成の中で果たしたトビニタイ文化の位置づけを考えるうえで重要な情報が得られる遺跡と考えているところです。

最後に標津遺跡群の課題に触れたいと思います。先程、鮭の骨の出土が多いとお伝えしましたが、その場合、ほかの周辺の地域の遺跡と比べてどれだけ多いのかをはっきりさせることが必要と考えており、そのためには「多い」という定性的情報ではなく、数値化された定量的データを示していく必要があるということ。あと今まで標津町の、標津遺跡群の中だけで考えてきましたが、根室海峡沿岸の広域エリアの中でどういった位置づけがなされるのかということもきちんと比較検討しないといけないのかなと考えています。

その比較検討の核になるのは、先ほど触れた標津遺跡群の特徴として考えられる内容で、一つは窪みで残る竪穴住居跡が周辺環境とともに良好な状態で保存されているということ。もう一つが縄文時代の早期からアイヌ文化期まで、連綿と続いた人の暮らしの累積で形成された大規模竪穴住居跡群であると。三つめが長期にわたって鮭の利用に重点を置いた暮らしが続いてきた遺跡であるということ。最後が、トビニタイ文化の集落跡が良好な状況で保存されているということ。こういった特徴を、今後ほかの周辺地域との比較を重ね、標津遺跡群の本質的価値を明確化していく必要があると考えています。

以上私からの報告を終わらせていただきます。

西脇 小野先生どうも有難うございました。本日のフォーラムのテーマである文化財の価値を論じるという仕事にまさに今取り組んでいらっしゃる様子を御報告いただいたところです。

続きまして高瀬克範先生にお話しいただきます。高瀬先生は札幌のお生まれで、明治大学、東京都立大学ほかで教鞭をとられたあとまた北大に戻って研究を続けておられます。研究の範囲は東日本から北日本、さらには千島列島カムチャツカ、といった広い地域の概ね弥生時代、続縄文からあとの文化の問題を中心に研究を続けておられます。海外の研究者とも連携しながら非常に広い視野で研究を進められ、一昨年ですかね、占守島の発掘にも参加をされました。北構先生が発掘されてから80年ということで、それ以来の日本人の発掘ということになるのかなと思ったりもしております。それでは高瀬先生どうぞよろしくお願いします。

高瀬 ご紹介にあずかりました高瀬と申します。よろしくお願いいたします。北千島とカムチャツカの竪穴群について、お話をさせていただきます。これらの地域からみた北海道の竪穴群の特徴を浮き彫りにするのが狙いです。特に、この地域で明確にわかっている竪穴として、千島アイヌの人々が残した竪穴遺跡に着目したいと思います。

千島列島北半部の先住民として知られる千島アイヌは、アイヌ語の千島方言を使用していた民族です。千島アイヌ自身は、北海道方言を話す北海道アイヌや、樺太方言を話す樺太アイヌとは異なる民族としてのアイデンティティを持っていたようです。ただし、言語は明らかにアイヌ語に分類され、ロシア人やカムチ

5. 発掘調査成果にみる標津遺跡群の特徴

トビニタイ文化



標津遺跡群はアイヌ文化形成史の中でのトビニタイ文化の位置づけを考える上で有意な情報を得られる可能性が高い遺跡。

小野講師 スライド 18 標津遺跡群の特徴2

ャツカ先住民からの文化的影響を受けているとはいえ、物質文化も考古学的アイヌ文化の一類型として理解するのが妥当です。千島アイヌの居住域は千島列島最北端の占守島が北限であり、カムチャツカ半島には住んでいないというのが通常の理解です。カムチャツカ半島にはイテリメンやカムチャダールと呼ばれるべつの先住民が住んでいる、という 19 世紀の理解が民族分布のスタンダードな整理の仕方だと思います。しかしながら、千島アイヌの人々はかつてカムチャツカ半島南部のかなり広い範囲にも住んでいたということが、考古学的な研究などによって分かってきております。今日は、その成果を踏まえたお話をさせていただきます。

千島アイヌの歴史をごくごく簡単にたどってみます。文献に現れるのは日本よりもロシアが古く、17 世紀末にカムチャツカを征服したとされるロシア人のウラジーミル・アトラソフというコサックに関わる史料に初めて出てきます。1697 年のことです。それ以後もロシアの記録にしばしば「クリル」の名で登場し、18 世紀半ばのベーリングの探検記録などにも情報があります。日本では 19 世紀以降の史料で情報が増えてきますが、それより前の記録は断片的です。1875 年、樺太千島交換条約によって千島列島の全域が日本領になります。それまでロシア領に住んでいた千島アイヌは、日本国籍を選ぶのかロシア国籍を選ぶのか、ロシア国籍を選ぶのであればカムチャツカ半島などに移住する、といった選択を迫られることになりました。

日本国民となった千島アイヌに対しては、開拓使や政府が戦艦を使って北千島へ食料を運んだりもしていましたが、これには千島アイヌが勝手に国境を超えてカムチャツカで交易するなどしないようにするための監視の意味もありました。しかし、こうした方式で千島アイヌをコントロールするにはコストが掛かりすぎるため、1884 年に色丹島に強制移住させました。全部で 97 名の方々が色丹島に強制移住させられましたが、わずか半年で 77 名となってしまいました。占守島などにいたときは、医者などいないのに、みんな元気で暮らしていた。しかし、色丹島に来てから、異常な速度で多くの人が死に始めたことを嘆く記録が残っています。人から言語や文化を無理やり取り上げるとはどういうことなのか、この場合は、アイヌ語ではなく日本語を強要したり、狩猟採集生活ではなくて農業を強要したりするとどのような惨劇を招くのか、を雄弁に物語っています。

こうした事情から、1901 年から 1909 年のあいだ、夏期に北千島で海獣類を獲るための出稼ぎも許可されていましたが、結局これもすぐ途絶えてしまいます。そして終戦後は、色丹島から北海道本島などへの再移住を余儀なくされ、中標津上武佐のハリストス教会に千島アイヌの人々が通われていたことなどが知られています。しかしながら、千島アイヌ語の流暢な話者は 1960 年代までに全員が亡くなっており、文化継承者は 20 世紀中に不在になってしまいました。日本人、日本政府が一つの民族を消滅させてしまったという事実がございます。

カムチャツカ半島南部では、千島アイヌが残した遺跡が多数あります。その分布は、西海岸では比較的狭い範囲に限定されますが、東海岸では相当広い範囲に存在していることが分かってまいりました。おおまかにはカムチャツカ半島の面積は日本とほぼ同じですので、かつて千島アイヌは北千島を含めてかなり広い地域に住んでいたことがわかります。遺跡は、例外的に内陸にもありますが、多くは海岸沿いにあります。半島の東南部には小規模な川がたくさんあるのですが、そのすべての川の河口部に千島アイヌの遺跡があり、竪穴住居が残されています。

千島アイヌの遺跡を認定するとき、一番の指標になるのがアイヌが作った内耳土器（ないじどき）です。この土器は本州で生産された内耳鉄鍋の模倣品で、鉄鍋の不足分を補うためにアイヌによって盛んに作られました。土器のほかにも、千島アイヌに特徴的な竪穴住居や、銚先・鉤針といった狩猟・漁労具の分布から千島アイヌの居住域をとらえることができます。ただし、通常はこうした物質文化が出てくるだけではアイヌの遺跡とは確実には言えません。なぜなら、カムチャツカ半島にもともと住んでいた別の先住民がアイヌの物質文化を受容して使っていた、などという可能性もあるからです。年代測定によって、アイヌの遺跡が出てくるのは 15 世紀の半ばであることが分かっているのですが、南カムチャツカの沿岸部にはその直前段階、例えば 13 世紀や 14 世紀の遺跡はまったくないのです。無人だったところに誰かがやってきて、15 世紀半ばから突如として内耳土器、キテなどが出土する遺跡を残しはじめたと考えるほかありません。しかし、北からやってきたコリャークやイテリメンの祖先たちが、これだけ明確なアイヌ的な物質文化を残すことは

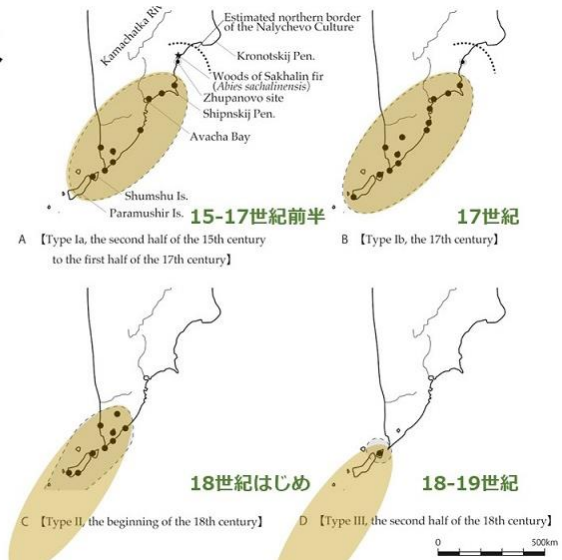
まずありません。15 世紀半ばに南カムチャツカに登場した集団は、明らかに千島列島を経由して南からやって来たアイヌ語を話していた千島アイヌの祖先です。千島アイヌは、15 世紀半ばに南カムチャツカと北千島で成立したのです。

内耳土器の年代と分布の研究から、千島アイヌの居住地の変遷が分かっています。一番古い段階である 15 世紀半ばから 17 世紀の終わりぐらいまでは、千島アイヌは南カムチャツカのかなり広い範囲に暮らしていました。北千島にもこの時期の遺跡はありますが、遺跡の数や遺物の量から考えて、その本拠地はむしろカムチャツカ半島であったと考えられます。しかし、18 世紀の初頭にカムチャツカ半島における居住域が一挙に縮小しまして、恐らくこの時期から北千島や中千島を積極的に利用するようになったのだと思います。そして、民族誌の情報にあるように、19 世紀になると千島アイヌはカムチャツカ半島には基本的に住んでおらず、千島列島の北半部のなかだけで数ヶ月から 2 年おきに島を移動していくようなきわめて定住度の低い生活スタイルを確立していったものと考えられます。

千島アイヌは、1884 年の強制移住直前まで、堅穴住居に住んでいました。考古学的な研究から、堅穴住居の変遷も分かっています。一番古い 15 世紀から 17 世紀の段階では、平面形はやや丸みを帯びた隅丸方形から、より明確な隅丸方形あるいは長方形へと変わり、出入口がつく形状になっていきます。18 世紀以後、出入口が長くなったり大きくなったりして、中には出入口に貯蔵スペースとしての小部屋がつくものもできます。そしてこの小部屋が大きくなり、最終的に 19 世紀に残されているような、複数のメインルームが通路で結ばれている複室型の堅穴住居になったと想定されます。

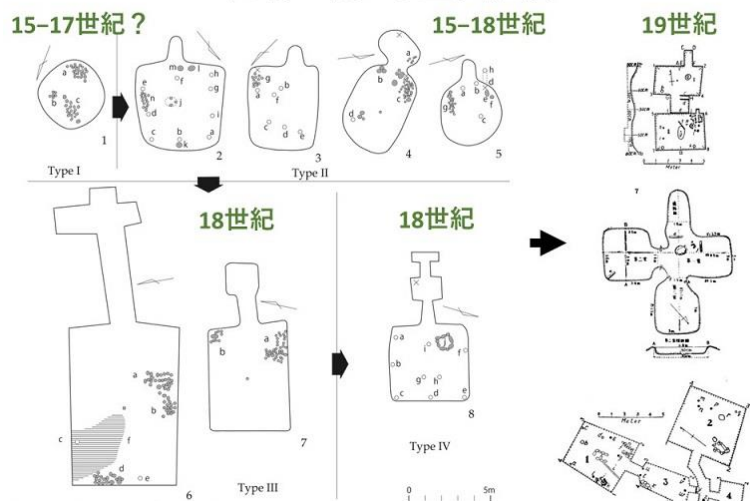
具体的な事例をいくつかご覧いただきます。最初は、カムチャツカ半島南東部のナリィチェヴォ遺跡群です。ペトロパヴロフスクから 60km くらい北東に行ったところにあります。湖のまわりに 18 箇所の遺跡が見つかっており、遺跡群全体では 148 基の堅穴住居が地表面で確認されています。私たちはナリィチェヴォ 9 遺跡で、4 号住居と 2 号住居の発掘調査を行いました。こちらの写真は 2 号住居を掘っているところです。平面図では、水色の部分が堅穴住居の内部に相当します。堅穴住居の外側の点線で囲われているところが、堅穴住居を掘ったときに出土した土を周囲に盛り上げた周堤の範囲です。メインルームからみて少し標高が高いほうに出入口がついていて、出入口からメインルームに入ったすぐのところに大きな炉があります。床面の中心部は少し掘り窪められており、段差を持っていることが

千島アイヌの居住地



高瀬講師 スライド 4 千島アイヌの居住地の変化

千島アイヌの堅穴住居



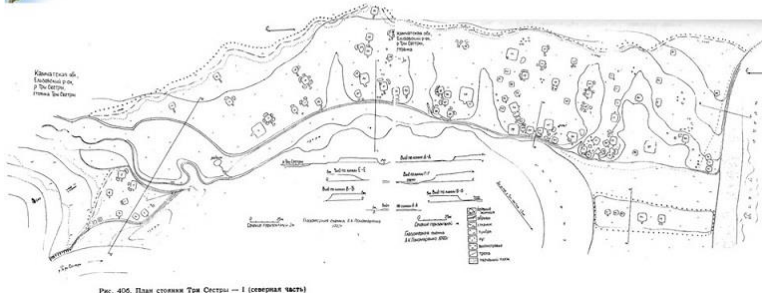
高瀬・鈴木2013, 馬場1939

高瀬講師 スライド 6 北千島における堅穴住居の変遷



トリ・セストリ I 遺跡

97基（1つの遺跡では最大）



高瀬講師 スライド 12 カムチャツカ最大のアイヌ集落遺跡

斜面に作られる竪穴住居は、北海道ではあまりないかも知れません。

つぎは、さらに南側に位置するクリル湖の遺跡群です。クリル湖は、完新世における世界最大級の火山噴火とされている 7600 年前の噴火によってできたカルデラ湖です。周辺は、ヒグマの生息密度が世界で最も高い場所の一つとしても知られています。湖の周囲には 15 箇所の遺跡が見つっております。遺跡の破壊が激しいため明確な竪穴数の把握は難しいのですが、多く見積もって 200 基、実際にはそれよりも少ないだろうと考えられます。この図は竪穴の数が比較的多い遺跡の略測図ですが、ここでも竪穴は 10 数基しかありません。15 遺跡あったとしても、恐らく 200 基は超えないだろうと思われます。

つぎに、さらに南のトリセストリ I 遺跡を紹介します。ここはひとつの遺跡の中にある竪穴住居の数としては最大の遺跡です。分布調査の結果を見ると、97 基の竪穴を認識することができます。一つの遺跡の中ではこれくらいがカムチャツカ半島の中で最大の遺跡であるということになります。

次は北千島です。1884 年の強制移住直前まで千島アイヌが住んでいたのが、占守島別飛（べつとぶ）地区のアレクサンドル丘あるいは別所沼と呼ばれているところです。この写真は現在のアレクサンドル丘ですが、先ほど御覧いただいたような複室の居室が通路でつながった竪穴を確かに見ることができますし、それよりも古いだろうと思われる竪穴も認めることができます。1930 年代に調査した馬場脩氏の調査結果によると、この地区全体でだいたい 260 基の竪穴を地表面から見ることができました。そのあと、この場所は日本軍によって軍事拠点化されたことにより、かなり遺跡が壊されております。終戦後もソビエト軍が演習場として使ったりしていた関係で遺跡破壊が著しいのですが、その前に行われた調査記録によるとだいたい 260 基、というような数字を見ることができます。

もう一つの拠点であった中千島の羅処和島は、私自身は調査しておりません。しかし、10 年ほど前にアメリカのワシントン大学とサハリン郷土博物館が実施した共同調査の結果が参考になります。恐らくラショワ I 遺跡が千島アイヌの拠点だった場所ですが、現在、地表面から確認できる竪穴の数はおよそ 110 基くらいです。ここにはオホーツク文化や続縄文文化の竪穴も含まれていますので、すべてが千島アイヌの竪穴ではありません。やや差し引く必要がありますが、最大でも 110 基ということになります。

ここまでの理解を踏まえて、北海道の竪穴群の特徴を考えてみましょう。一番の特徴は、竪穴の数の多さです。北千島における最大の竪穴数は 260 基、中千島では 110 基でした。カムチャツカ半島でも遺跡群では 148~200 基ほど、一つの遺跡では 97 基が最大です。北海道では、300 から 400 基以上の竪穴群は決して珍しくなく、中には数千基からなる大規模な竪穴群も複数あります。私はカムチャツカ北部やオホーツク海北岸でも調査をしておりますが、こうした地域では遺跡の規模はかなり小さく、一つの遺跡の中にある竪穴住居はだいたい 10 基以内です。こう考えると、北海道の竪穴群がいかに大規模であるかがお分かりになるかと思

明らかになりました。

つぎは、ペトロパヴロフスクよりも南のリストヴェンニツナヤ湾の遺跡群です。3 つの遺跡が認められており、総数で約 50 基の竪穴住居が見つっております。こちらは、斜面部に作られている竪穴住居です。スキー場のようにおおそ 25~30 度ぐらいあるような斜面にも竪穴住居が作られており、周堤もあります。周堤の周りにもさらに溝が掘られており、この溝から供給される土を使って周堤をさらに高くしています。とりわけ、標高の低い方にたくさん土を盛って、周堤の上面の高低差がなるべく小さくなるようにしています。これほどの

います。恐らく北海道に匹敵する堅穴群が存在するのは南千島の一部と南サハリンのみであって、北海道とその周辺だけに存在するのだろーと思います。

そのほかにも、北海道の場合は存続期間が縄文文化期から形成されている遺跡が多いため、時間の長さが特徴の一つになると思いますし、堅穴の形態、面積、付属施設のヴァリエーションが広いということも大きな特徴です。時間になりましたので、これで終わりとさせていただきます。ご静聴、有難うございました。

西脇 高瀬先生どうも有難うございました。広い視野からみた北海道の堅穴住居跡群の特徴、集落の特徴をお話いただいたと思います。さてこれではほぼ百分にわたりお話続いてまいりましたのでお疲れと思います。ここで休憩を取りたいと思います。短いんですけどもこの時計で 3 時 40 分に再開させていただきます。質問用紙をお書きいただいた方は休憩時間の間に受付にお渡しください。よろしくお願いいたします。

第 2 部 討論：古代集落遺跡の価値

西脇 それでは時間になりましたので、第二部、集落遺跡の価値を語るということで先生方にうかがっていきたいと思います。私自身は堅穴を掘ったことがほとんどありませんで、試掘調査で壊したことは何度かありますけどもまあその程度の知識しかございませんので、ほぼ素人の私から、寄せられた参加者の皆さんの質問を折り込みながら先生方に疑問をぶつけていく、といった形で進めたいと思っております。

なお、八木先生は今日中に盛岡までお帰りになるということで、先ほど高瀬先生のお話の最中に退出されました。御退出のときに御紹介できず申し訳ございません。それでは大まかに、擦文集落の問題、オホーツク集落の問題、そしてそれらとアイヌ文化の関係、という 3 点の話題について進めていければと思います。

擦文集落の問題ですけれども、八木先生のお話の中にも出てきましたように、それは当時の日本国の中央でまとめた歴史の中には蝦夷という言葉で出てくる人たちの集落である。これは東北の北部も北海道の集落もそうです。それについて八木先生から、四角い堅穴住居自体、関東地方あるいは東北地方の南部、当時の倭国の領域からもたらされたものだ、というお話があったところです。それでは蝦夷というのは倭国からやってきた人たちなのか、という疑問が当然生じてきて、最近では研究者の中にもいわゆる蝦夷というのは倭国の人たちの子孫である、少なくとも東北地方についてはそうである、と主張される方もあります。さすがに北海道の蝦夷が東北の人たちの子孫だ、という主張はなさらないんですけれども、同じ理屈で言えばそうになってしまいかねない。そのあたり八木先生に伺いたいと思っておりました。

八木先生自身はそこまで極端な、人が入れ替わったとは考えていない。確かに家の形式を受け入れてそれを使って定住をしているんだけど、やはり使っている土器などはそれ以前の伝統が強く残っている。だから地元の北海道、あるいは北東北の人たちが南からの生活様式を受け入れて新たにそういった集落を作るようになったものだ、と考えている、とおっしゃっていました。それにしても東北地方と北海道の集落遺跡には強い類似がある、ということを今日お話いただいたと思います。そこで、北海道の擦文集落と東北地方の集落はどこが違うか、大して変わらないのか、といったあたりについてちょっと先生方の御意見を伺ってみたいと思います。

それで八木先生から、帰るのでということでメモを置いていついていただいておりますので、内容を御紹介いたします。やはり方形の堅穴住居と、そこにかまどがある。そしてそこで使う土器ですね、甕と坏というセット。それから紡錘車、糸を紡ぐ道具ですね。こういうものがあるということは両方の集落、北海道と北東北の集落はよく似ている。ただ相違点がいくつかあるでしょうというメモをいただいております。相違点を 4 つ書いていただいております。

相違点の一、多数の住居。数百基から千数百棟に達するような集落は擦文集落の大きな特徴だろうと。東北北部ですね、これは北海道より農業をしている地帯だと思うんですけれども、多くても 500 から 600 棟程度であるというのがこれまでの発掘の成果だと。

それから相違点の二、居住の期間が北海道の住居は短かったんじゃないか。短かったのもそういう多くの家の跡が残っているのではないか。東北の北部では一つの家のかまどを作り替えて使っている。これは要す

るに長く使って傷んできたのでかまどを作り替える例が少なくない。北海道にはそういうのは見られないので、東北の方が一つの家に住んでいる期間が長かったのではないかと、ということを指摘されております。

それから相違点の三ということで、集落内で大小の規模の異なる住居跡があります。これは北東北も擦文文化の集落も同じであるが、東北北部では大型住居に土器や鉄器、玉、紡錘車といったものが多く出土する傾向があって、そういう大きい家というのは家長を中心とした家族構成の中心になっていた、そういう社会があったのではないかと考えられる一方、擦文集落は大形住居にそういう器物が集まる、集中することがないと思われるので、東北北部とは家族の在り方などが異なっていたのではないかと。

そして最後に特徴の四として、堅穴の窪みが北海道ではよく残っている。これは一つには掘り込みが深くてなかなか埋まらないという物理的な問題があるだろう。これに対して東北北部では住居同士が重なり合う。同じ土地に複数の住居が時間を隔てて作られて、限られた土地利用の空間の中で繰り返し家が作られている、そのために古い家は埋まってしまう、といったことがあったと考えられる。

以上4つの御指摘をいただいたわけですが、熊木先生いかがでしょう。熊木先生が見られる擦文と東北の古代集落の違いというのはやっぱりこういった御指摘に重なってくるのでしょうか。

熊木 私東北のことあまり存じ上げないんですけども、今、八木先生がメモとして残されたことは非常に興味深くて、ほぼそういうことなのかなというふうには考えております。

西脇 熊木先生のお話の中に、道東の擦文の集落というのは新しいのだと、オホーツク文化のあとに形成されるのだと。北海道の西部と比べてますます時間が短い中で非常に多くの堅穴が一つの集落の中に残されているということになるかと思うんですが、やはりそのように考えられるのでしょうか。

熊木 そうですね。道東部の擦文文化の集落、基本的にはオホーツク文化の終焉が9世紀末ですので、ほぼそれ以降のものしか基本的にはないと考えていいと思います。そうみると、やはり遺跡の数自体が、10世紀以降の擦文文化ではたくさん増えますし、個々の集落の規模も、道東北部に展開してくる以前と比べると、かなり様相の異なるものであったと理解しています。

西脇 有難うございます。お配りしたパンフレットの表紙をめくったところに、札幌市に昔あった堅穴群の絵があって、川沿いに点々と切れ目なくあるのはあるんですけども、道東それから道北の海岸部にときに見られる、河口のあたりに何百、あるいはときには標津遺跡群のように何千といった堅穴が並んでいるというのは、開発されてしまったのでわからないんですけども、かつて道央にもあったかというとなんじやないかという気もするところです。

小野先生に伺いたいんですけども標津の遺跡というのはそういう道東の大規模集落の代表的なもの、ということだと思うんですが、掘った限りでは擦文というよりはトビニタイだ、というお話でした。標津町と羅臼町に典型的に見られるトビニタイ文化の集落っていうのは、ほかの道東の擦文集落とはどう違うっていうふうには小野先生は考えていらっしゃいますか。

小野 まずトビニタイの発掘調査の成果を見る限り、住居そのものの構造では擦文の堅穴だとかまどを作る住居構造であるのに対して、トビニタイの場合だと石囲いの囲炉裏を作るだけでかまどというのは基本的にはありません。あと堅穴の平面形もきれいな正方形とか長方形ではなくて若干一辺が張り出すような五角形に近いような住居があります。このように住居の部分ではほかの典型的な擦文文化の堅穴と比べると違いがありますが、集落の特徴としては、基本的には他の擦文の集落と同じように、湧き水の近くであったり、あるいは船着き場の近くの平坦な場所であったり、そういったところに集落を構える傾向にあるようで、擦文文化のネットワークの中に組み込まれているのかな、というイメージはあります。

西脇 有難うございます。熊木先生のお話の中でオホーツクの集落には住居とそう離れない場所に墓とか貝塚もあるんだといったお話ありましたが、トビニタイの場合はそういう伝統というのは残っていると考えられるのでしょうか。これは熊木先生に伺ってもよろしいでしょうか。

熊木 そうですね、貝塚が顕著な形で残っている例っていうのは記憶にないですね。墓は堅穴の窪みを利用してそこに穴を掘って墓を作る例というのがたしか標津町にあったと思います。集落から近いところに墓域が作られる例は知床半島部であったように思います。オタフク岩遺跡などが該当するのでしょうか。ただし、最寄貝塚で見たような集落の近くに数百とか数十という形で墓が集中するような遺跡というのはトビニタイ

では記憶がないですね。このように、オホーツク文化の典型的、代表的な集落のあり方とは少し異なるのかな、と考えています。

小野 今の墓の質問に関してですが、カリカリウス遺跡では住居の外で1基だけ墓が見つっています。それと最近の発掘調査で羅臼町の天方さんが調査した遺跡でもトビニタイの墓が見つっています。それは墓壙の上に複数の大きな礫を置くような形で見つかり、もしかしたらオホーツク文化からの特徴を引いているのかもと思っています。あと貝塚の部分は、標津遺跡群の場合は標津では貝が採れるような地域ではないので貝塚自体確認されていないですが、貝塚の代わりというわけではないですが、羅臼町域ではオタフク岩洞窟遺跡などで動物遺存体が多く見つかるような遺跡があります。

西脇 有難うございます。御発表の中にもあった通り、オホーツク文化のあとに現れてアイヌ文化につながっていくというものですので、オホーツク文化そのものでないことは当然なのかなと思います。今後、小野さんが標津遺跡群の価値を究明されていく中で、そういったトビニタイ文化固有の特徴について明らかにされていくことを期待申し上げていいと思います。

ここで高瀬先生に伺いたいんですけども、千島アイヌの住居跡について御紹介がありました。同じように遅くまで竪穴を持っていたのは樺太アイヌなんだけれども内耳土鍋は樺太アイヌのとは違うので起源がよくわからない、というお話が出たかと思います。今年鳥居龍蔵の千島アイヌの民族誌刊行から100年なんですけども、アイヌが石器をまだ使っていたというのが鳥居が百数十年前に千島アイヌを現地で調査したひとつの成果であるわけで、石器時代の伝統がまだそこに残っていたんですね。そういう意味で擦文よりも古い、たとえばちょっとスライドを…千島アイヌの竪穴住居の形の変遷をお示しになったのがあったと思うんですが、これで上の段の主な竪穴にちょっと張出しがつくようなタイプっていうのが古そうだということでしたが、何か続縄文っぽいところもあるような、そういう擦文以前にまで千島アイヌの民族的な分岐、北海道やサハリンの人たちと別れた時期が遡る可能性は考えられるんでしょうか。

高瀬 ちょっと考えにくいと思いますね。北海道だとどう考えても13・14世紀に一回竪穴住居の伝統は切れていると思います。そのあと15世紀に北千島やカムチャツカに現れた竪穴住居は北海道の中から出てくる余地はほとんどないと思いますので、その時期に竪穴住居を使っていた、しかもアイヌ語を使っていた集団とするとサハリン南部の樺太アイヌが候補の一つになります。樺太アイヌは19世紀まで冬の家として竪穴住居を使っていたという記録があります。このほか、南千島の中でもよく様相が分かっていない択捉島ですとか得撫島のあたりのアイヌ語使用集団が竪穴住居を使っていた可能性もあり、そこからの北への移住が生じた可能性があります。サハリンの可能性はのこされていますが、北海道の中で擦文以前にさかのぼる可能性というのは、ほぼないと思います。

西脇 北海道の中ではないという意味では逆に、南千島などでかなり早くから続縄文に続いて擦文住居の影響を受けない人々が分岐して行って、そこからいわゆる千島アイヌが生まれたという可能性も皆無でないように思います。今後南千島について調査が進む、というか今ロシアの開発で進みつつありますが、その成果が共有されないとこういった疑問は解決されないものがあるのかなあ、と感じております。

それでは擦文の文化とその問題についてはこのぐらいいたしまして、次にオホーツクの文化とその集落について少しお話を伺っていききたいと思います。ひきつづき高瀬先生になるんですが、オホーツク文化というのは千島列島にも相当北の方までであると理解していますけれども、北海道にあるような大きな竪穴住居は北千島にはないと考えていいんでしょうか。

高瀬 そうですね、明確に10mとか15mとかいうような住居は北千島にはないと思います。おそらく、五角形とか六角形を呈する住居も北千島では定着していないと思います。私たちも、占守島で一部だけですけどもオホーツク文化の竪穴住居の発掘を掘っていますが、地表面から見る限り楕円形とか円形が多いですね。規模も小さいため、北海道と全く同じようなものは北千島ではないと考えます。

西脇 北海道に大きな竪穴が残される、まあ7、8世紀ぐらいなんだろうかな、その時期と同じ時期に北千島に住んではいるという理解でいいんでしょうか。

高瀬 北千島はオホーツク文化の遺物がものすごく多いです。続縄文、オホーツク、アイヌ文化期とありますが、遺構の量、遺構の数、貝塚の数からみるとオホーツク文化のものが圧倒的に多いですね。相対的に大

きな人口がオホーツク文化の時期に北千島にもいたと考えます。ただし、堅穴住居は北海道とはかなり違ったものが使われていたというのが印象です。

西脇 有難うございます。そこで熊木先生のお話にあった拠点的な集落という話になると思うんですけども、熊木先生はそういう意味では拠点的な集落というのは今のところオホーツク文化の分布域の中では北海道に特徴的に見られる、というような感じで受け止めてらっしゃるのでしょうか。

熊木 そうですね、肝心のサハリンでは、オホーツク文化の一番終末の頃の南貝塚式と言われる、多分9世紀以降になると思うんですが、その時期の集落の発掘例というのはあるんですけども、それ以前のものが少しわからないので、そういう意味で北海道に特徴的なものかどうかというのは、サハリンのことが分からないという意味ではちょっと難しいですね。ただし、北海道の中では、従来考えられてきたよりも、特定の遺跡に人や資源を集中させるような傾向があるのではと考えているところであります。

西脇 この拠点的な集落について御質問が来ています。拠点的不是な集落とのつながり、横のつながりみたいなものはどの程度分かっているのか。それとも拠点とそれ以外というのはあまりつながりがなくて、拠点だけが大陸とのつながりを維持しているといったふうにお考えなのか聞きたい、ということです。

熊木 まだちょっと思い付きの段階で回答が難しいんですけども、集落間のつながりというところではもちろんあったと思います。ただその大陸との関係という点ではやはり、特定の遺跡と大陸とがある程度ダイレクトにつながっていて、まずはそこに物が集約されるような状況があったのではないかと考えているところです。

西脇 有難うございます。オホーツク文化の場合もサハリン、ロシア領の研究によって理解の進み方がかなり変わってくるといった状況なのかなというふうに感じました。小野先生、トビニタイ文化の住居跡はオホーツクの伝統がかなりあるだろうというお話がありましたけども、熊木先生が指摘された建替えの頻度なんかはいまどのように考えられているのでしょうか。

小野 トビニタイの住居自体発掘調査事例がそんなに多くないので、何とも言えないですけども、ただ今までの調査を見る限り、トビニタイ文化の中でも一番古い、カリカリウス遺跡の大体10世紀初頭の住居があるんですけども、その中には一度つくった堅穴の同じ場所で建て替えるという事例があります。ただそれよりも新しい10世紀後半以降の時期になると、やっぱり建替えの事例というのはないのかなという印象です。

西脇 擦文に近づいてくるといった印象なのでしょうか。

小野 まあそうだと…誘導尋問のようですが、まあそうですね。

西脇 有難うございます。あと骨塚について熊木先生から御紹介があったんですけど、骨塚というオホーツク文化の祭祀の多分、中核的な施設があるんですが、そういうものはトビニタイ文化へはどう受けつがれたというふうに考えてらっしゃいますか。

小野 羅臼のオタフク岩のところで熊送りが行われたのではないかとという痕跡っていうのが見つかっていまして、送り儀礼は行われているのだと思います。ただ住居自体はオホーツク文化の頃から比べると非常に規模が小さくなるので、その中に骨塚を作ったら人が暮らすスペースがなくなってしまうと思います。儀式を行っていたとしたら住居の外に何かそういった祭壇のようなものを作っていた可能性があるのかなというふうに思います。

西脇 アイヌのヌササンのようなイメージなのかなということですが、その祭祀施設が家の外に出る、ということ自体、家の性格が大きく変わるということかと思うので、今後そのあたりの理解が集落の仕組みの理解のうえで重要になってくるような気もしております。

さて残り時間僅かなんですが最後に、家を焼く風習のことについて少し御意見を伺いたいと思います。明治政府が、明治4年ですか、アイヌ民族の特異な風習として知られていた、亡くなった人の家を焼いてしまう風習を禁じる政策を取ります。禁じなきゃいけないと認識されたぐらい、異様な風習と受け取られたものようですが、古代の集落遺跡にもそれに似た風習が見られるというのが事実ですね。熊木先生に伺ってみたいんですが、先生は擦文もオホーツクの堅穴も焼失したと思われるものを調査されましたが、やっぱりアイヌ文化と関係があるとお考えでしょうか。

熊木 オホーツク文化や擦文文化の家を焼く風習を、アイヌ文化の家送り儀礼というものに対比させる考え方が多いのですが、これについては先日あるシンポジウムで問題点を指摘されました。それは、家の神様を送る風習と、家に住んでいて亡くなった人を送る風習というのを、考古学の研究者はごっちゃにして考えているのではないか という批判で、そこはやはり分けて考えるべきではないか。家の神様を家からおろすのと、死者に家を持たせて送るというのを分けて考えたほうがいいのではないかということを民族誌の研究者から指摘されました。あとはやはり、堅穴住居を作らなくなったあとの13世紀14世紀あたりのことがよくわからないというのが大きいので、系譜をたどる上では少し難しい、という二つの問題があるかと思います。

西脇 けれども風習として、立証難しいんだけどやっぱり関係があるとお考えですか。

熊木 オホーツク文化と擦文文化の家を焼くという行為が同一の背景があるのかというところでは私、個人的には疑問を持っているところではありますけども、擦文文化に関しては、墓の少なさの問題や、廃屋墓の痕跡が認められるような例がありますので、そういう意味ではアイヌ文化の家送り儀礼とつながりを持つというのは一定程度の根拠があるのでは、と考えております。一方、オホーツク文化には墓がありますので、擦文文化と全く同一に考えるわけにはいかないでしょう。

西脇 有難うございます。小野先生に伺いたいんですけどトビニタイ文化にもやっぱり、そういう意図的に家を焼いたと考えられるような例があるということでしょうか。

小野 トビニタイ文化の焼失住居ということですが、今まで標津町では発掘調査が数十軒かを対象に行われていますが、実は私自身は擦文文化の堅穴住居を標津で一軒も掘ったことがありませんので、この質問に回答できるだけの知識に乏しいです。しかし今日たまたま標津の堅穴調査を長年行ってきた方が会場にいらっしゃるので、ぜひその人に話を聞いていただきたいと思います。マイクがあれば…

西脇 標津町教育委員会におられた梶田先生がみえておりますので、ぜひお願いいたします。

梶田 いや、びっくりしました。トビニタイ文化の住居の焼失住居っていうか、焼いた住居ですか。私はずっと見てきましたが、焼いたものだなというふうに感じるものは今のところないです。いいでしょうか。

西脇 有難うございます。オホーツクが古くて道東ではアイヌ文化との間にトビニタイが来る、という関係にあるので、アイヌ文化に家を焼く風習が伝わったとすればトビニタイ文化にもあつてしかるべきといった問題もあるんですが、今梶田先生がおっしゃり、熊木先生も指摘されたんですけども、その間がうまくつながらないところがあるようです。高瀬先生に伺いたいんですけども、千島アイヌや樺太アイヌの場合も似たような風習というのはあったということなんでしょうか。

高瀬 家を焼くという記録は知りませんが、樺太の場合、死者が出た家を忌避し、近づかないようにするなどの行為はあったようです。千島ではこの点はよくわかっていません。考古学的に確認された焼失住居については馬場脩の記録をもう一度きちんと見てみる必要がありますが、明確なものはないのではないかと思います。

関連するかどうかわかりませんが、樺太では遺体を家形の木棺に入れて埋葬する風習が知られています。西に頭を向けて埋設するため、東に向けて土葬伸展葬で埋葬する北海道とは異なります。しかし、樺太の葬法は北千島と共通している可能性があります。北千島の1930年代の発掘ですと、遺体を木棺に入れて西の方に頭を向けているものがかなり多かった、という調査結果があるからです。サハリンと北千島はやはり共通性が高いため、千島アイヌは樺太アイヌに起源し、語彙の共通性、たばこケースや杓子の共通性はその証拠であるとする見解もあります。土器や堅穴住居にも共通性があることは確かですので、千島アイヌの起源を考えるうえでも、住居廃絶や埋葬の風習もふくめて、樺太、北海道、北千島のあいだの関係はまだ幅広く見てみる必要があるように思います。

西脇 どうも有難うございました。19世紀20世紀の民族誌だとおばあさんが亡くなったとき家を焼いて持たせる、という聞き取りが多いんですけども、18世紀の末の文献だと親父が死んだときに焼くんだということを書いております。奥さんが死んだときは焼かないと。そういうことで同じアイヌの中でも焼く理由の考え方はかなり時代的な変遷などもあり、また、熊木先生もおっしゃったようにオホーツクの場合は焼く必然性みたいなものも異なるだろうといったところで、大変興味深い風習ではあるが、まだまだ説明を深めないといけないのかなあということをお話聞いても思ったところです。

さて私今、仕事では縄文遺跡の世界遺産登録というのをやっております、世界遺産とかっていうことになる、遺跡群の価値の主張というのをしないとイケないですね。この遺跡群がどのように大事なのか。それをその遺跡そのものから具体的に主張をする仕事を最近するようになりました。しかしこの仕事は「うちの縄文遺跡は世界遺産にならないので、大したことないのか」みたいな反応を結構招いてまして、文化財の保存と活用ということではあんまりいい方向に働いてない部分もあるなあというのが、十年ほどやってきての反省でございます。

せっかくこの北海道固有の、古代集落遺跡については何とか、遺跡群全体の価値を高めるような方向で、それを地域の文化の向上に生かすような方向で何とか価値の説明ができないかなあというのが個人的には希望するところです。今日もお話の中ではまだ明快な、これでわかったという印象を皆様に差し上げることが難しかったと思うんですけども、そういうものが皆様にすんなり、ストーンと落ちるようになるまでまた頑張っていきたいと思っております。レジュメの表紙で財の字が木偏になってたということで、まだ材料の段階ですが、これが何とか貝偏になるように引き続き頑張っていきたいと思っております。講師の先生方もどうぞよろしくお願いいたします。それでは司会のほうにお返ししたいと思います。

閉会

高久 長時間にわたり、先生方も、それからお聞きになった方も御苦勞様でございました。最後に閉会の挨拶として、北海道文化遺産活用活性化委員会の安部事務局長から閉会にあたり一言御挨拶を申し上げます。

安部事務局長 皆さんお疲れ様でした。本日のフォーラムの閉会に当たりまして一言御挨拶を申し上げます。本日会場にお見えの皆様におかれましては冷え込む中、また足もとの悪いところ会場まで足をお運びくださり、長い時間にわたり御参加をいただきまして有難うございました。また今日のフォーラムを非常に有意義なものとしていただきました講師の熊木先生、高瀬先生、小野先生、そして司会進行をしていただきました西脇先生に心より感謝を申し上げます。

北海道では先ほどもお話がありましたように来年4月にアイヌ文化復興・創造の拠点の「ウポポイ」がオープンするほか、「北海道・北東北の縄文遺跡群」が今年度の国の世界文化遺産の推薦候補に選定され、ユネスコ世界遺産センターへ推薦書提出の準備が進められており、アイヌ文化や埋蔵文化財に対する関心が高まっていると考えております。このような中、今回のフォーラムでは講師の先生方から御専門の古代集落遺跡やアイヌ遺跡などの研究成果を丁寧に紹介していただきますとともに、擦文文化、オホーツク文化の集落遺跡の価値、家を焼く風習、千島アイヌなどについて熱心に討論をいただき、北海道に先人が残した遺産とその意味について、新たな発見や価値・魅力など理解を深めることができ、貴重な機会となりました。重ねて先生方にお礼を申し上げたいと思います。

このフォーラムが参加いただきました皆様にとって、北海道の文化遺産の理解とその遺産を継承していくことの意義についてお考えいただく機会となりますことを祈念いたしまして、閉会の御挨拶とさせていただきます。本日は誠に有難うございました。

高久 以上をもちまして全ての日程を終了させていただきます。本日は本当にありがとうございました。

2019 年度 地域の文化財普及啓発フォーラム

北海道の古代集落遺跡 記録集

2020 年 3 月 30 日発行

編集・発行 北海道文化遺産活用活性化実行委員会
(代表者 会長 角 幸博)

〒060-0002 札幌市中央区北 2 条西 7 丁目 かでる 2・7 ビル 9 階
一般財団法人北海道文化財保護協会 気付

電話 (011) 271-4220

Email: bunho@abelia.ocn.ne.jp

URL: <http://hbm.jp.com/>